学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学　2023 春

株式会社ディーシーアイ

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度との比較から推定できることにも言及しています。

目次

1. 全体概況 …… 3
　項目別および領域別集計値分布 …… 3
　領域別集計値分布の科目区分比較 …… 4
2. 項目別の昨年同時期比較(一覧) …… 5
3. 目標達成(Q9)及び学びの成果(Q10-12)への寄与度 …… 6
4. 領域ごとのサマリー、回答率について …… 7
5. 項目別集計結果分析 …… 8

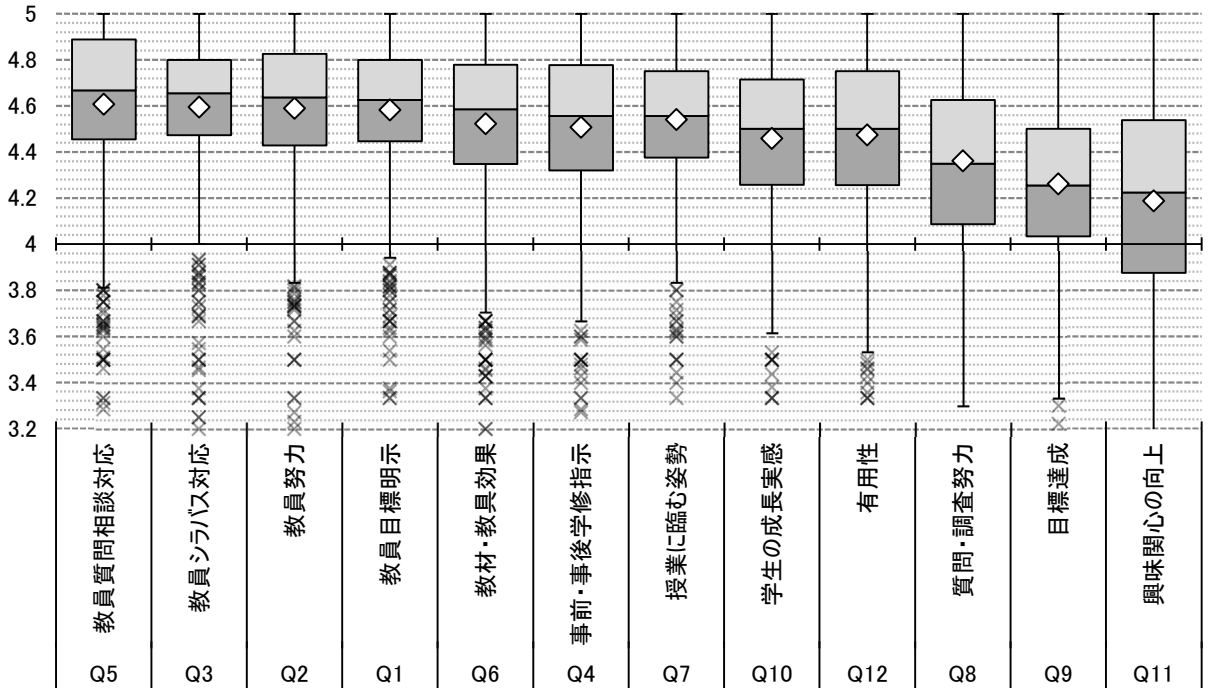
参考資料１　実施率／回収率 …… 19
　1-1 アンケート実施率(回収率)科目区分別 …… 20
　1-2 アンケート実施率(学部) 2005 年度春学期～2023 年度春学期 …… 21

参考資料２　自由記述回答　頻出キーワード分析 …… 23
　自由記述回答 頻出キーワード分析について …… 24
　＜集計グラフ＞
　【効果点】「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点 …… 29
　　全学 …… 30
　　学部別 …… 31
　　回答人数帯別 …… 32
　　学年別 …… 33
　　出現率前回比較　全学 …… 34
　　出現率前回比較　学部別 …… 35
　　出現率前回比較　回答人数帯別 …… 39
　　出現率前回比較　学年別 …… 42

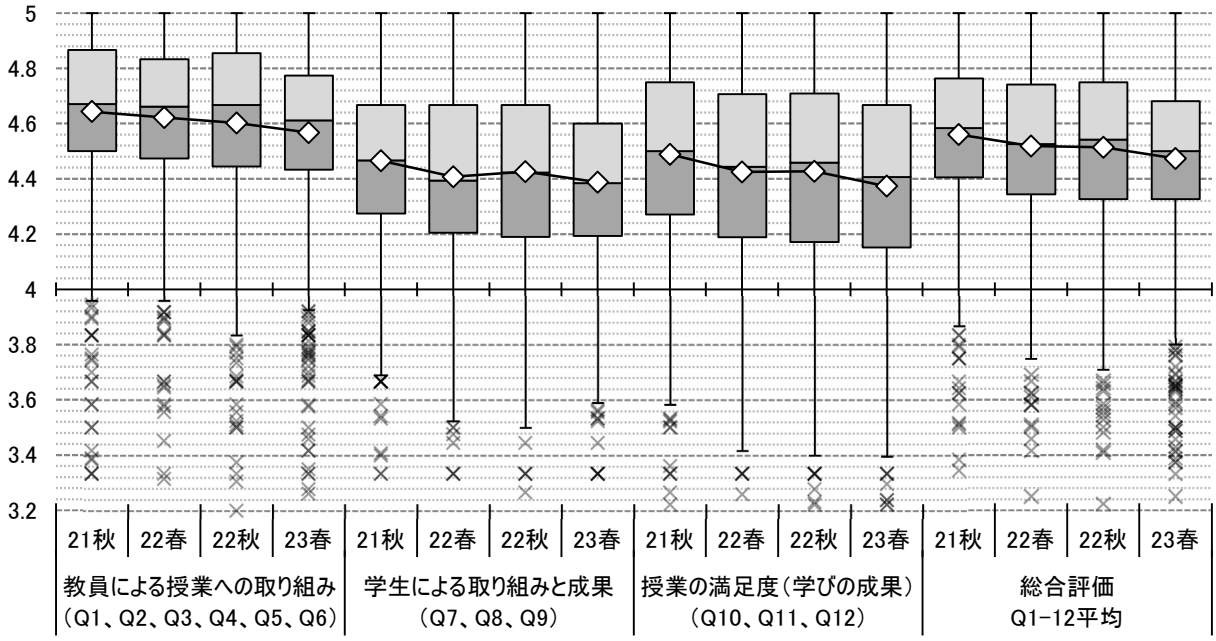
　【改善点】改善できる点 …… 45
　　全学 …… 46
　　学部別 …… 47
　　回答人数帯別 …… 48
　　学年別 …… 49
　　出現率前回比較　全学 …… 50
　　出現率前回比較　学部別 …… 51
　　出現率前回比較　回答人数帯別 …… 55
　　出現率前回比較　学年別 …… 58

■全体概況

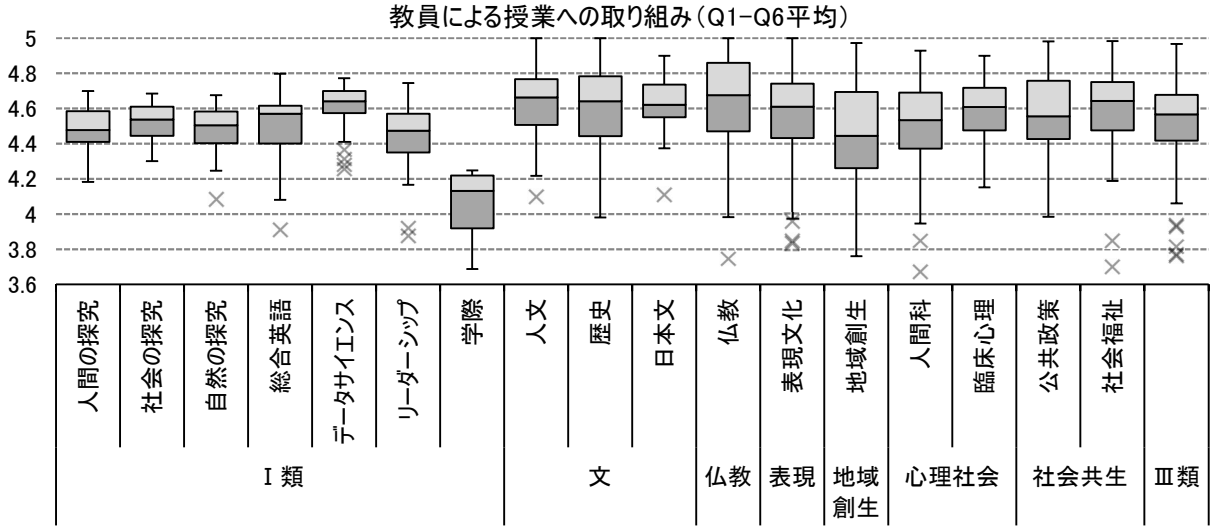
評価項目のうち、選択肢構造を同じくする Q1～Q12 の授業別集計値の分布は下図の通りです。左から中央値で降順ソートしました。Q5 教員質問相談から Q1 教員目標明示までの 4 項目は授業間の差異も小さく、総じて高い評価と言えます。右端の Q11 興味関心の向上は、箱の下端が 4.0（「どちらかと言えばそう思う」に相当）に届かず、Q8 調査・質問努力や Q9 目標達成も低調です。

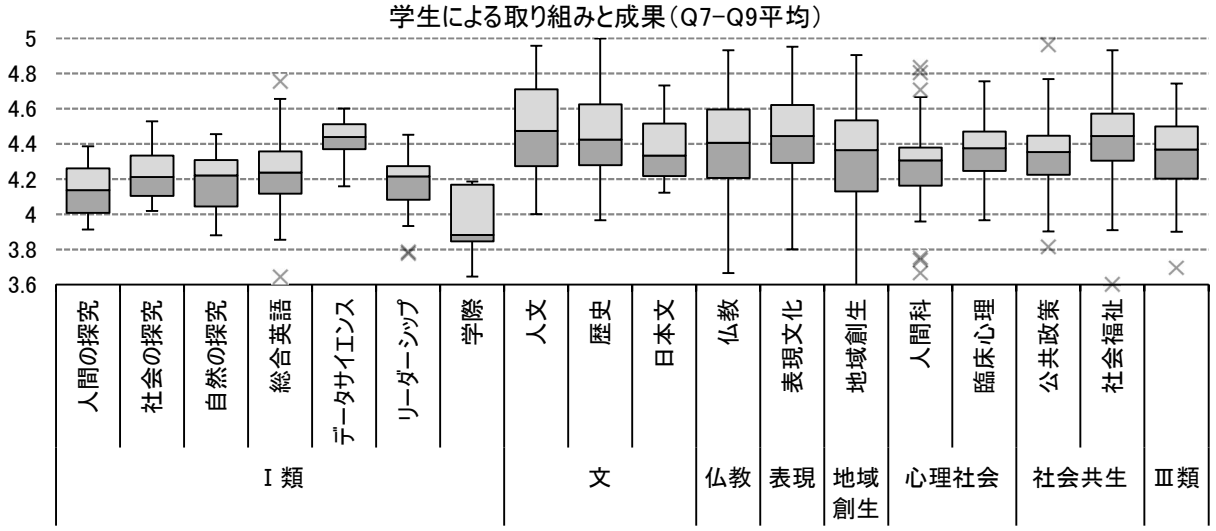


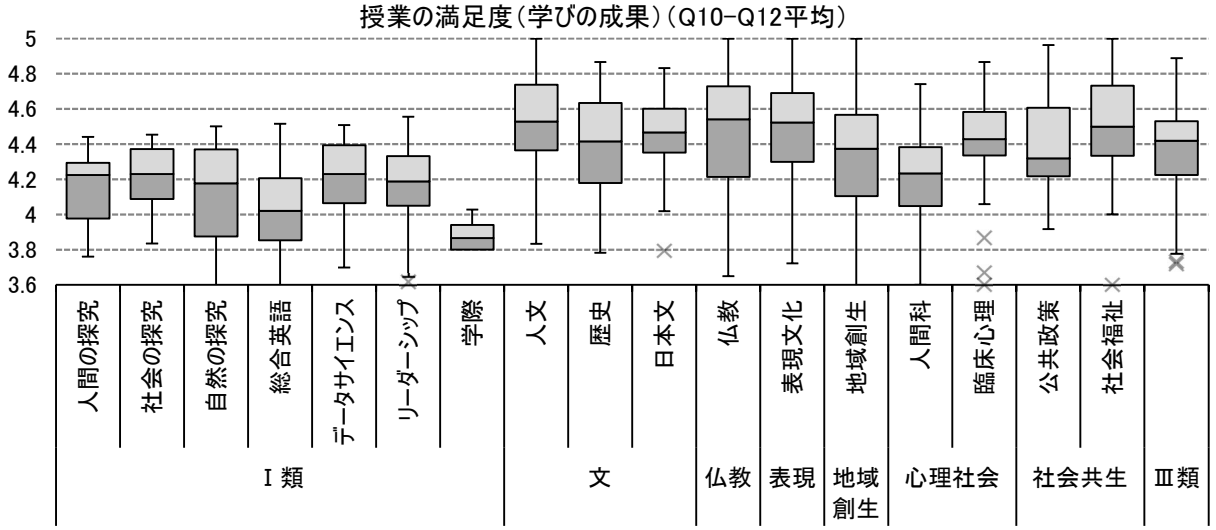
下図は、領域ごとに算出した平均値の分布です。「教員による授業への取り組み」は相対的に高い評価を得ていますが、どの領域も昨年同時期を平均値などで下回ります。授業の満足度（学びの成果）は他の項目と比べて、授業間の差が大きめであり、箱の下端の低下も目につきます。



以下は、領域毎の集計値分布を科目区分別に調べてみた結果です。有効回答数 5 未満の授業を除外の上、授業数が 5 以上の科目区分のみ抽出して表示してあります。Ⅰ類の各授業は、学生による取り組みと成果、授業の満足度（学びの成果）で、他の区分と比べてやや低調なようです。







■項目別の昨年同時期比較（一覧）

昨年春学期との比較の結果（学生の回答から直接算出したもの）は下表に示す通りです。昨年からの変化量（前年同期比）の実測値で降順ソートしてあります。Q14 平均学修時間は有意に向上していますが、他項目は Q9 を除くすべてが 1 年前の水準を有意に下回りました。

項目	実施	n	平均	標準偏差	前年同期比	
					実測値	t検定P値
Q14平均学修時間	22春	24,686	3.01	1.07		
	23春	26,031	3.08	1.11	△.067	0.0000 **
Q9目標達成	22春	24,686	4.18	0.82		
	23春	26,031	4.18	0.83	▼.007	0.1786
Q7授業に臨む姿勢	22春	24,686	4.48	0.72		
	23春	26,031	4.46	0.74	▼.016	0.0064 **
Q8質問・調査努力	22春	24,686	4.26	0.86		
	23春	26,031	4.23	0.90	▼.030	0.0001 **
Q10学生の成長実感	22春	24,686	4.40	0.80		
	23春	26,031	4.37	0.82	▼.032	0.0000 **
Q3教員シラバス対応	22春	24,686	4.61	0.64		
	23春	26,031	4.58	0.66	▼.034	0.0000 **
Q6教材・教具効果	22春	24,411	4.48	0.78		
	23春	25,779	4.45	0.82	▼.036	0.0000 **
Q12有用性	22春	24,686	4.42	0.81		
	23春	26,031	4.38	0.83	▼.036	0.0000 **
Q1教員目標明示	22春	24,686	4.58	0.68		
	23春	26,031	4.53	0.71	▼.044	0.0000 **
Q2教員努力	22春	24,686	4.57	0.69		
	23春	26,031	4.52	0.72	▼.047	0.0000 **
Q13出席率	22春	24,686	4.81	0.51		
	23春	26,031	4.76	0.57	▼.053	0.0000 **
Q4事前・事後学修指示	22春	24,686	4.51	0.77		
	23春	26,031	4.45	0.80	▼.060	0.0000 **
Q11興味関心の向上	22春	24,686	4.07	1.03		
	23春	26,031	4.01	1.06	▼.061	0.0000 **
Q5教員質問相談対応	22春	24,686	4.57	0.74		
	23春	26,031	4.50	0.78	▼.063	0.0000 **

各項目の低下幅はそれほど大きなものではありませんが、比較的大きな低下が観測されている Q5 教員質問相談対応や Q4 事前・事後学修指示は、「学生が主体的に取り組む学びを支える活動」であるという点で早期の巻き返しが必要と考えます。先生方によるこれらの活動（支援）が十分に機能しないと、学生は不明や疑問を抱えたときにその解消を効果的に図れず、その先にある新たな興味との出会いも遠のいてしまう（＝Q11 興味関心の向上の低下）可能性があります。また、学びに十分な支援が得られないことで、時間を掛けて頑張ってみても（＝Q14 平均学修時間が伸びても）、Q9 目標達成の向上が抑えられてしまったり、何にどう取り組めばよいか具体的にわからず、結果的に Q8 質問・調査努力に力が入らなかったりするのではないでしょうか。如上のデータはこうした見立て（仮説）と合致する動きを示しているようにも見受けられます。

■目標達成（Q9）及び学びの成果（Q10-12）への寄与度

Q9 目標達成、Q10 学生の成長実感、Q11 興味関心の向上、Q12 有用性への寄与度を、先生方の取り組みに関する Q1～Q6 の各項目を説明変数とする重回帰分析で推定した結果は下表の通りです。いずれの項目を目的変数とした場合も、決定係数は 0.3 前後とあまり大きな値にはなっておらず、先生方の授業に対する取り組み方（教え方）の改善だけでは、その効果に限界がありそうです。

	Q9目標達成		Q10学生の成長実感		Q11興味関心の向上		Q12有用性	
	偏回帰係数	t 値	偏回帰係数	t 値	偏回帰係数	t 値	偏回帰係数	t 値
Q1教員目標明示	0.132	16.34	0.137	17.63	0.068	8.42	0.111	14.27
Q2教員努力	0.137	15.89	0.138	16.62	0.158	18.35	0.143	17.14
Q3教員シラバス対応	0.057	7.82	0.060	8.49	-0.008	-1.02	0.059	8.41
Q4事前・事後学修指示	0.091	13.46	0.057	8.74	0.047	6.92	0.063	9.78
Q5教員質問相談対応	0.042	5.88	0.054	7.88	0.063	8.78	0.070	10.24
Q6教材・教具効果	0.183	24.22	0.254	34.91	0.292	38.70	0.250	34.33
決定係数	0.274		0.332		0.278		0.328	

一方、説明変数を、Q7 授業に臨む姿勢、Q8 質問・調査努力（学生による取り組み）まで拡張してみると、下表のように決定係数はより大きな値を示します。Q7 授業に臨む姿勢（授業の目標の達成に向けた真剣な取り組み）と Q8 質問・調査努力（不明解消に向けた、調べたり訊いたりする行動）を如何に引き出すかが、学びの成果を大きくする上での要件であると言えそうです。

	Q9目標達成		Q10学生の成長実感		Q11興味関心の向上		Q12有用性	
	偏回帰係数	t 値	偏回帰係数	t 値	偏回帰係数	t 値	偏回帰係数	t 値
Q1教員目標明示	0.080	11.55	0.100	13.92	0.035	4.55	0.081	10.92
Q2教員努力	0.063	8.53	0.086	11.10	0.112	13.70	0.100	12.50
Q3教員シラバス対応	0.021	3.31	0.034	5.18	-0.030	-4.35	0.038	5.61
Q4事前・事後学修指示	0.012	2.08	0.002	0.35	-0.005	-0.75	0.019	3.07
Q5教員質問相談対応	-0.024	-3.87	0.009	1.35	0.019	2.85	0.034	5.11
Q6教材・教具効果	0.101	15.54	0.196	28.87	0.241	33.54	0.203	28.95
Q7授業に臨む姿勢	0.314	51.68	0.226	35.66	0.184	27.51	0.191	29.31
Q8質問・調査努力	0.297	52.00	0.200	33.62	0.209	33.21	0.157	25.66
決定係数	0.473		0.428		0.361		0.392	

Q7 授業に臨む姿勢、Q8 質問・調査努力を目的変数、Q1～Q6 の各項目を説明変数とする重回帰分析の決定係数は、それぞれ 0.308、0.216 と小さな値しか示しておらず、評価項目に並ぶ項目での改善だけでは、学生による取り組みの改善には限定的な効果しか見込めません。真剣な授業への取り組みを引き出すには、学生に「(この科目を) 学ぶことへの自分の理由」を持たせる必要があるはずです。課題の提出を求めたり、基準に満たない場合にペナルティを与えたりするのは外的な動機づけに過ぎず、学生にとって「自分の理由」にはなり得ません。授業で学ぶことを用いて解決すべき自分事としての問いを、オリエンテーションや授業ごとの導入フェイズで提示できるかどうかが問われるところではないでしょうか。調べたり、訊いたりして不明を解消する行動を起こさせるには、まずは不明の所在に気づかせなければならず、ここでも「問い」の役割が大きいはずです。不明解消に実際の行動を重ねる中で、その方策も身につき、改善が進みます。単元／授業ごとに適切な問いを立てられるかが、結果的に実りの大きな学びを実現すると考えます。

「教員による授業への取り組み」（Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6）

相対的に高い評価を得ていますが、昨年度以降、徐々に低下が続いています。目標の明示やシラバスの準拠など、準備と意識の持ち方で改善が可能な項目でも、昨年春との比較で有意な低下が観測されました。下方の外れ値を含むと、分布の尾はかなり長く、改善が遅れた授業のキャッチアップを支援する仕組みの一層の整備が求められているのではないでしょうか。

「学生による取り組みと成果」（Q7、Q8、Q9）

改善が進んだことを示すデータは得られず、平均値などは昨年春をわずかながら下回ります。適切な目標設定とそれを達成するために必要な取り組みの指示などに加え、学生が個々に取り組んだ成果を教室に持ち寄っての協働の拡充（後述）も必要かと思われます。授業に臨む姿勢への自己評価と授業外学習に充てている実時間が一致しないケースもまだ少なくありません。

「授業に対する満足度（学びの成果）」（Q10、Q11、Q12）

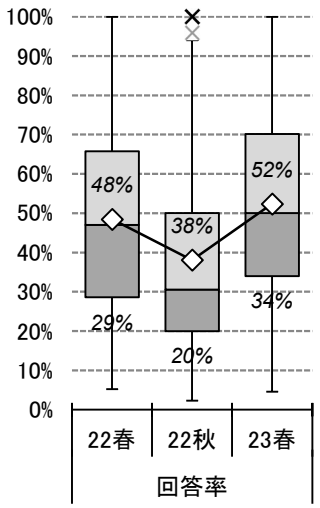
授業間の差は他の 2 領域に比べても大きく出ており、平均値などの低下も目立ちます。学び終えたときの振り返りを通じた「成果のたな卸し」や学生が自分事と捉え得る「適切な問い」、学びの先にあるものに触れさせる機会（先輩の体験談なども含む）の充実など、様々な面から改善策を講じていく必要があります。科目区分の中での優良実践の共有にも注力しましょう。

「出席率、平均学修時間」（Q13、Q14）

出席率は 4 年以外の各学年で、昨年春を下回りました。「90%以上」を選んだケースが 8 割を超えますが、アンケートに答えてない学生を含むと、実際はこの値を下回るかもしれません。平均学修時間は伸びましたが、学修時間が不足しながら目標が達成できている授業もあり、該当する場合、学生のポテンシャルを余している（伸ばしきれていない）可能性もありそうです

【ご参考】回答率について

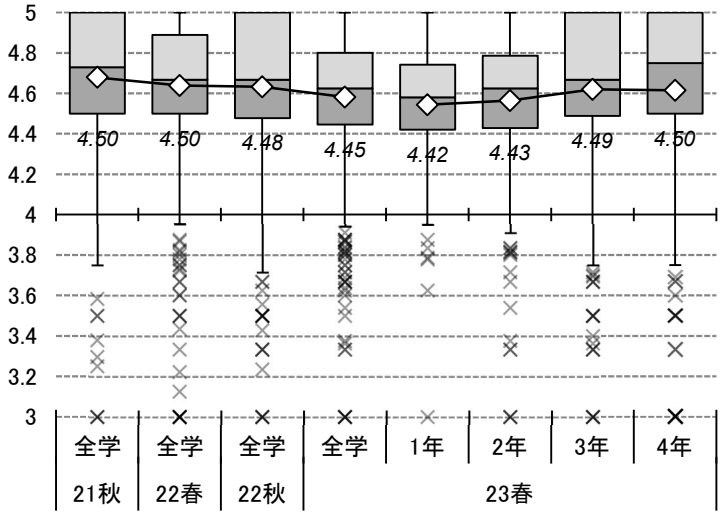
右図は、授業ごとの回答率（回答数÷履修者数）の分布の推移です。毎回の指摘で恐縮ですが、授業に対して好意的な評価をしている学生と、何らかの不満を抱える学生で回答率に差が生じれば、学生の目で見た授業の正しい姿がデータに現れず、「より良い授業の実現に向けた課題形成」の拠り所を欠くという不利益を、先生方ご自身が被ることになりかねません。自由記述意見には、授業改善に繋がり得るヒントも散見されますが、回答を十分に集めないことには、そうした示唆も得られなくなってしまいます。教室での声掛け／指導による回答促進は十分に行われていると思いますが、学生の回答意欲を高めるには、アンケートを介して寄せられた声に真摯に応えることが重要です。



■項目別集計結果分析

各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を直近 4 回分の追跡結果と当期の学年別で表示した四分位図と、他項目との単相関及び偏相関の一覧です。四分位図において「箱」の直下に表示した数字は第 1 四分位数です。これを下回っている場合、キャッチアップが急務とお考え下さい。箱ひげ図の右側に配した相関係数の一覧では、単相関と偏相関の双方について各々の相関行列で上位 25%に含まれるケースに網掛けを施してあります。高い偏相関で結ばれる項目は、それぞれ別個に改善策を講じるよりも、セットで改善を考えた方が成果を得るケースが多いはずです。

Q1　教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した

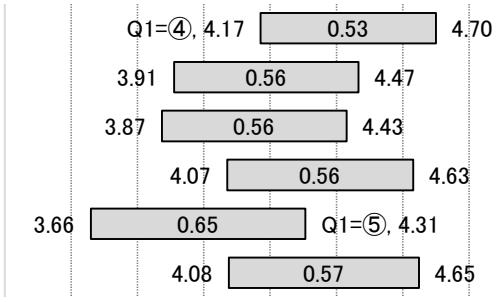


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示		
Q2教員努力	0.704	0.361
Q3教員シラバス対応	0.605	0.208
Q4事前・事後学修指示	0.523	0.135
Q5教員質問相談対応	0.526	0.060
Q6教材・教具効果	0.574	0.072
Q7授業に臨む姿勢	0.450	0.019
Q8質問・調査努力	0.365	−0.008
Q9目標達成	0.439	0.053
Q10学生の成長実感	0.474	0.059
Q11興味関心の向上	0.400	−0.026
Q12有用性	0.462	0.042
Q13出席率	0.091	−0.013
Q14平均学修時間	0.143	0.004

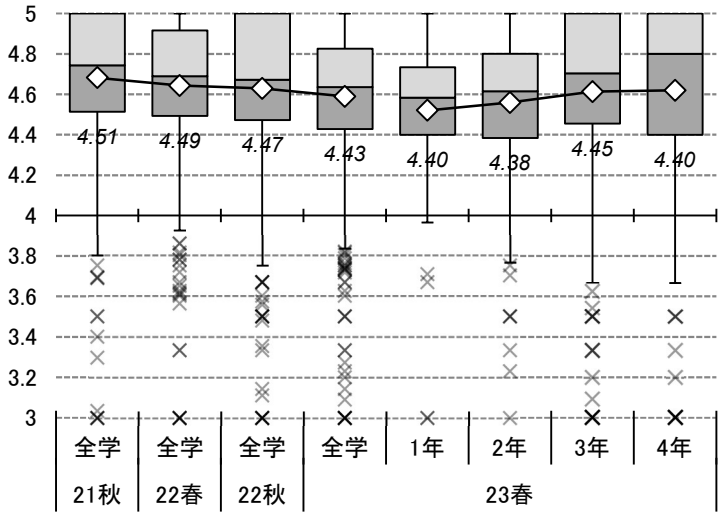
総じて高い評価であるものの、平均値は連続して低下しており、昨年同時期との比較でも有意なマイナスが観測されています。4.0 ポイント（「どちらかと言えばそう思う」に相当）に届いていない授業は 3.7%を占めました。特に強い相関で結ばれているのは、Q2 教員努力です。相関の背景には、「目指しているところを予め明確に示しておかなければ、先生方の行動の一つひとつを目標達成のために行われているものと学生は認識できない」、あるいは「先生方の側での目標設定の曖昧さが提示の弱さの原因になっている場合、目標を達成させるための努力そのものが不十分／方向性を持たないものになってしまう」といったところが想定されます。

明確な目標提示は学生に努力の方向を示すだけでなく、振り返りに際しての基準となるものを与える機能も持ち得ます。メタ認知・適応的学習力の獲得に不可欠な振り返りを的確に行わせるためにも、目指すところは明確に示す必要があります。目標を具体的且つ明確なものにするには「学び終えたときに解くべき課題／答えを作るべき問い」を設定するのが最も簡便で効果的な手段のひとつです。シラバスにもそのような形で表現している授業が見られますので、参考にしたいところです。相関行列（上右図）に見る通り、Q7～Q12 の各項目との相関係数はそれほど大きな値ではありませんが、次ページに掲載のグラフを見ると、この質問（Q1）に「⑤そう思う」を選んだ学生と「④どちらかと言えばそう思う」を選んだ学生の差は 0.53～0.65 と小さからぬ値であり、

特に大きな影響が及んでいるのは、Q11 興味関心の向上です。解くべき問いは、学んでいることがどこに繋がっているかを把握するのにも欠かせません。今回の集計における、⑤を選択した割合は 63%、④は 30%でした。

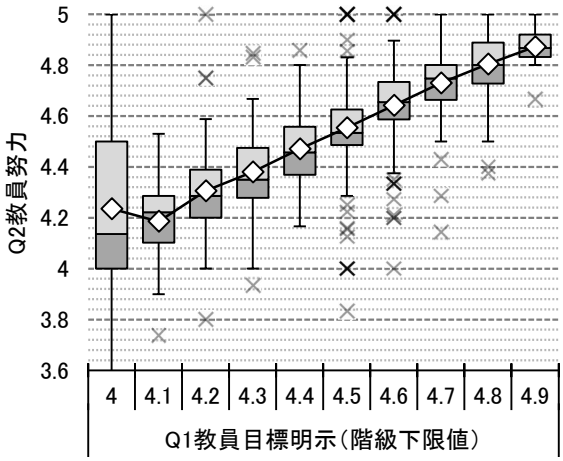


Q2　教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ



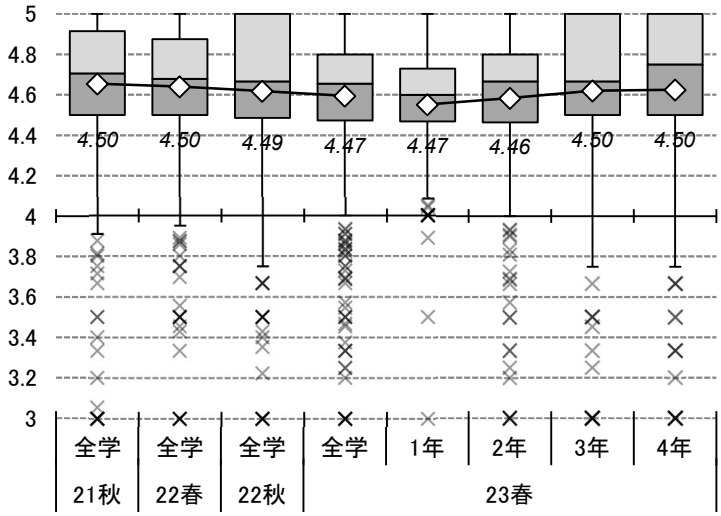
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.704	0.361
Q2教員努力		
Q3教員シラバス対応	0.614	0.176
Q4事前・事後学修指示	0.524	0.074
Q5教員質問相談対応	0.593	0.188
Q6教材・教具効果	0.639	0.188
Q7授業に臨む姿勢	0.485	0.062
Q8質問・調査努力	0.384	−0.018
Q9目標達成	0.456	0.024
Q10学生の成長実感	0.495	0.024
Q11興味関心の向上	0.450	0.046
Q12有用性	0.493	0.041
Q13出席率	0.102	0.005
Q14平均学修時間	0.136	−0.020

強い相関で結ばれている Q1 と連動して、平均値が徐々に低下してきています。4.0 ポイントに届かない授業は、昨年同時期の 2.5%に対して 4.2%まで増えました。改善を図るには Q1 の立て直しが不可欠ですが、右図（Q1 の換算得点［平均］を 0.1 ポイント刻みで階級化し、各階級における Q2 教員努力の換算得点分布を調べたもの）で各箱の下端に届いていない場合、他にもどこかに解消すべきボトルネックを抱えているはずです。



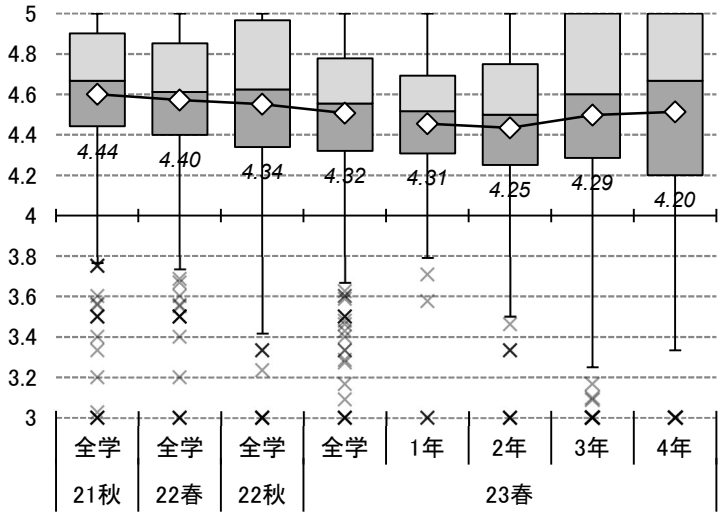
Q3　教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った（グラフは次ページに掲載）

4.0 ポイント未満の授業は、昨年同時期の 2.6%から 3.7%に増えています。質問文の内容を実現するには、シラバスの起草時点で、各回の授業にどのような学習内容を配列するかを所要時間の正確な見立ての下、具体的且つ現実的に計画しておく必要があるはずです。不測の事態で計画変更がやむを得ない場合も想定した起草なら、「場当たり的な変更」とは学生の目にも映りにくいのではないでしょうか。授業の進行だけでなく、評価基準（観点×規準）が提示されていた通りだったか、変更に際して十分な説明をしたかなども、この質問（Q2）への回答を変えそうです。



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.605	0.208
Q2教員努力	0.614	0.176
Q3教員シラバス対応		
Q4事前・事後学修指示	0.499	0.147
Q5教員質問相談対応	0.495	0.071
Q6教材・教具効果	0.553	0.129
Q7授業に臨む姿勢	0.424	0.056
Q8質問・調査努力	0.329	−0.010
Q9目標達成	0.389	0.020
Q10学生の成長実感	0.422	0.031
Q11興味関心の向上	0.347	−0.051
Q12有用性	0.419	0.038
Q13出席率	0.100	0.017
Q14平均学修時間	0.104	−0.046

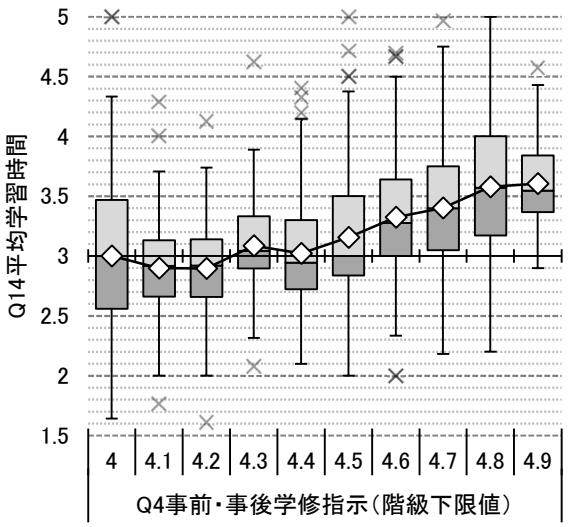
Q4　教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した



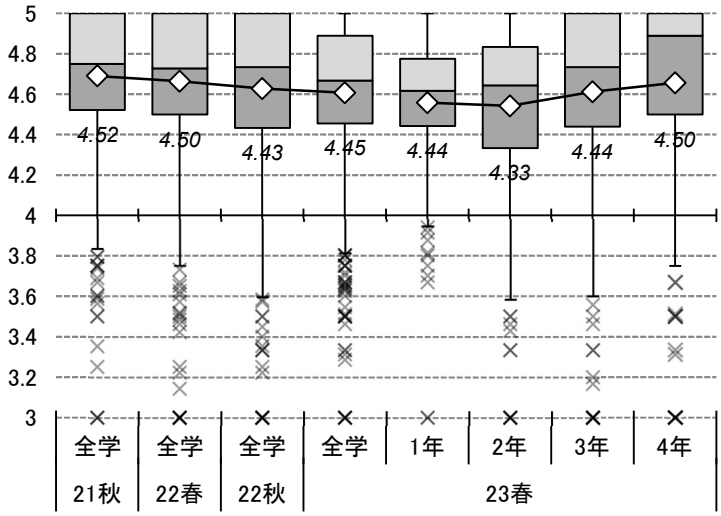
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.523	0.135
Q2教員努力	0.524	0.074
Q3教員シラバス対応	0.499	0.147
Q4事前・事後学修指示		
Q5教員質問相談対応	0.485	0.138
Q6教材・教具効果	0.495	0.100
Q7授業に臨む姿勢	0.403	0.029
Q8質問・調査努力	0.368	0.066
Q9目標達成	0.372	0.013
Q10学生の成長実感	0.382	−0.006
Q11興味関心の向上	0.336	−0.021
Q12有用性	0.384	0.018
Q13出席率	0.085	−0.009
Q14平均学修時間	0.231	0.147

4.0 ポイント未満の授業は 6.9%まで増えています。Q14 平均学修時間との間には比較的大きな偏相関係数が観測されいます。教室でしかできないこと（対話などの協働を始めとする学習活動）と、学生が個々に取り組めることを区分けし、前者に重きを置いた授業を実現するための起点となるのもこの項目（Q4）であると考えられます。

右図において、平均値の上昇（折れ線の傾き）が連続したものになるのは、{Q4 事前・事後学修指示≧4.5} のときであり、この値未満の場合、先生方からの指示が学生の行動に十分な影響（効果）を及ぼさない可能性があります。また、各箱の下端に届いていない場合、十分に時間を掛けることを求める内容になっていたか、学生のレディネスを超えた内容で「やろうとしてもできない」状態を作らなかったか、点検が必要かと思われます。

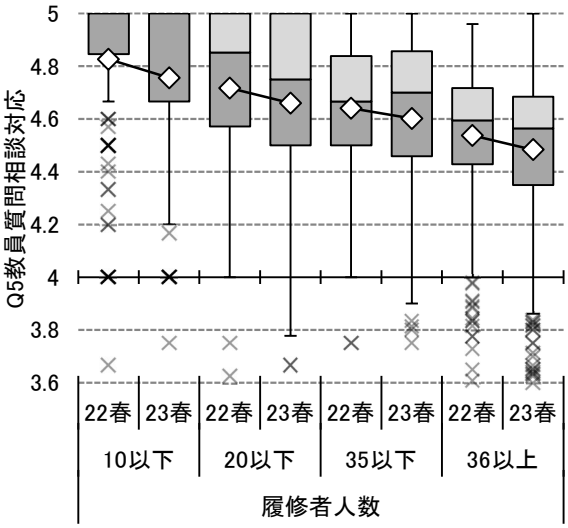


Q5　教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた



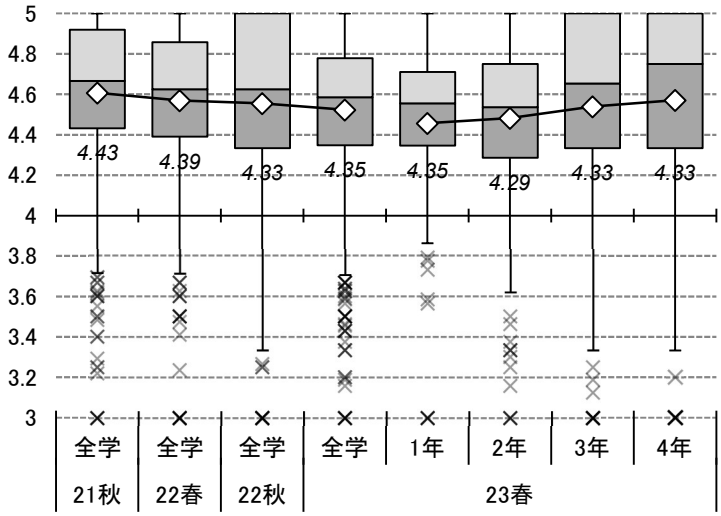
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.526	0.060
Q2教員努力	0.593	0.188
Q3教員シラバス対応	0.495	0.071
Q4事前・事後学修指示	0.485	0.138
Q5教員質問相談対応		
Q6教材・教具効果	0.579	0.215
Q7授業に臨む姿勢	0.412	0.023
Q8質問・調査努力	0.376	0.093
Q9目標達成	0.372	−0.031
Q10学生の成長実感	0.412	0.000
Q11興味関心の向上	0.380	0.015
Q12有用性	0.419	0.028
Q13出席率	0.084	0.003
Q14平均学修時間	0.120	−0.027

4.0 未満の授業は 5.6%（昨年同時期は 3.4%）まで増えています。Q6 教材・教具効果との間に比較的強固な相関が観測されているのは以前と同じです。質問や相談に応じる中で学生が躓きやすいポイントを把握すれば、教材の選択などにも反映できるはずです。教室が大人数になれば、個々に対応するのは難しくなりますが、右図の通り、比較的少人数の授業でも平均値が低下しています。質問や相談に先生が答えるだけでは、不明や疑問を解消する方法と姿勢を学生は学べません。



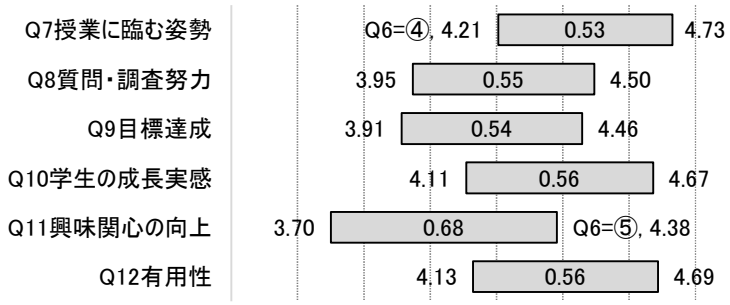
ときには疑問を教室に差し戻し、学生同士等で解消を図らせるのも好適です。形は違いますが、質問を拾い上げ、その解決を支援したことに変わりはなく、評価の改善も期待できそうです。

Q6　教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった

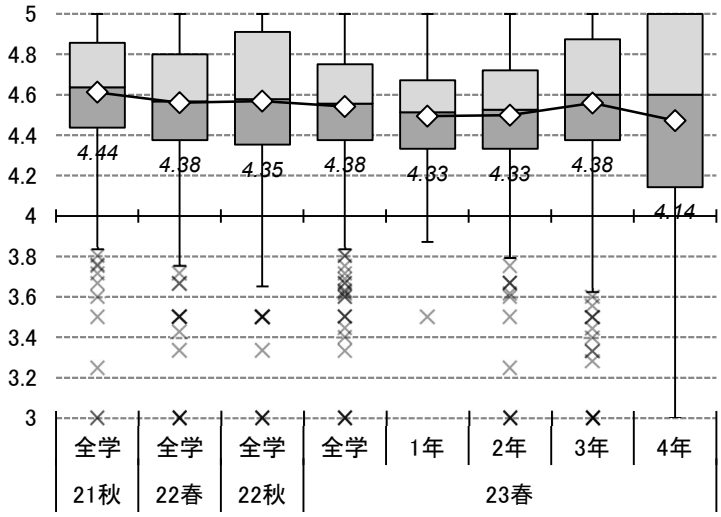


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.574	0.072
Q2教員努力	0.639	0.188
Q3教員シラバス対応	0.553	0.129
Q4事前・事後学修指示	0.495	0.100
Q5教員質問相談対応	0.579	0.215
Q6教材・教具効果		
Q7授業に臨む姿勢	0.467	0.051
Q8質問・調査努力	0.371	−0.039
Q9目標達成	0.448	0.023
Q10学生の成長実感	0.513	0.077
Q11興味関心の向上	0.488	0.114
Q12有用性	0.510	0.085
Q13出席率	0.081	−0.027
Q14平均学修時間	0.119	−0.051

4.0 ポイント未満の授業は 7.4%（昨年は 4.6%→6.2%）まで増えました。この質問に「⑤そう思う」を選んだ学生は、のべで 60%を占めますが、「④どちらかと言えばそう思う」しか選べないと、Q9 目標達成や Q11 興味関心の向上も 4.0 ポイントに届かなくなります。同じ科目で同じ教材を使っていたとしても、学生が備えるもの（前提理解や問題意識、興味の所在）に昨年と違いがあれば、反応が違ったものになるのは半ば当然の帰結です。授業ごとに提出させたリフレクション・シートへの記載なども参考に、反応の様子を確かめながら、必要に応じて教材の変更／アレンジをすべきです。

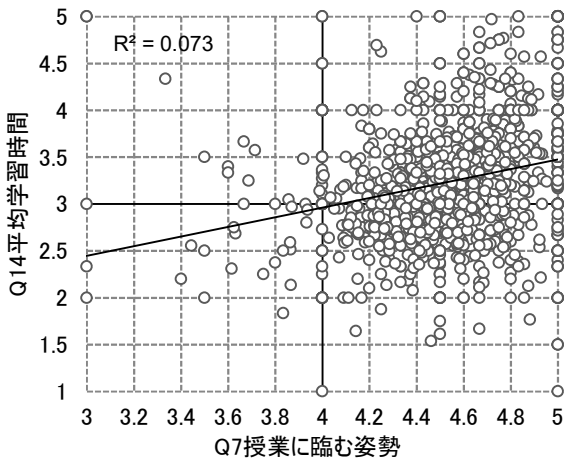


Q7　私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ



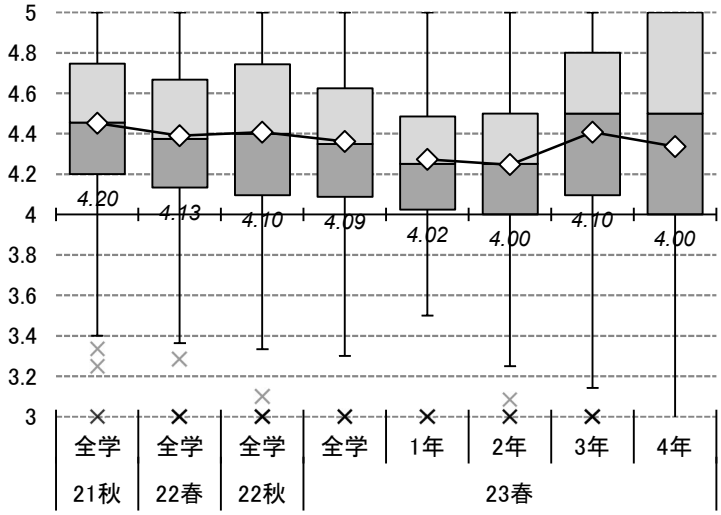
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.450	0.019
Q2教員努力	0.485	0.062
Q3教員シラバス対応	0.424	0.056
Q4事前・事後学修指示	0.403	0.029
Q5教員質問相談対応	0.412	0.023
Q6教材・教具効果	0.467	0.051
Q7授業に臨む姿勢		
Q8質問・調査努力	0.582	0.264
Q9目標達成	0.604	0.233
Q10学生の成長実感	0.539	0.084
Q11興味関心の向上	0.481	0.021
Q12有用性	0.500	0.074
Q13出席率	0.218	0.138
Q14平均学修時間	0.248	0.064

昨年同時期からの低下はそれほど大きくありません。4.0 ポイント未満の授業は 3.1%でした。この項目（Q7）を目的変数、先生方の授業への取り組みに関する Q1～Q6 の各項目を説明変数とする重回帰分析の決定係数は 0.298 とあまり大きな値を示していないことから、評価項目以外にも改善の糸口を探す必要があろうかと思われます。履行が不十分なケースへのペナルティといった外的なアプローチよりも、学生が自分事にできる好適な問いの設定などが奏功すると思われます。Q8 質問・調査努力との相関が強固なことを利用すれば、「授業準備で個々に調べてきたことを教室で持ち寄り、グループでの議論する場面」を増やす（個々のタスクに「他者への貢献」という要素を与える）ことでも、Q7 と Q8 の改善を同時に図れるかもしれません。なお、Q14 平均学修時間との相関は、右図に見る通り、依然としてあまり強いと



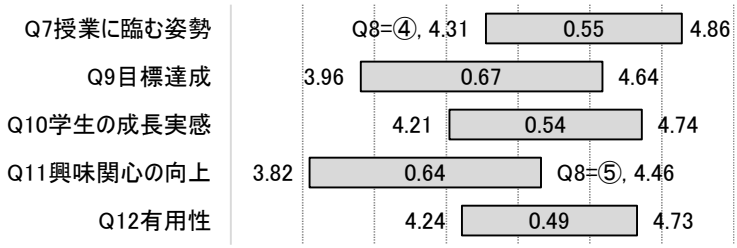
は言えない状況です。近似線を下方に離れ、第 4 象限に位置する授業では、「十分な時間を授業外の学習に投じることのないまま、授業には真剣に取り組んだとの認識を持つ学生」が多く含まれているということであり、課題の与え方（内容と分量、取り組んだ成果の活かし方）や、学びの振り返りのさせ方などに、再考の余地があるのではないかと思われます。

Q8　私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.365	−0.008
Q2教員努力	0.384	−0.018
Q3教員シラバス対応	0.329	−0.010
Q4事前・事後学修指示	0.368	0.066
Q5教員質問相談対応	0.376	0.093
Q6教材・教具効果	0.371	−0.039
Q7授業に臨む姿勢	0.582	0.264
Q8質問・調査努力		
Q9目標達成	0.573	0.238
Q10学生の成長実感	0.488	0.070
Q11興味関心の向上	0.456	0.056
Q12有用性	0.444	0.047
Q13出席率	0.128	−0.016
Q14平均学修時間	0.284	0.134

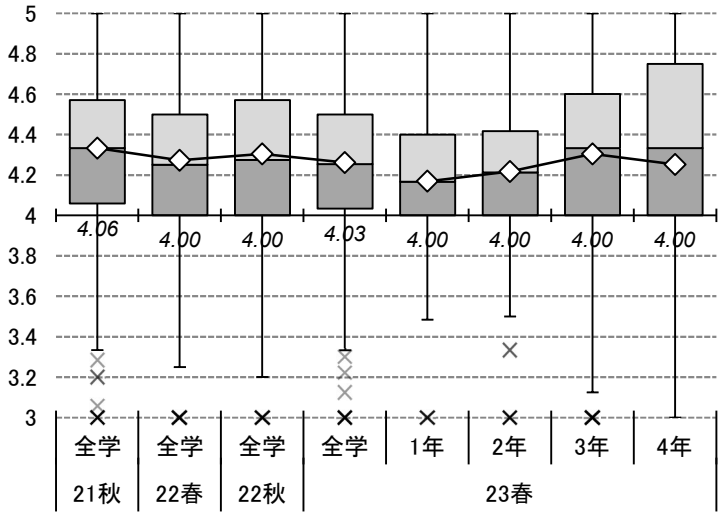
4.0 ポイントに届かない授業は 12.4%まで増えてきています。相関行列に見る通り、Q7 授業に臨む姿勢と強く相関するのみならず、Q9 目標達成や Q14 平均学修時間にも小さからぬ影響を及ぼしますので、改善が遅れた授業でのキャッチアップは急務と考えます。また、下図の通り、この質問（Q8）で「そう思う」と答えた場合と「どちらかと言えはそう思う」しか選べなかった場合とでは Q11 興味関心の向上に大差が生じています。因果には「興味を持ったから不明解消に努力した」と「不明解消に取り組むうちに興味が芽生えた」の 2 方向が考えられます。



この項目に「そう思う」と答えていても、「わからないこと」の所在に気づいていない場合、不明は隠れたまま、解消されずに放置されているはずです。仮に Q9 目標達成で「そう思う」を選んでいたとしても、学習内容を余さず、きちんと理解している保証はありません。右表は、この質問（Q8）で「そう思う」を選んだケースを抽出し、Q14 平均学修時間の回答分布を学年ごとに算出した結果です。「31 分以上」の累積割合は、各学年ともに 70%台半ばに止まっており、不明解消行動の不足も窺えます。「不明の所在に気づかせる適切な問い」の投げ掛けが重要です。

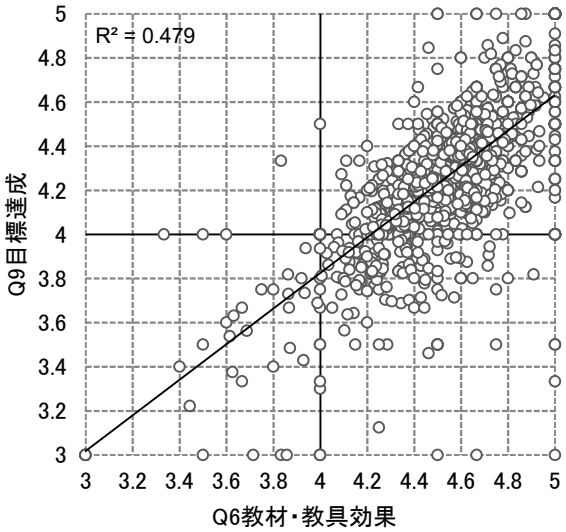
Q14 平均学習時間		Q8=⑤そう思う	
		選択率	同累積
1年	121 分以上	16.6%	16.6%
	61 分以上	24.8%	41.4%
	31 分以上	33.1%	74.5%
2年	121 分以上	23.9%	23.9%
	61 分以上	23.3%	47.2%
	31 分以上	29.5%	76.7%
3年	121 分以上	21.0%	21.0%
	61 分以上	26.0%	47.0%
	31 分以上	30.2%	77.2%
4年	121 分以上	24.1%	24.1%
	61 分以上	27.4%	51.5%
	31 分以上	25.3%	76.9%

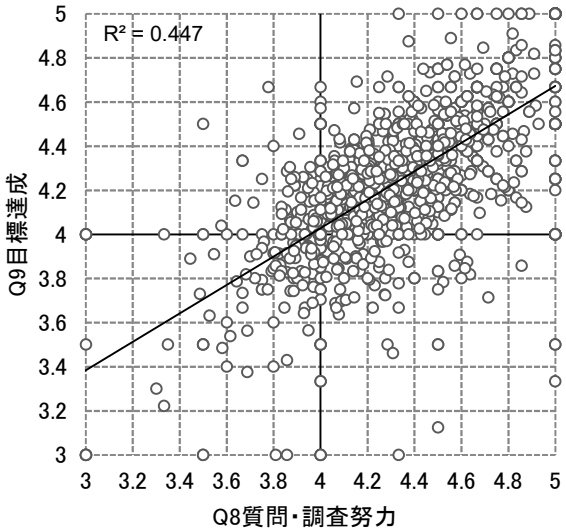
Q9　私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）



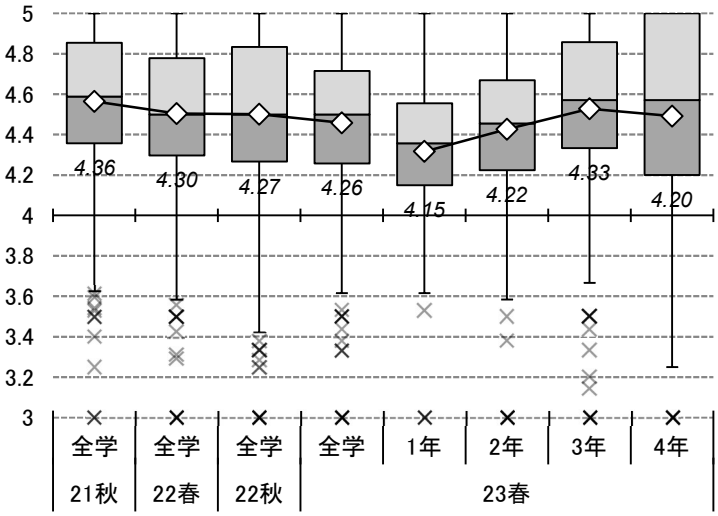
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.439	0.053
Q2教員努力	0.456	0.024
Q3教員シラバス対応	0.389	0.020
Q4事前・事後学修指示	0.372	0.013
Q5教員質問相談対応	0.372	−0.031
Q6教材・教具効果	0.448	0.023
Q7授業に臨む姿勢	0.604	0.233
Q8質問・調査努力	0.573	0.238
Q9目標達成		
Q10学生の成長実感	0.582	0.168
Q11興味関心の向上	0.556	0.184
Q12有用性	0.496	0.009
Q13出席率	0.160	0.045
Q14平均学修時間	0.218	0.006

箱の下端は昨年同時期よりわずかに高くなったものの平均値に上昇は見られず、4.0 ポイントに届かない授業が 15.1%を占めています。先生方の直接的なコントロールが可能な Q1～Q6 の各項目を説明変数、Q9 を目的変数とする重回帰分析の決定係数は 0.261 に止まりますが、その中で最も大きな寄与度が推定されるのは、Q6 教材・教具効果です。これに偏相関係数が最も大きな Q8 質問・調査努力を加えた 2 項目を説明変数とした場合、決定係数は 0.399（重相関係数 0.632）に上昇します。教材や教具の使い方を工夫して理解を確かなものにするとともに、適切な問いを与えることで、解き明かすべき不明や掘り下げるべき興味の所在に気づかせ、学生自らに「調べる、考える、訊く」を通じてその解明に取り組ませれば、授業目標の達成を引き寄せられる可能性が高そうです。下図に照らし、近似線を下方に大きく離れる場合、目標達成を妨げるボトルネックがどこかに存在すると考えられますが、双方（Q6 と Q8）の相乗平均を説明変数とした場合、決定係数は 0.526 まで上昇することから、いずれかの充実不足が他方に対するボトルネックとなっている可能性（「わかりやすさに偏り、学生に不明の解消に取り組ませていない」や「土台となる理解の形成を十分に図らないまま、学生に不明解消を求めている」など）が高いと思われます。



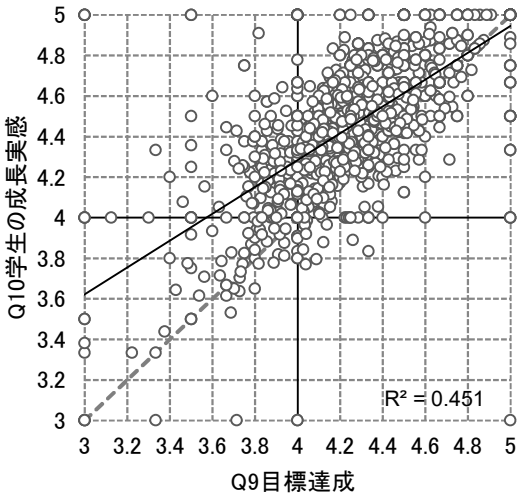


Q10 私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた

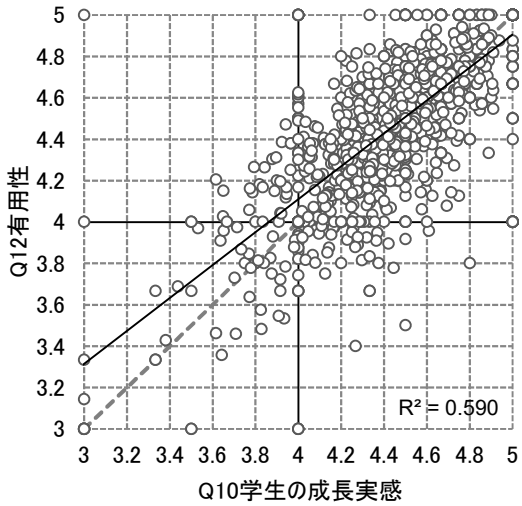


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.474	0.059
Q2教員努力	0.495	0.024
Q3教員シラバス対応	0.422	0.031
Q4事前・事後学修指示	0.382	−0.006
Q5教員質問相談対応	0.412	0.000
Q6教材・教具効果	0.513	0.077
Q7授業に臨む姿勢	0.539	0.084
Q8質問・調査努力	0.488	0.070
Q9目標達成	0.582	0.168
Q10学生の成長実感		
Q11興味関心の向上	0.620	0.248
Q12有用性	0.619	0.245
Q13出席率	0.134	0.024
Q14平均学修時間	0.204	0.016

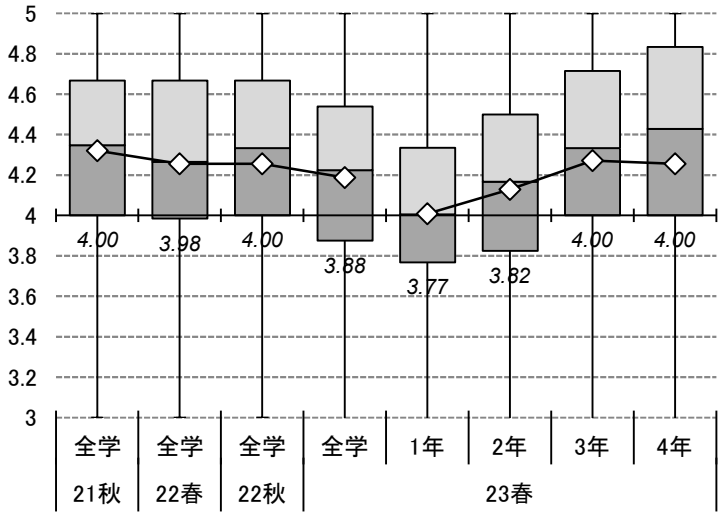
昨年同時期と比べて、箱の下端などに低下が見られます。4.0 ポイント未満の授業は 6.9%（昨年は 5.4%→6.6%）です。強い相関で結ばれているのが、Q9 目標達成、Q11 興味関心の向上、Q12 有用性の 3 項目であるのは、以前と変わりません。授業内容を理解して到達目標を達成する中にこそ、気づきや新しいものの見方も得られるでしょうし、自分の成長も実感できるのは半ば当然です。この項目（Q10）の改善を図るのに前提となるのは、Q9 目標達成で一定以上の評価を得ることです。右図を見ても、Q9 目標達成の換算得点を Q10 学生の成長実感のそれが下回っている（Q9 = Q10 の位置に通したグレーの破線の下側に位置する）授業はそれほど多くありません。また、この項目（Q10）で尋ねた「気づきや新しいものの見方」は、言い方を変えれば「対象への興味」にもなり得ますので、Q10 の改善を図れば、Q11 興味関心の向上も高確率で期待できるはずです。



一方、右図に見る通り、Q10 学生の成長実感と Q12 有用性は強く相関するものの、互いの換算得点（平均）が大きく異なるケースも散見されます。科目の学習内容によるところも大きいかと思いますが、双方を出来る限り高いところで揃えたいところです。Q12 有用性では「学生にとって自分事となる課題」を設定し、事前・事後を含めた学修を通じて、納得いく答えを導き出す経験を積ませる必要がありますが、そこで得たもの（知識、理解、取り組み方など）の「たな卸し」にも注力させ、自分の成長を正しく認識させましょう。

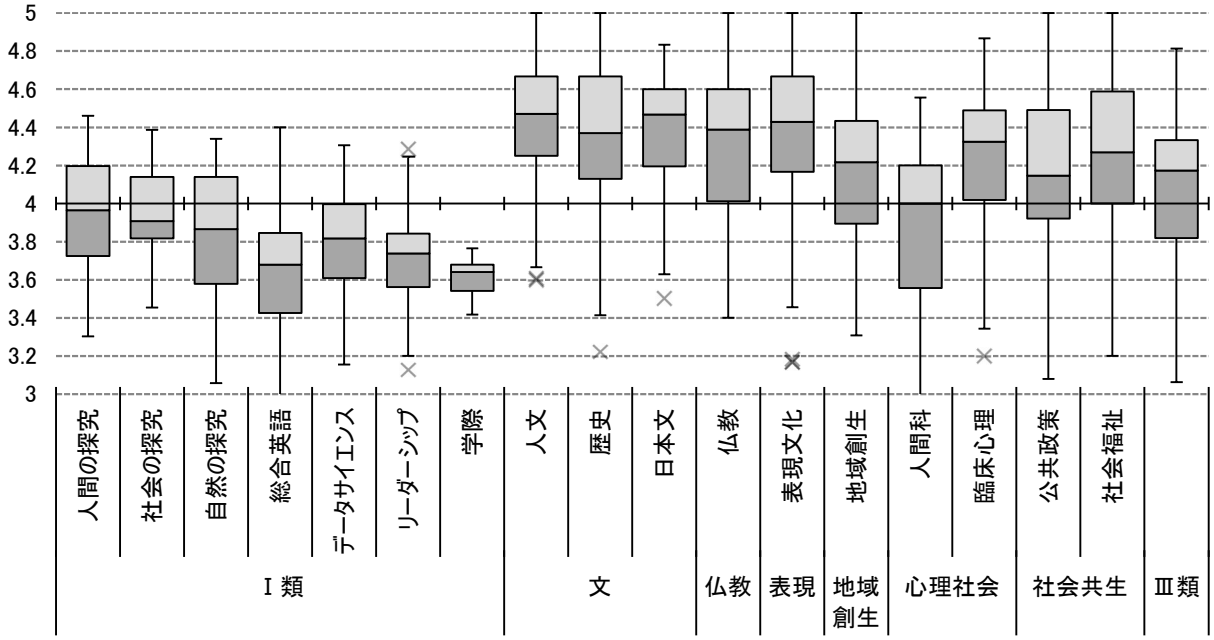


Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった



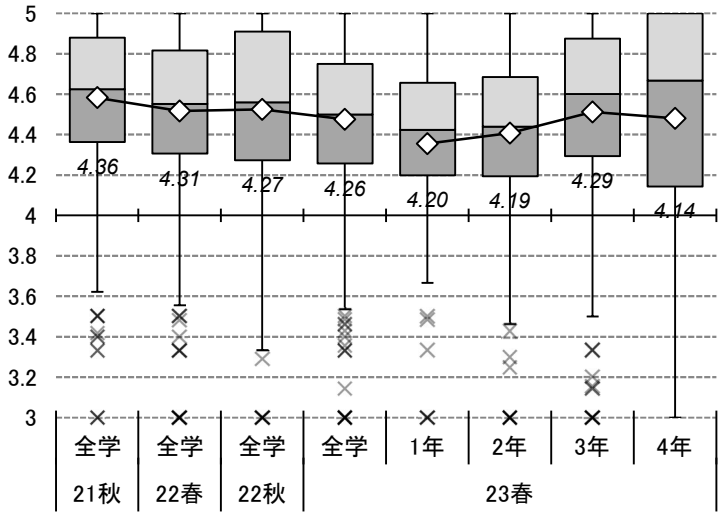
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.400	−0.026
Q2教員努力	0.450	0.046
Q3教員シラバス対応	0.347	−0.051
Q4事前・事後学修指示	0.336	−0.021
Q5教員質問相談対応	0.380	0.015
Q6教材・教具効果	0.488	0.114
Q7授業に臨む姿勢	0.481	0.021
Q8質問・調査努力	0.456	0.056
Q9目標達成	0.556	0.184
Q10学生の成長実感	0.620	0.248
Q11興味関心の向上		
Q12有用性	0.602	0.263
Q13出席率	0.079	−0.056
Q14平均学修時間	0.207	0.051

箱の下端が大きく低下しています。授業間の差も大きいままです。科目区分ごとの集計値分布は下図（有効回答数 5 未満の授業を除外の上、授業数が 5 以上の科目区分のみ抽出して表示）の通りです。I 類の各科目区分（該当全授業の中央値は 3.79）は、「主体的な学修態度の育成」や「学修スキル、汎用的な技能の修得」に目標がある以上、各学部固有の科目区分群（同 4.34）に比べて低めの評価に止まるのも、ある程度はやむを得ないところかと思いますが、箱の上端以上の授業での工夫には、評価の改善に繋がり得る、倣うべき優れたものがあろうかと思います。



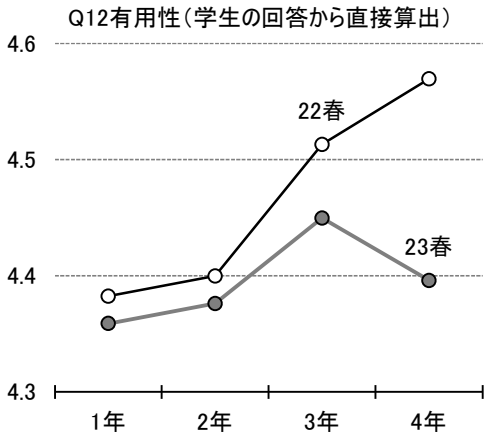
各学部・学科の科目群についても、箱の長さが目立つ箇所が見られます。改善が遅れた授業のキャッチアップが待たれるところですが、以前も申し上げた通り、外からの働きかけで「好きにさせる」のは容易ではありません。学んだことが役立つ場面を経験させることや、新たな気づきを得られるような課題に取り組ませることに加え、「関連分野」の内容を知る機会（学生が取り組む調べ学習や先輩たちの体験談など）を整えることもまた有効な改善策になろうかと思います。

Q12 私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に活きる

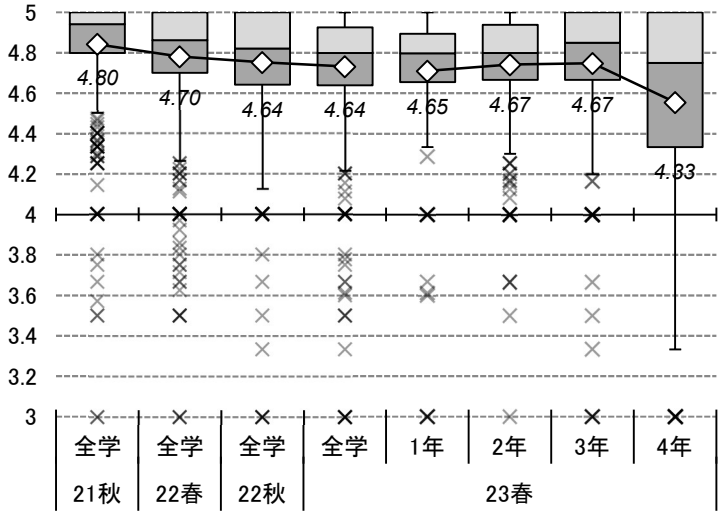


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.462	0.042
Q2教員努力	0.493	0.041
Q3教員シラバス対応	0.419	0.038
Q4事前・事後学修指示	0.384	0.018
Q5教員質問相談対応	0.419	0.028
Q6教材・教具効果	0.510	0.085
Q7授業に臨む姿勢	0.500	0.074
Q8質問・調査努力	0.444	0.047
Q9目標達成	0.496	0.009
Q10学生の成長実感	0.619	0.245
Q11興味関心の向上	0.602	0.263
Q12有用性		
Q13出席率	0.123	0.027
Q14平均学修時間	0.193	0.022

4.0 ポイント未満の授業は 8.2%（昨年は 5.8%→7.2%）です。他項目との相関の出方に大きな変化はありません。右図に見る通り、各学年とも一つ上の学年の 1 年前（留年等は考慮していません）を平均値で下回ります。特に低下が顕著なのは 4 年生で、3 年生も有意に低下しました。低下の原因は、授業内容のみならず、それらを用いた自分事としての課題の解決に取り組んだ体験の度合いなども考えられます。原因の特定と、早期の巻き返しが期待されるところです。



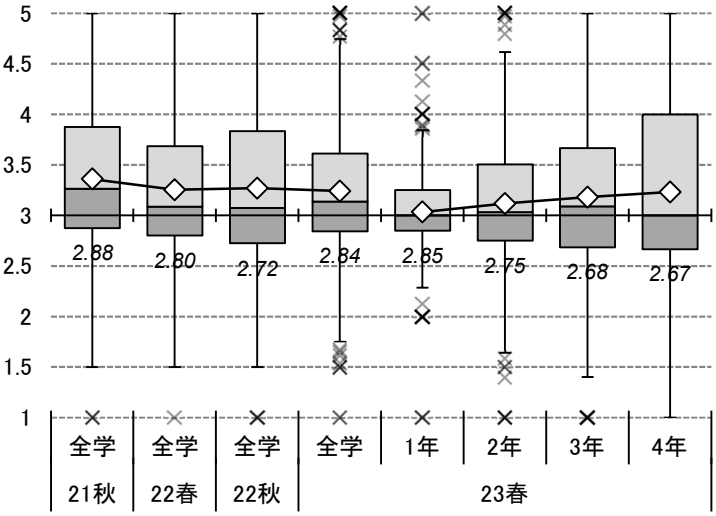
Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.091	−0.013
Q2教員努力	0.102	0.005
Q3教員シラバス対応	0.100	0.017
Q4事前・事後学修指示	0.085	−0.009
Q5教員質問相談対応	0.084	0.003
Q6教材・教具効果	0.081	−0.027
Q7授業に臨む姿勢	0.218	0.138
Q8質問・調査努力	0.128	−0.016
Q9目標達成	0.160	0.045
Q10学生の成長実感	0.134	0.024
Q11興味関心の向上	0.079	−0.056
Q12有用性	0.123	0.027
Q13出席率		
Q14平均学修時間	0.104	0.054

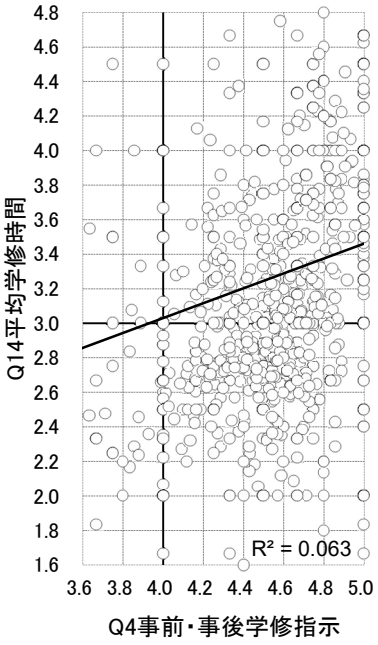
平均値は徐々に低下してきました。「90%以上」の選択率は 81.3%（昨年春は 85.2%）です。同選択率の変化量は 1 年が-3.4%、2 年が-3.6%、3 年が-4.9%、4 年が+0.1%です。アンケートに回答していない学生を含めると、実際の出席率はデータ以上に低いかもしれません。

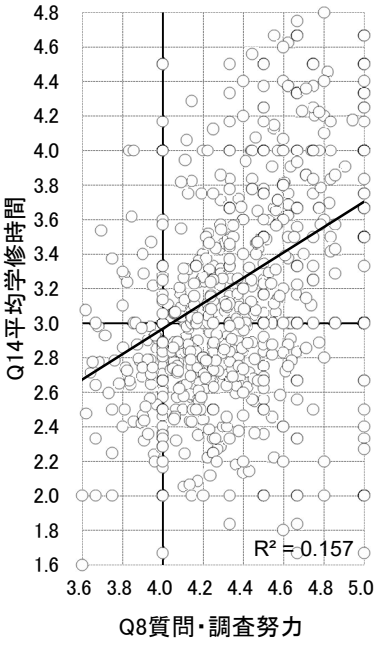
Q14 この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか

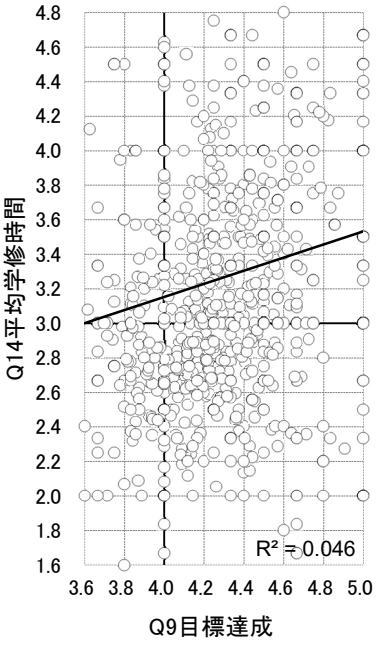


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.143	0.004
Q2教員努力	0.136	−0.020
Q3教員シラバス対応	0.104	−0.046
Q4事前・事後学修指示	0.231	0.147
Q5教員質問相談対応	0.120	−0.027
Q6教材・教具効果	0.119	−0.051
Q7授業に臨む姿勢	0.248	0.064
Q8質問・調査努力	0.284	0.134
Q9目標達成	0.218	0.006
Q10学生の成長実感	0.204	0.016
Q11興味関心の向上	0.207	0.051
Q12有用性	0.193	0.022
Q13出席率	0.104	0.054
Q14平均学修時間		

中央値は昨年春とほぼ同じ位置です。3.0 ポイント（「31～60 分」に相当）に達しない授業は、35.3%（昨年は 37.2%→37.4%）です。Q4 事前・事後学修指示や Q8 質問・調査努力との間には比較的強固な偏相関が見られます。明確な（＝十分な達成可能性と適切な見込み所要時間を備えた）課題が付与されていれば、授業外の学修に充てる時間も増えるでしょうし、不明の所在を見つけてその解消に取り組めば、一定の時間はかかるはずです。しかしながら、下左図、下中図に見る通り、近似線を大きく離れる授業がかなり目につきます。指示をこなすのにどのくらい時間が掛かるか正しく想定できているか、質問・調査努力の方法と姿勢を十分に獲得させているかを改めて点検してみる必要もありそうです。一方、Q9 目標達成との相関は依然として弱く、十分な学修時間を投じないまま、目標が達成できている（下右図で第 4 象限に位置する）授業も少なくないように見受けられます。該当する授業では、もう少し意識的に負荷を掛けた（＝目標水準を高く取り直す）方が、学生のポテンシャルを余さずに伸ばせるようにも思えます。





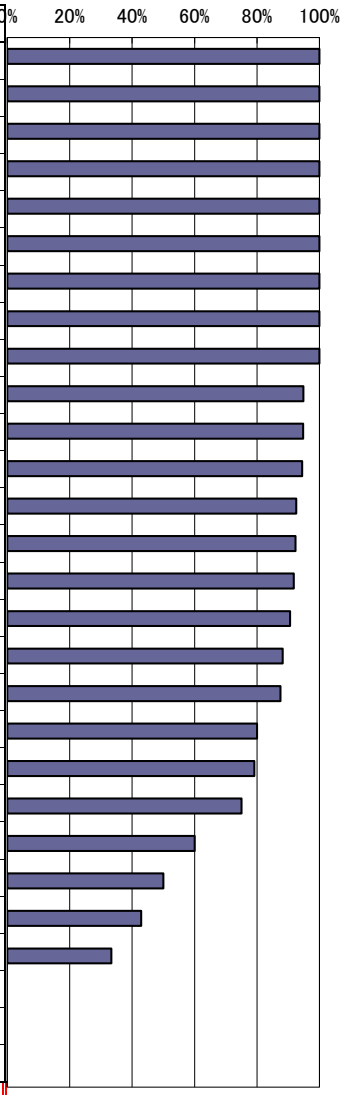


参考資料１

実施率

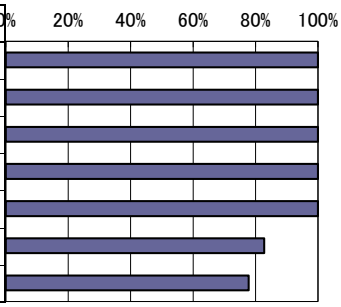
■学部1319科目

科目区分		授業数	実施数	実施率
01 Ⅰ類≪学びの窓口≫	3_01	3	3	100.0%
03 Ⅰ類≪トランジション科目群≫	3_03	1	1	100.0%
07 Ⅰ類≪人間の探究≫	3_07	26	26	100.0%
08 Ⅰ類≪社会の探究≫	3_08	26	26	100.0%
09 Ⅰ類≪自然の探究≫	3_09	26	26	100.0%
10 Ⅰ類≪総合英語≫	3_10	66	66	100.0%
11 Ⅰ類≪データサイエンス≫	3_11	56	56	100.0%
12 Ⅰ類≪リーダーシップ≫	3_12	25	25	100.0%
26 社会共生学部公共政策学科	3_26	50	50	100.0%
27 社会共生学部社会福祉学科	3_27	58	55	94.8%
19 文学部歴史学科	3_19	114	108	94.7%
28 第Ⅲ類科目	3_28	127	120	94.5%
21 仏教学部仏教学科	3_21	135	125	92.6%
22 表現学部表現文化学科	3_22	222	205	92.3%
25 心理社会学部臨床心理学科	3_25	61	56	91.8%
18 文学部人文学科	3_18	64	58	90.6%
20 文学部日本文学科	3_20	51	45	88.2%
23 地域創生学部地域創生学科	3_23	104	91	87.5%
02 Ⅰ類≪学びの技法≫	3_02	5	4	80.0%
24 心理社会学部人間科学科	3_24	72	57	79.2%
13 Ⅰ類≪ 学　際 ≫	3_13	8	6	75.0%
04 Ⅰ類≪知の加工術科目群≫	3_04	5	3	60.0%
06 Ⅰ類≪問いの探究科目群≫	3_06	2	1	50.0%
14 Ⅰ類≪キー・コンピテンシーゼミナール≫	3_14	7	3	42.9%
16 人間学部人間環境学科	3_16	3	1	33.3%
05 Ⅰ類≪異文化コミュニケーション科目群≫	3_05	2	0	0.0%
15 人間学部人間科学科	3_15	0	0	—
17 人間学部社会福祉学科	3_17	0	0	—
計		1319	1217	92.3%



■大学院70科目

科目区分		授業数	実施数	実施率
02 人間学研究科社会福祉学専攻　修士課程	M_02	4	4	100.0%
03 人間学研究科臨床心理学専攻　修士課程	M_03	13	13	100.0%
05 文学研究科史学専攻	M_05	9	9	100.0%
06 文学研究科国文学専攻	M_06	5	5	100.0%
07 人間学研究科福祉・臨床心理学専攻	M_07	1	1	100.0%
01 仏教学研究科仏教学専攻	M_01	29	24	82.8%
04 文学研究科宗教学専攻	M_04	9	7	77.8%
計		70	63	90.0%



参考資料1-2. アンケート実施率（学部） 2005年度春学期～2023年度春学期

年度	学期	実施率	実施数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217
2017年度	秋学期	92.6%	1096	1183
2018年度	春学期	97.8%	1183	1209
2018年度	秋学期	95.1%	1098	1154
2019年度	春学期	95.7%	1219	1274
2019年度	秋学期	96.2%	1127	1172
2020年度	春学期	92.2%	1174	1274
2020年度	秋学期	92.1%	1113	1208
2021年度	春学期	92.2%	1174	1274
2021年度	秋学期	90.7%	1018	1122
2022年度	春学期	88.4%	1194	1351
2022年度	秋学期	84.4%	994	1118

2023年度	**春学期**	**92.3%**	**1217**	**1319**

※2020年度からweb方式での実施へ変更。

参考資料２

自由記述回答

頻出キーワード分析

自由記述回答　頻出キーワード分析について

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に
「この授業において、あなた自身の『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じたのはどのような点でしたか。また、この授業において改善できる点があればお書きください。」
として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出するキーワードを調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1 として出現頻度の上位 10 ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11 位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2 による前回と前々回（＝前年同期）データに加え、今回の全学平均を表示することとしています。

分析上の主なポイント

質問文は前半の「『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点」（効果点）と後半の「改善できる点」（改善点）に分かれます。そこで記述内容により効果点と改善点に分けて集計を行いました。分析上の主なポイントは下記の通りです。

(1) 質問の前半に対する回答（効果点）と後半に対する回答（改善点）を分けて集計・分析を行っています。

(2) できるだけ具体的なキーワードに分解・集計しています。例えば「分かりやすい」は「〇〇〇で分かりやすかった」「△△△をしてくれたので分かりやすかった」など、分かりやすい理由となった「〇〇〇」「△△△」を独立したキーワードとして集計。理由が明確でないものを「分かりやすい」として残しました。

(3) 当該授業そのものがテーマとしている項目は、キーワードとして出現数が高い場合でも全学共通の課題や効果点とはなりえないため、対象キーワードから除外しました。

※例：「レポートの書き方がよく分かった」はキーワード「レポート・課題」からは除外。
キーワード「レポート・課題」には「レポート・課題の出し方や評価方法がよかった／レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった」などに限定して仕分け、集計。

今回の特徴

今回の自由記述回答数は 25,409 件となり、昨年度秋学期の 4.7 倍、昨年度春学期と比べても 2.3 倍となりました。昨年度は、全自由記述回答のうち、１，２年生の割合が 9 割以上を占めていましたが、今年度は、1 年生：46.7%、2 年生：27.7%と 7 割程度にとまり、3，4 年生の割合が増加しました。
効果点については今回もキーワード自体の入れ替わり（新規キーワードや番外からの進出ランクイン、あるいはその逆）が多少ありましたが、上位はほぼ常連のキーワードで占められました。

改善点についてはキーワード自体の入れ替わりも含め、3 位以降の順位が大きく入れ替わる結果となりました。また、出現率は、効果点、改善点すべての項目で前回を上回りました。

<u>効果点と改善点</u>

1. <u>効果点（『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点）</u>

効果点に関する上位 15 の回答の出現率合計は 2273 ポイントと、改善点の 524 ポイントを大きく上回ります。

キーワード別に見ると、「**グループワーク**」（グループワークでの共同作業により学びが深まった／学習意欲につながった）が昨年度秋学期、前回春学期同様 1 位（1328 件）となり、継続して不動の 1 位をキープしています。2 位（450 件）を大きく引き離す傾向も変わりません。このキーワードは毎回 1 年生と「Ⅰ類・第Ⅱ類科目（学部共通）・Ⅲ類」で突出して多い回答率を示しており、今回はどちらもそれぞれ全回答の約半数を占めているため強く反映された結果となっています。

2 位は、前回 5 位から順位を上げた「**レポート・課題**」（レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった、レポート・課題の出し方や評価方法がよかった：450 件）です。今回、特に 2 年生での出現率が高く、前回との比較では約 2.5 倍となりました。

3 位～8 位は順に、3 位「（教員の）**体験談・現場の話**」（現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった：428 件/前回 2 位）、4 位「**動画・画像**」（動画・画像で分かりやすい：409 件/前回 3 位）、5 位「**説明・解説**」（説明・解説が分かりやすい（具体的な理由の記載なし）：391 件/前回 4 位）、6 位「**丁寧**」（丁寧な授業、解説、プリント・・・：388 件/前回 6 位）、7 位「**実例・具体的**」（実例・具体例を挙げた説明で分かりやすい、具体的に理解できた：384 件/前回 7 位）、8 位「**詳しい**」（詳しく学べた：350 件/前回 9 位）でした。3 位から 8 位まで順位に大きな変動はありませんでしたが、出現率では 1.4～2.3 倍となり、全体的に改善が進んだ様子です。

9 位「**多様な意見・視点**」（多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった：302 件）と 11 位「**事前事後学修**」（予習、復習をすることで理解が深まった：258 件）は、前回番外となった項目が再びランクインしました。

10 位「**基礎**」（基礎を学べてためになった、身についた、理解が深まった：285 件/前回 10 位）は、前回と同じ順位ですが、出現率では約 2 倍となっています。

12 位以降は順位の入れ替えはあったものの、前回と同じ項目となりました。

2. <u>改善点（改善できる点）</u>

1 位は前回に引き続き「**レポート・課題**」（レポート・課題の出し方や評価方法を改善してほしい：186 件）でした。学部別では「仏教学部」、学年別では 2，4 年生において出現率が大きく、特に 4 年生は 2022 年度には出現していなかったところから 134.6%の出現率となりました。改めての改善が望まれるところです。

前回 3 位だった 2 位「**グループワーク**」（グループワークの回数・分け方・実施方法を改善してほしい：144 件/前回 3 位）は、2021 秋から出現率で 39.7→32.0→24.1 と順調に改善されてきていましたが、今回は 55.3 と 2 倍以上増え、再び注意が必要となりました。

3 位「**パワポ・スライド**」（パワーポイント・スライドが分かりにくい、見にくい／内容・配布方法を改善してほしい：133 件/前回 10 位）は、前回大きく改善しましたが、再び 3 位にランクインしました。
4 位の「**はやい**」（進行が早い、早口、画面切り替えが早いなどの理由で授業についていけない 115 件）は、前回ランク外となりましたが、出現率で 7 倍もの増加となり、大きく悪化しました。
前回、改善が進んだ 5 位「**難しい**」（授業・資料等が難しすぎる 109 件/前回 11 位）、6 位「**説明・解説不足**」（（授業について）説明・解説が不足・不十分：108 件/前回 14 位）は、再び順位を上げ、出現率も 40%を超えました。
7 位「**プリント・資料**」（プリント・資料が分かりやすい、充実していた、理解が深まった：104 件/前回 2 位）は、順位を下げましたが、出現率は増えており、改善が進んだとは言えません。
8 位「**聞きにくい**」（声が小さい、聞き取りづらい、声が大きすぎる、マイクを使ってほしい…：89 件/前回 8 位）は、前回と同じ順位ですが、この項目も出現率は 3 倍となりました。
9 位「**オンライン授業**」（オンライン授業に関わる要望各種：79 件/前回 6 位）、10 位「**時間**」（時間配分を改善してほしい、時間を守ってほしい：66 件/前回 4 位）、11 位「**テスト・試験**」（テストの実施方法を改善してほしい、テストが難しい、テスト時間が短い…：65 件／前回 5 位）、は前回から順位を下げましたが、出現率は下がっていません。
12 位「**動画・画像**」（動画、映像、写真が分かりにくい（見えにくい）／動画、映像が欲しかった：43 件/前回 15 位）も順位を上げてしまいました。

前回番外だった項目で今回再びランクインしたのは 13 位「**分かりにくい**」（授業が分かりにくい：42 件）、14 位「**教室環境**」（教室が狭い、暑い、寒い、臭い／Wi-Fi が繋がらない：41 件）、同 14 位「**実例・具体的**」（実例・具体例をあげてほしかった／具体的に説明してほしかった：41 件）があります。
逆に 15 位内からランク外になった項目は「発表」「字が読みにくい」「質問」「出席」でした。

改善が進めば「効果点」になる可能性もある、改善点にも効果点にもリストアップされるキーワードは以下の通りです。「効果点」に掲載された意見の中に具体的な改善行動のヒントを探すことができそうです。

- 「レポート・課題」（改善点 1 位/効果点 2 位）
- 「グループワーク」（改善点 2 位/効果点 1 位）
- 「説明・解説（不足）」（改善点 6 位/効果点 5 位）
- 「プリント・資料」（改善点 7 位/効果点 13 位）
- 「動画・画像」（改善点 12 位/効果点 4 位）
- 「実例・具体的」（改善点 15 位/効果点 7 位）

なお、学部、回答人数帯、学年により、出現数・率に大きな違いがありますので、引き続きそれぞれの集計カテゴリー別の改善行動が重要となります。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

※1 キーワードと集計内容について

キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードに集約してカウントしています。各キーワードに含まれる「回答内容」については、「効果点」「改善点」それぞれの集計の最初のページ「頻出キーワード【全学】」の下段に掲載された一覧表を参照ください。

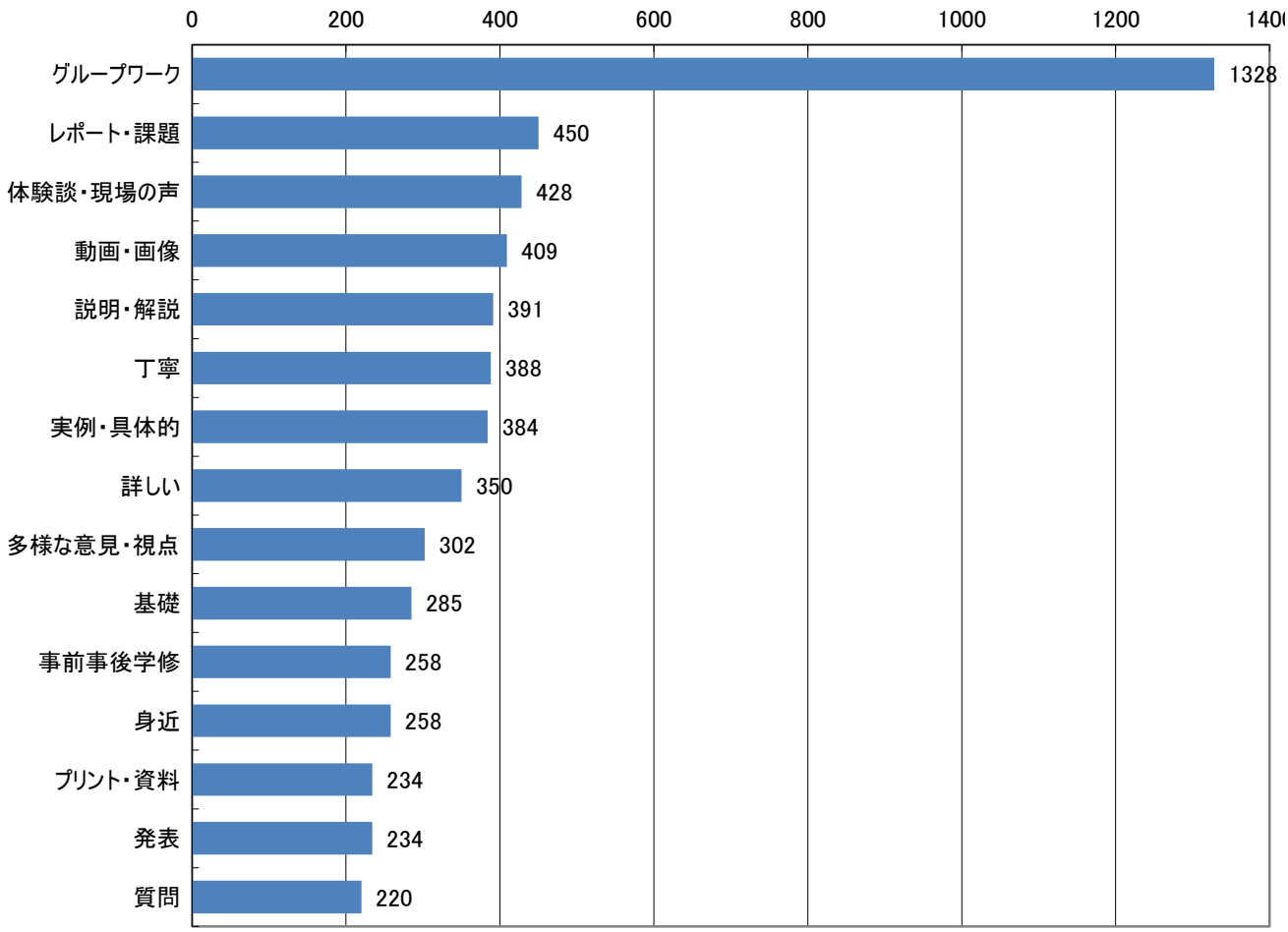
※2 出現率について

「出現率前回比較　全学」下段の説明を参照ください。

【効果点】

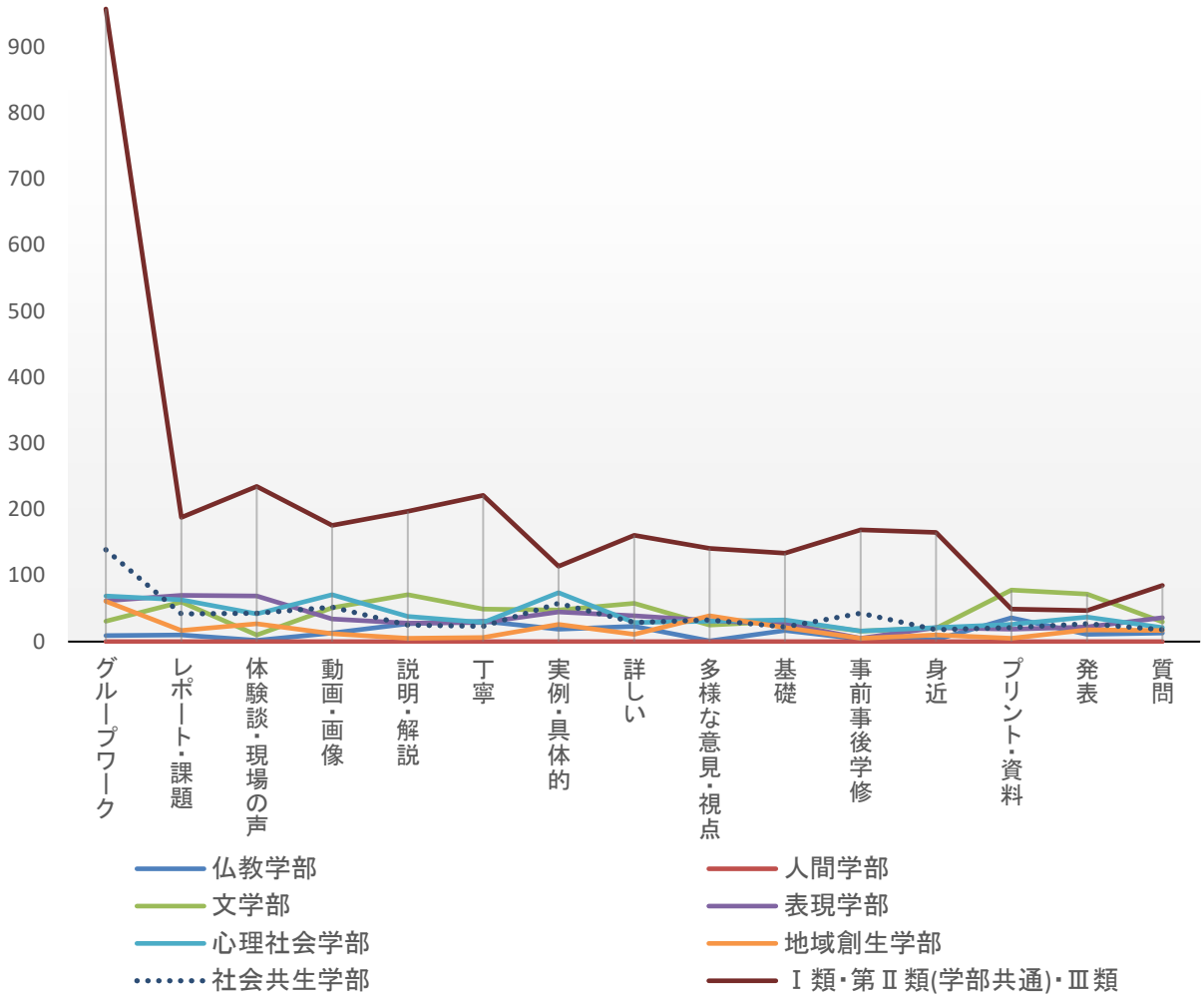
「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点

自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【全学】

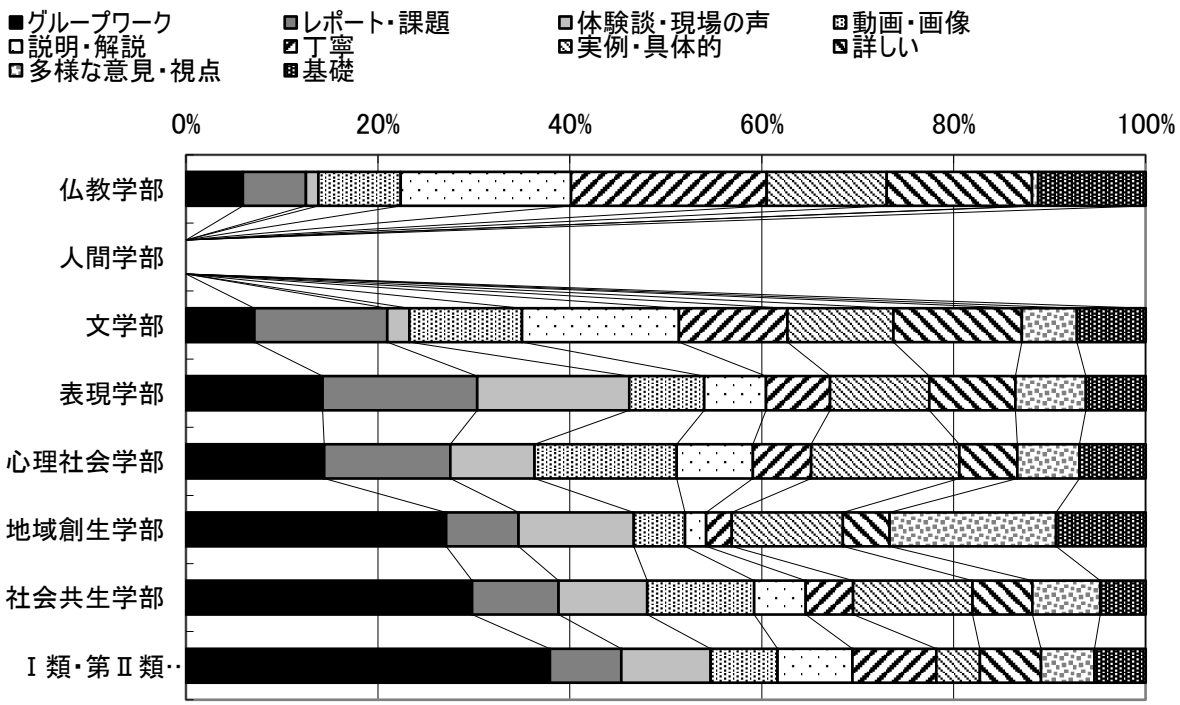


キーワード	主な内容	出現数
グループワーク	グループワークでの共同作業により学びが深まった／会話・意見交換により学び・理解が深まった／グループワークが学習意欲につながった	1328
レポート・課題	レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった／レポート・課題の出し方や評価方法がよかった ※「レポート・課題について具体的に説明」は「実例・具体的」に分類	450
体験談・現場の声	現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった／先生の経験談・体験談を聞くことによって理解が深まった	428
動画・画像	動画・画像で分かりやすい、理解が深まった／動画・画像による説明が分かりやすい	409
説明・解説	（授業について）説明・解説が分かりやすい ※「丁寧な説明・解説」は「丁寧」に、「実例による説明・具体的な説明が分かりやすい」は「実例・具体的」に、「動画・画像による説明が分かりやすい」は「動画・画像」に分類	391
丁寧	丁寧な授業、解説、プリント、資料、教科書、テキスト、教材、パワーポイント、スライド、質問対応、添削、フィードバック、アドバイス、コメント	388
実例・具体的	実例・具体例で分かりやすい、理解が深まった／具体的で分かりやすかった／具体的に理解できた	384
詳しい	詳しく学べた／詳しく知ることができた／細かい内容を学べた	350
多様な意見・視点	多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった／多様な視点を学べた ※「グループワークで意見を聞けてよかった」は「グループワーク」に分類 ※「発表で他の人の意見を聞けてためになった」は「発表」に分類	302
基礎	基礎を学べてためになった、身についた、理解が深まった ※「基礎を丁寧に指導してもらえた」は「丁寧」に分類	285
事前事後学修	予習、復習をすることで理解が深まった／予習、復習しやすかった	258
身近	身近なテーマで分かりやすい／身近に感じられた	258
プリント・資料	プリント・資料が分かりやすい、充実していた、理解が深まった ※「丁寧なプリント・資料」は「丁寧」に分類	234
発表	発表を行って（発表を見て）、ためになった、身についた、理解が深まった ※「グループで発表できてよかった」は「グループワーク」に分類	234
質問	質問しやすい、答えてくれた ※「丁寧な質問対応」は「丁寧」に分類	220

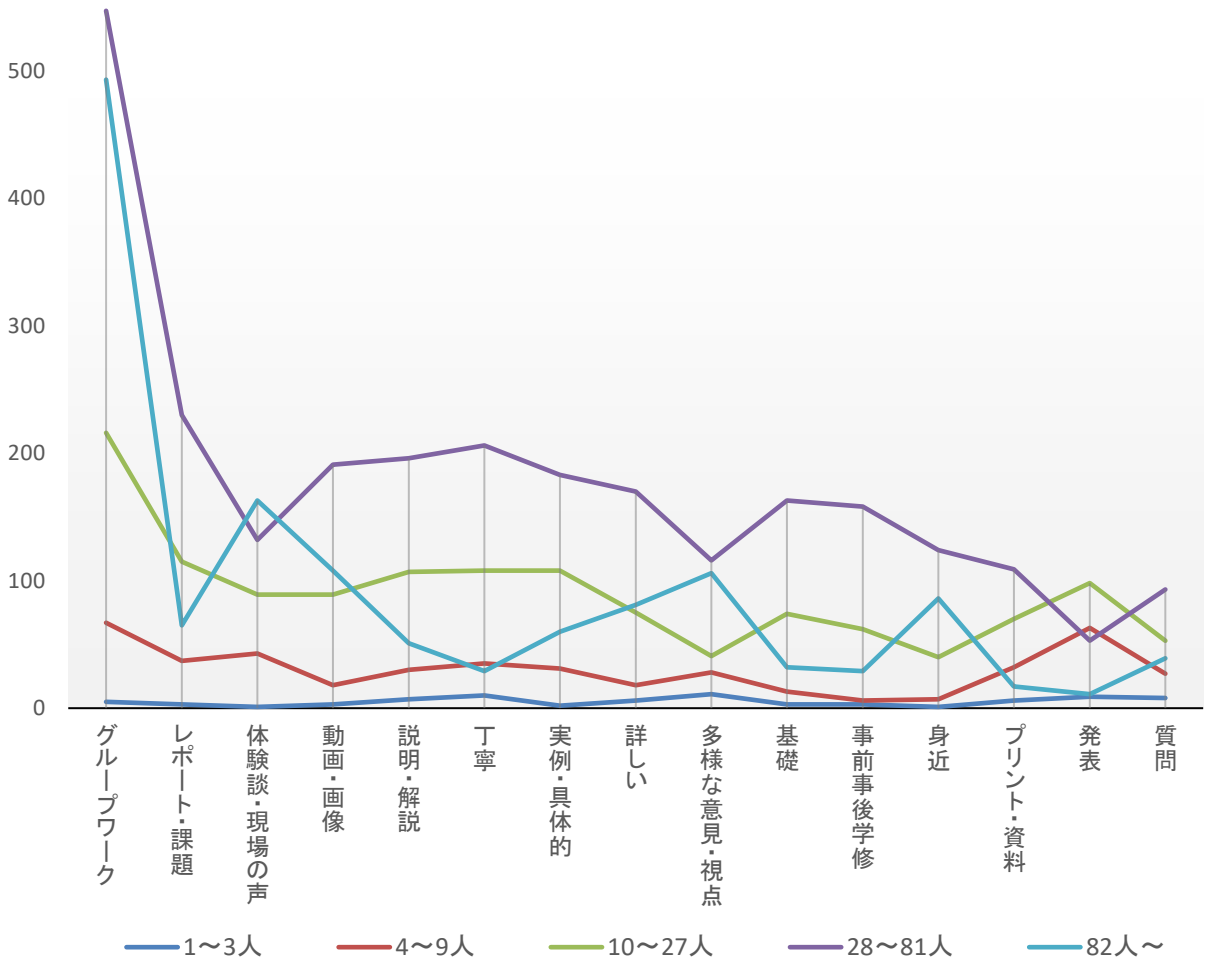
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【学部別】



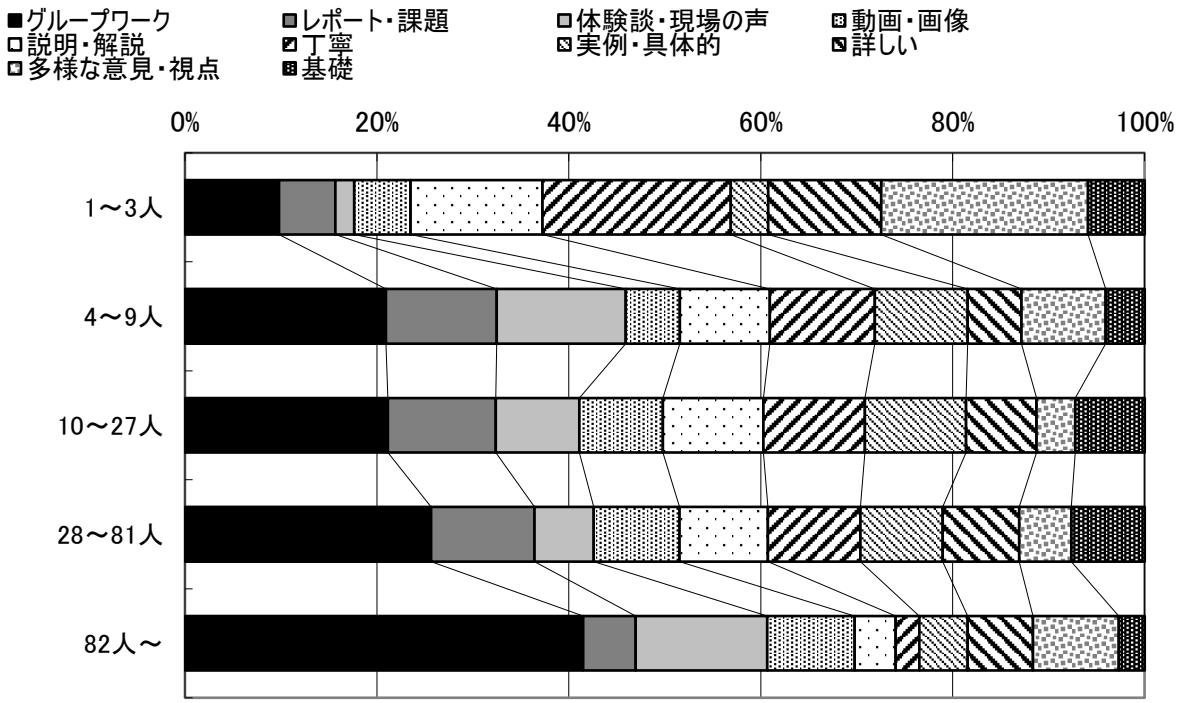
上位10項目の学部別割合



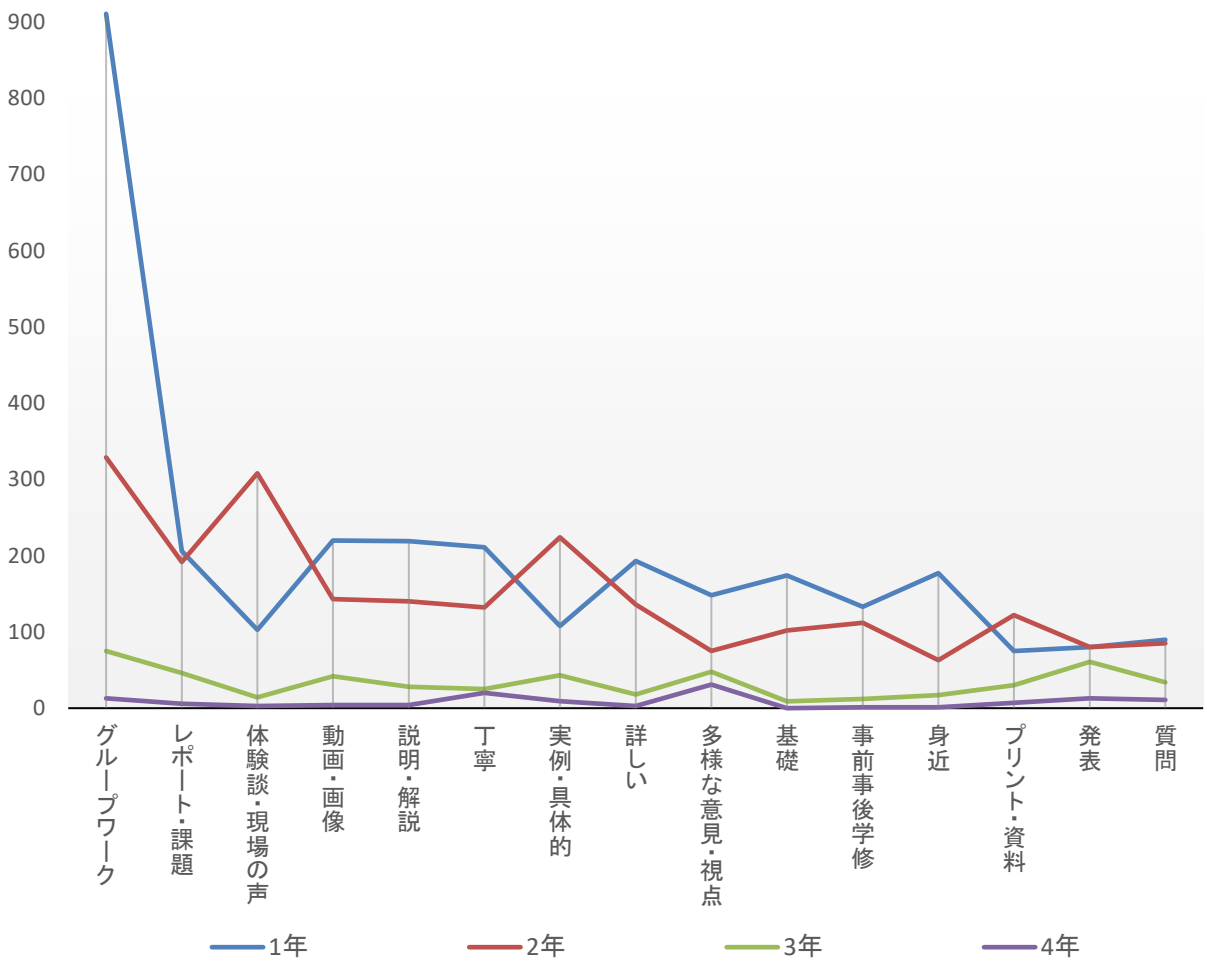
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【回答人数帯別】



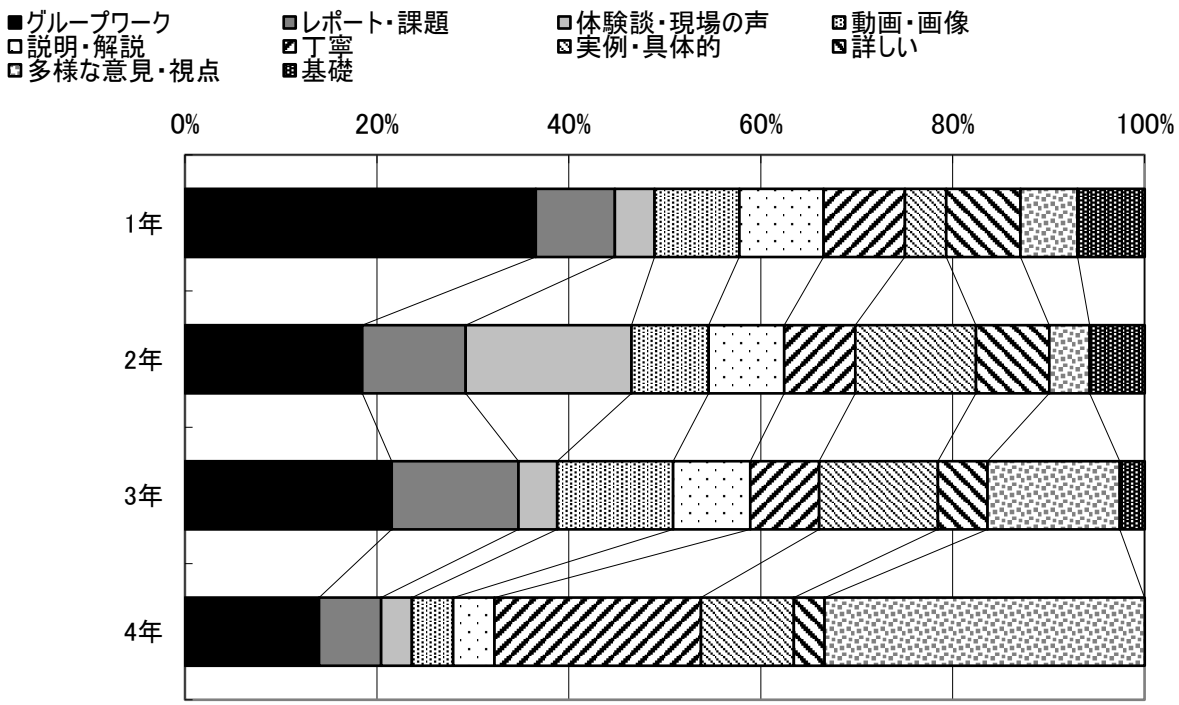
上位10項目の回答人数帯別割合



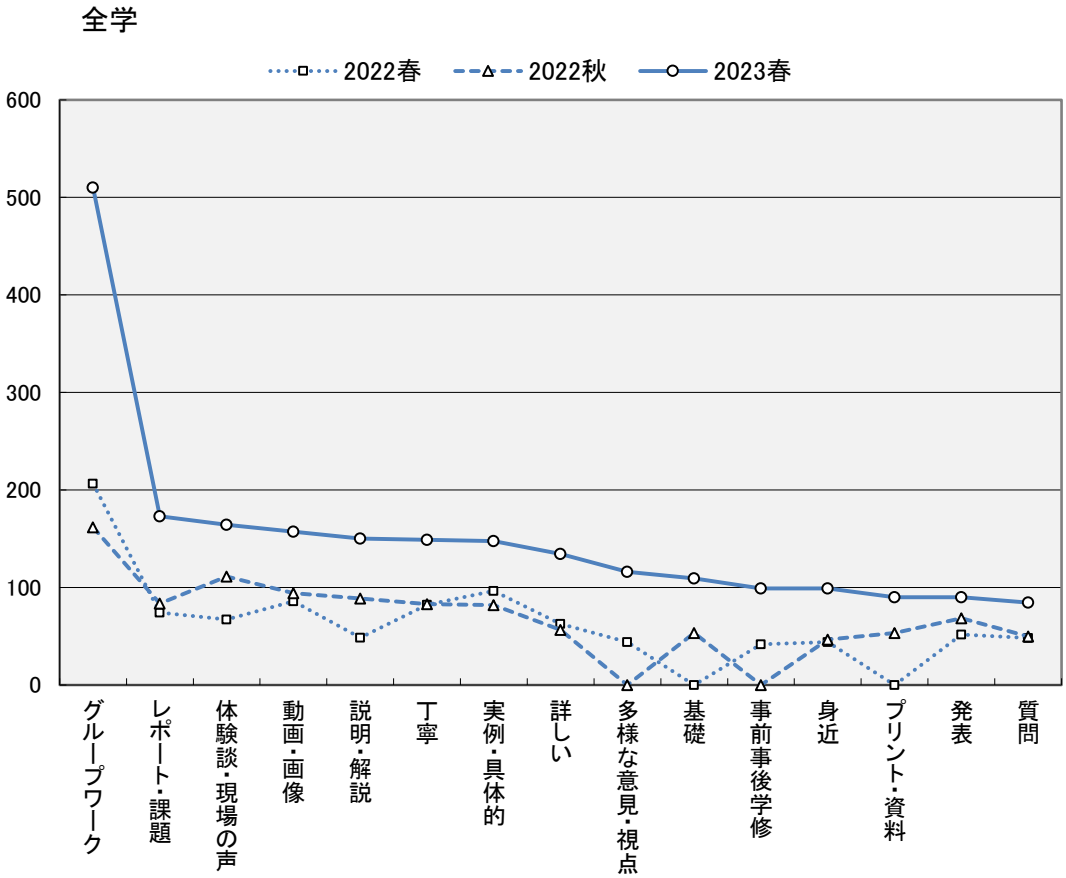
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 全学

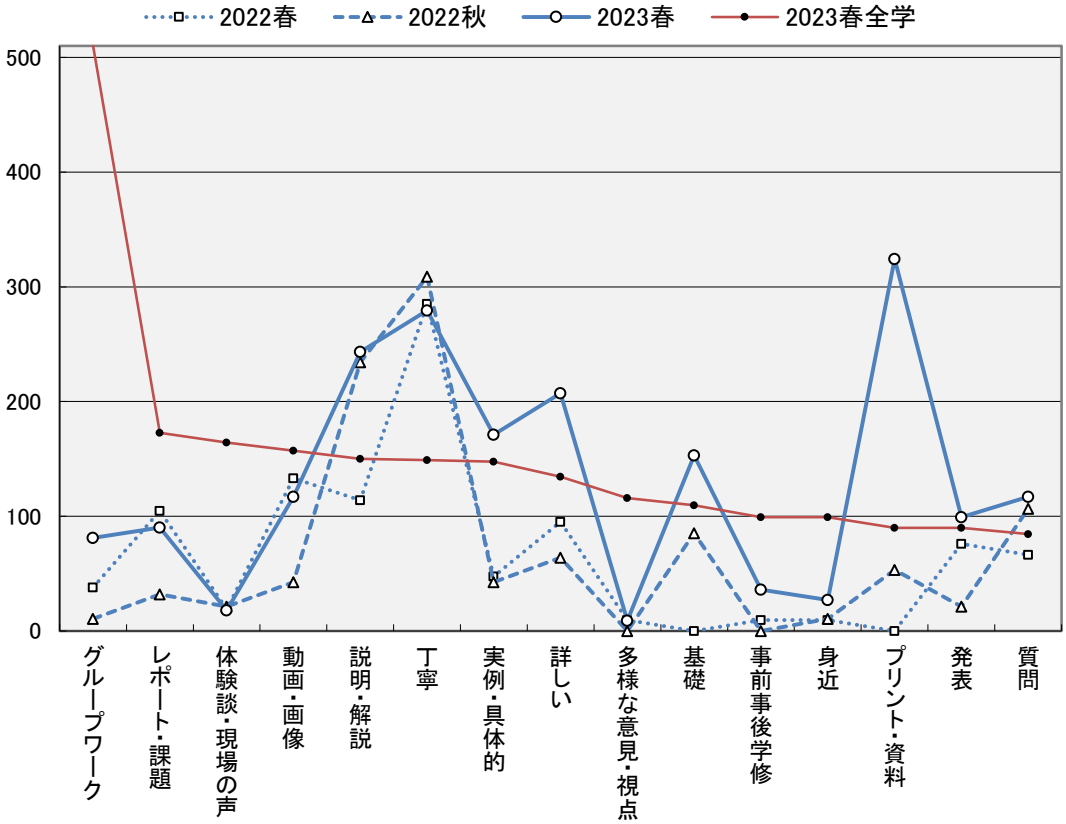


「出現率」について

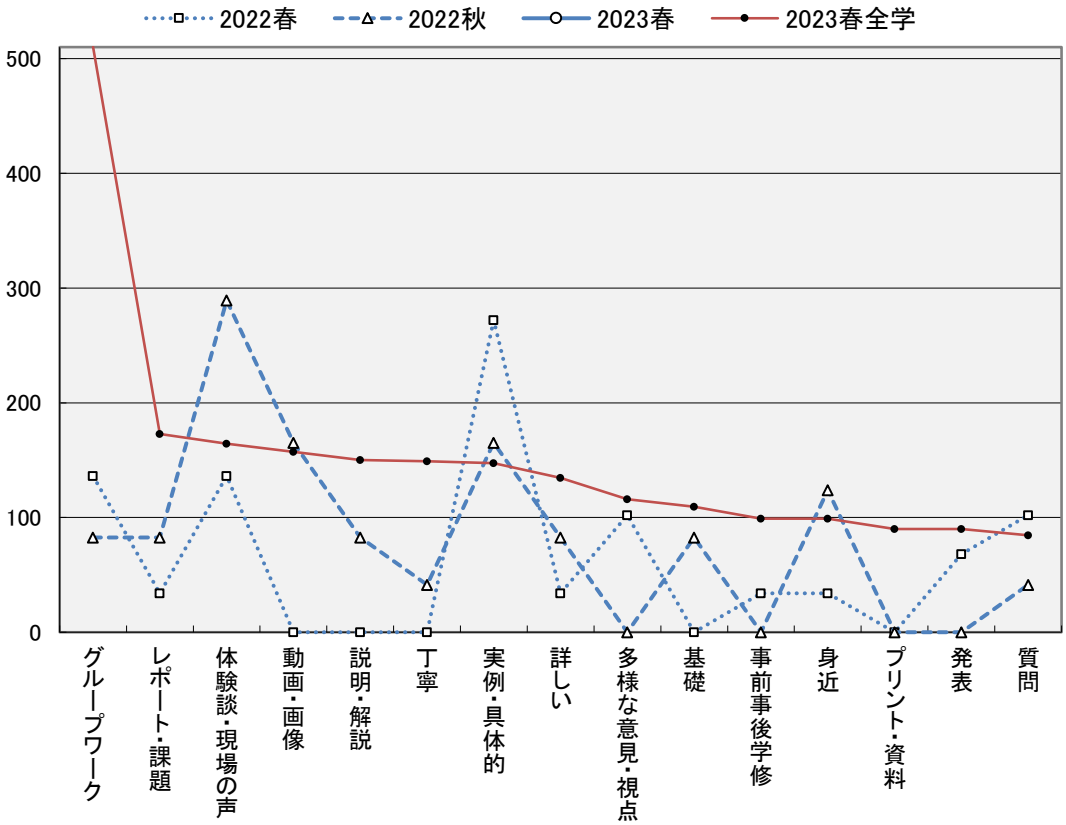
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
  総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
  出現率は下記の式で計算されます。
  出現率＝出現数／回答者数×10^4
  （回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。）
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《仏教学部》

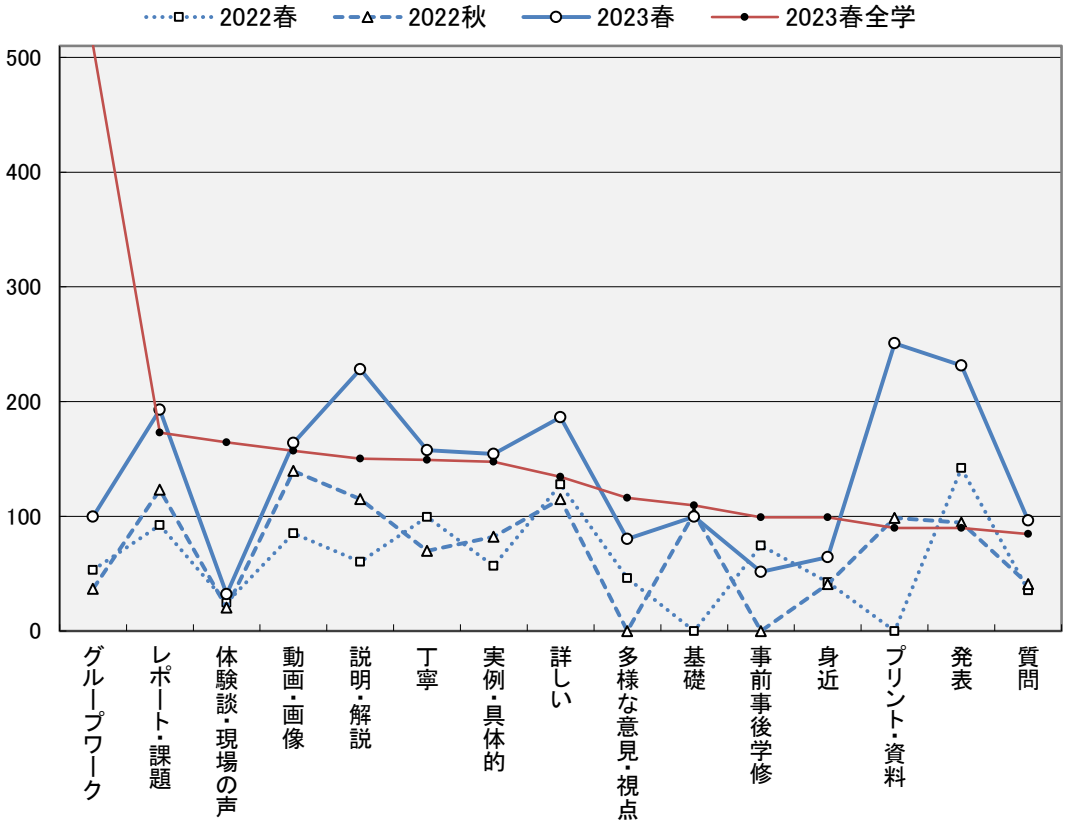


《人間学部》

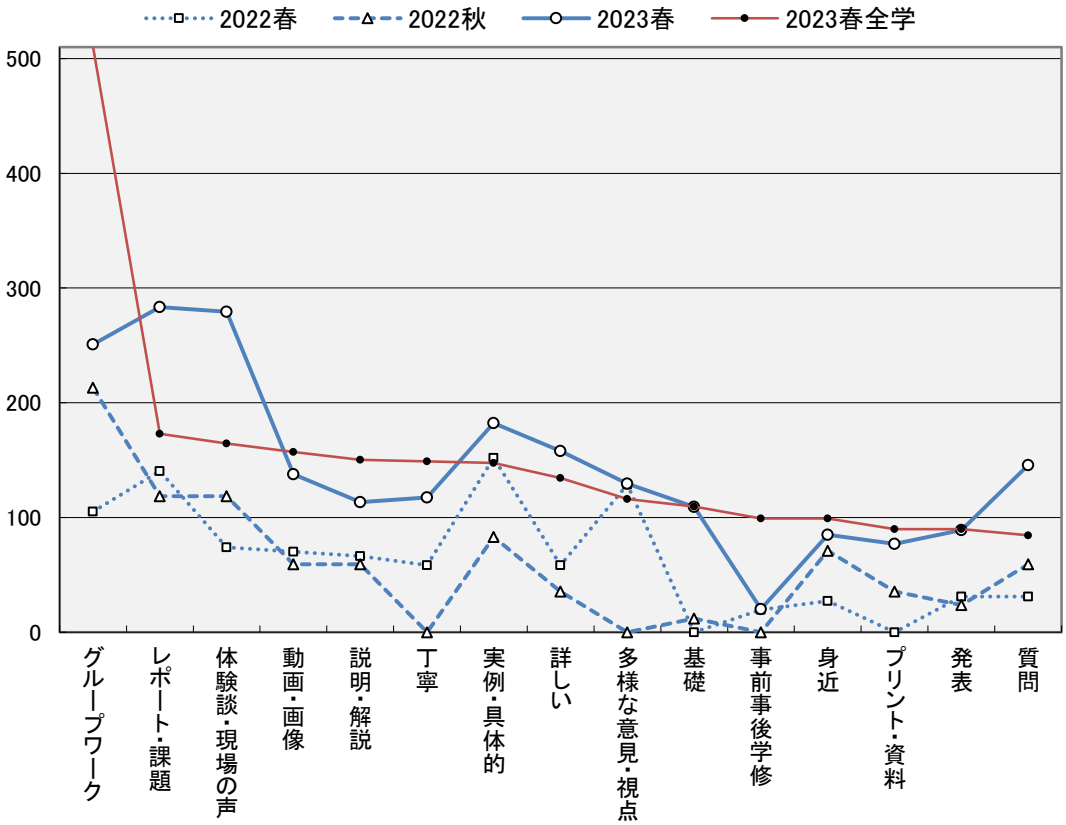


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《文学部》

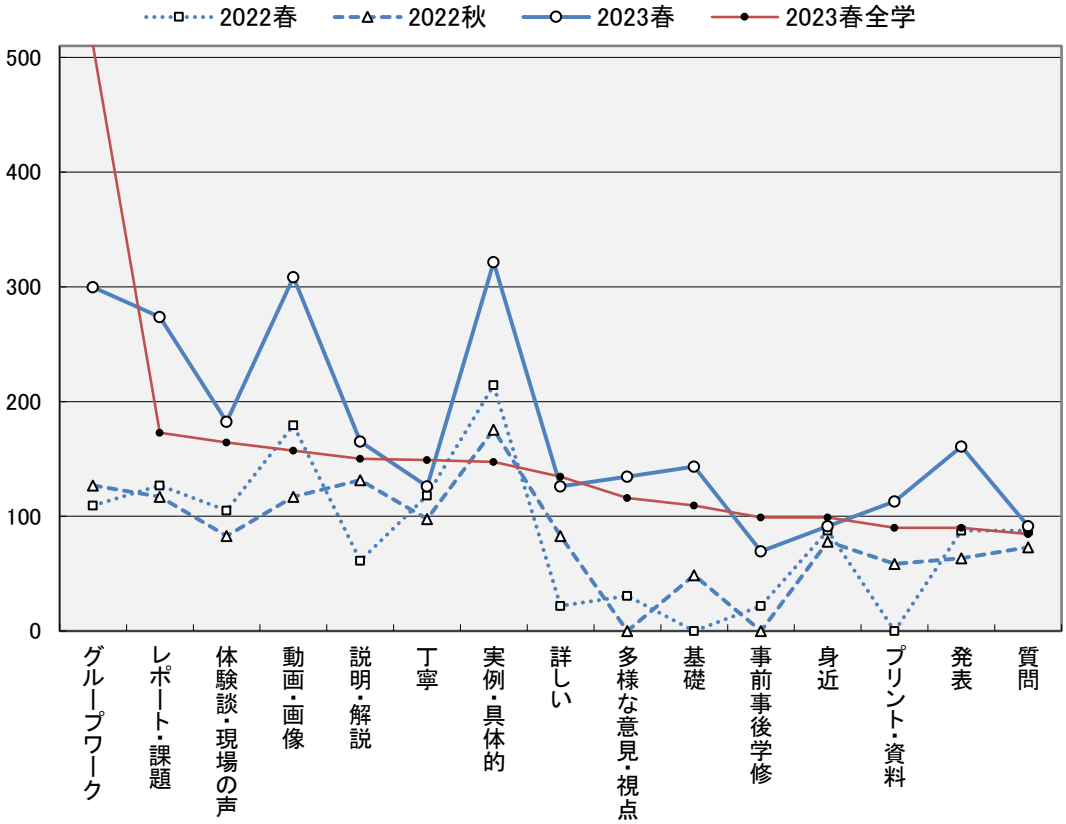


《表現学部》

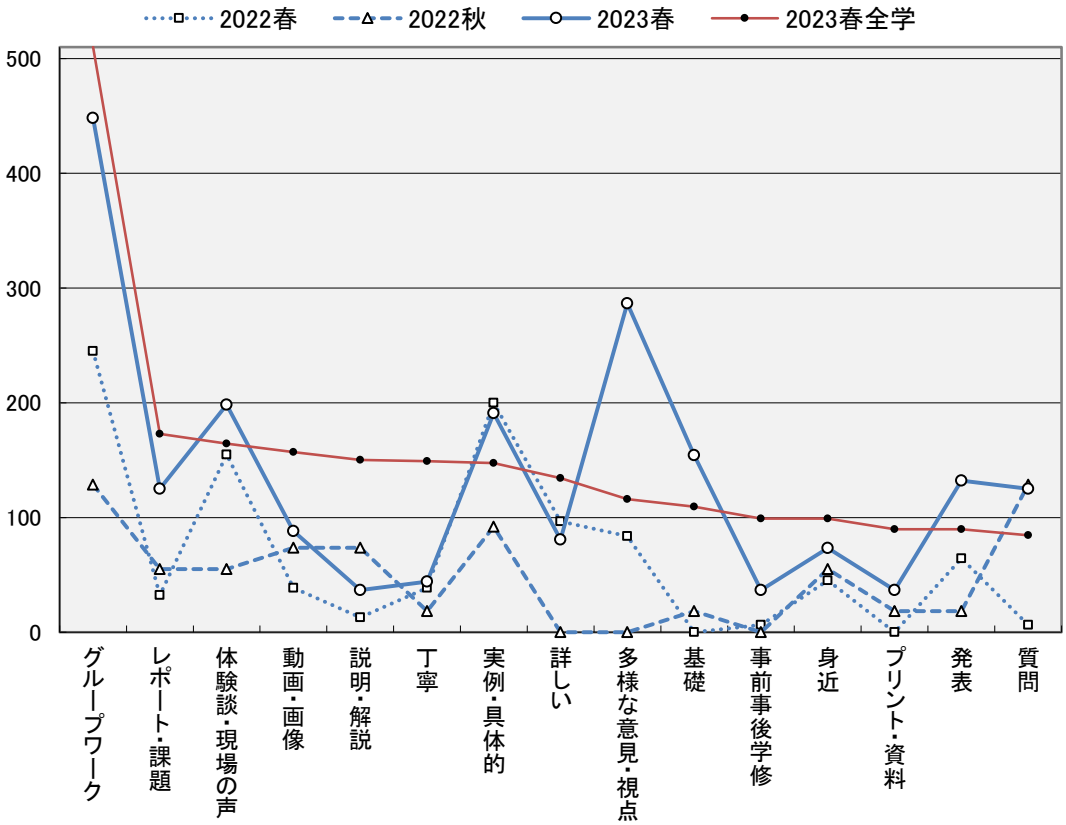


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《心理社会学部》

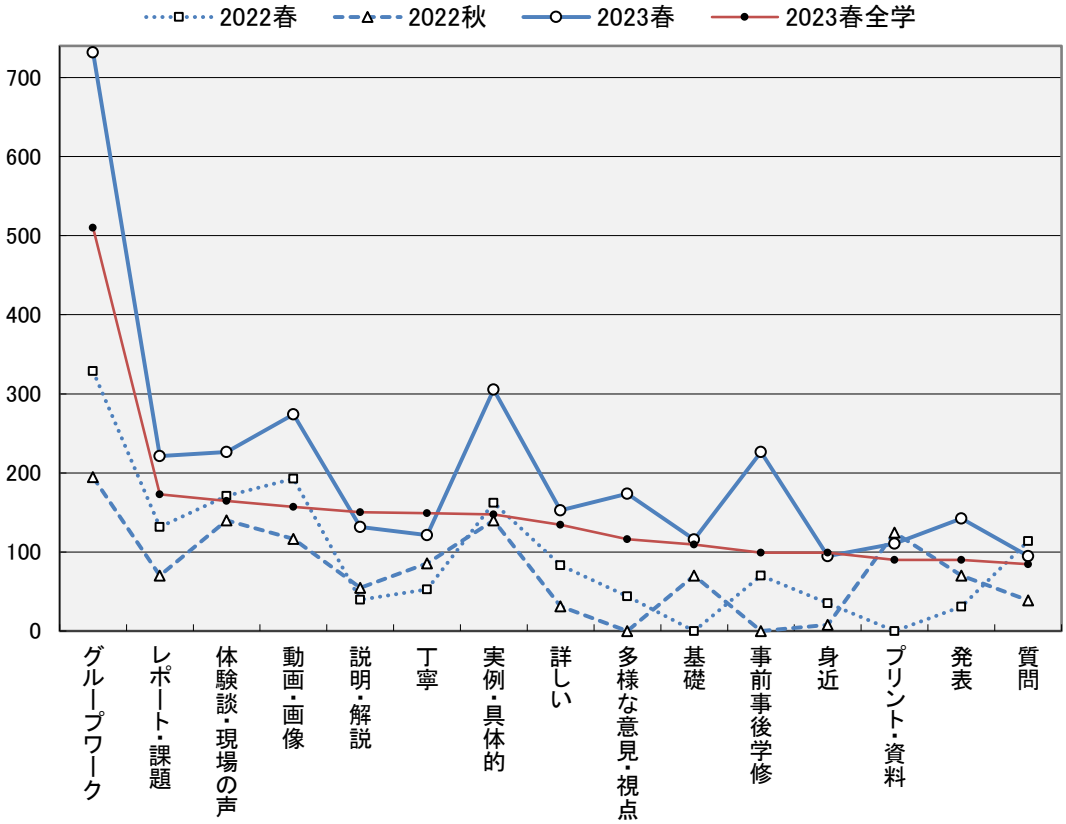


《地域創生学部》

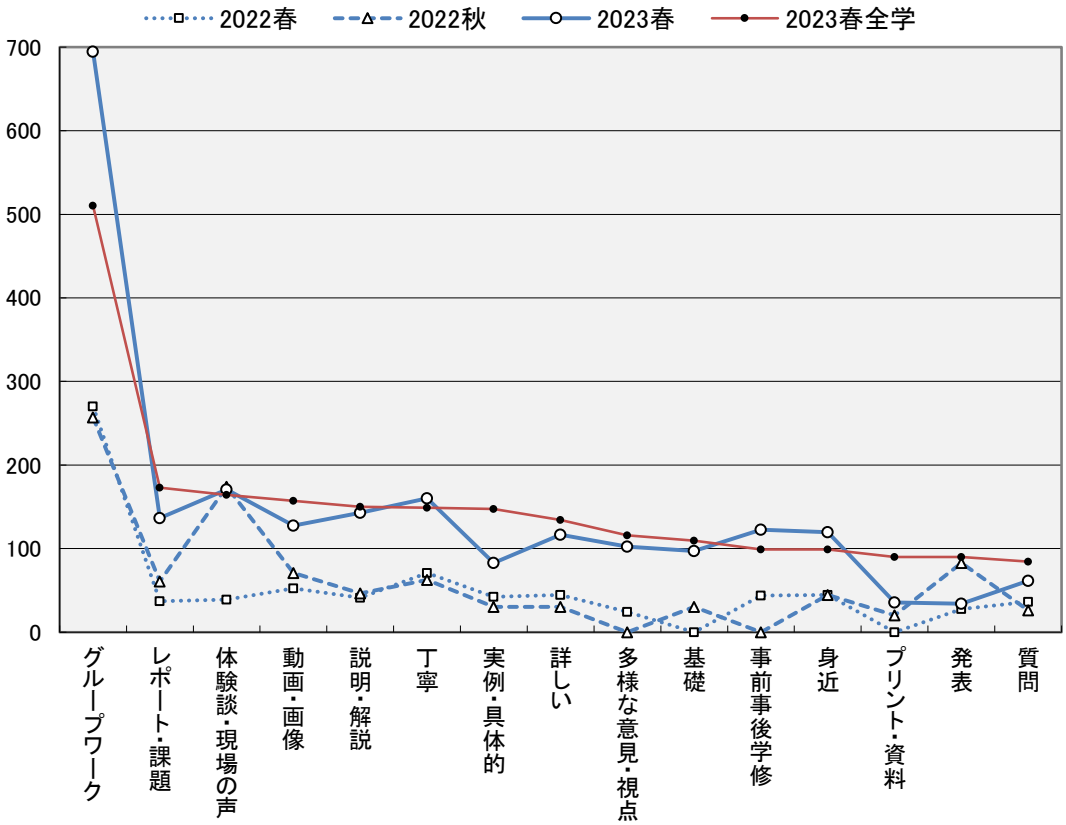


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《社会共生学部》

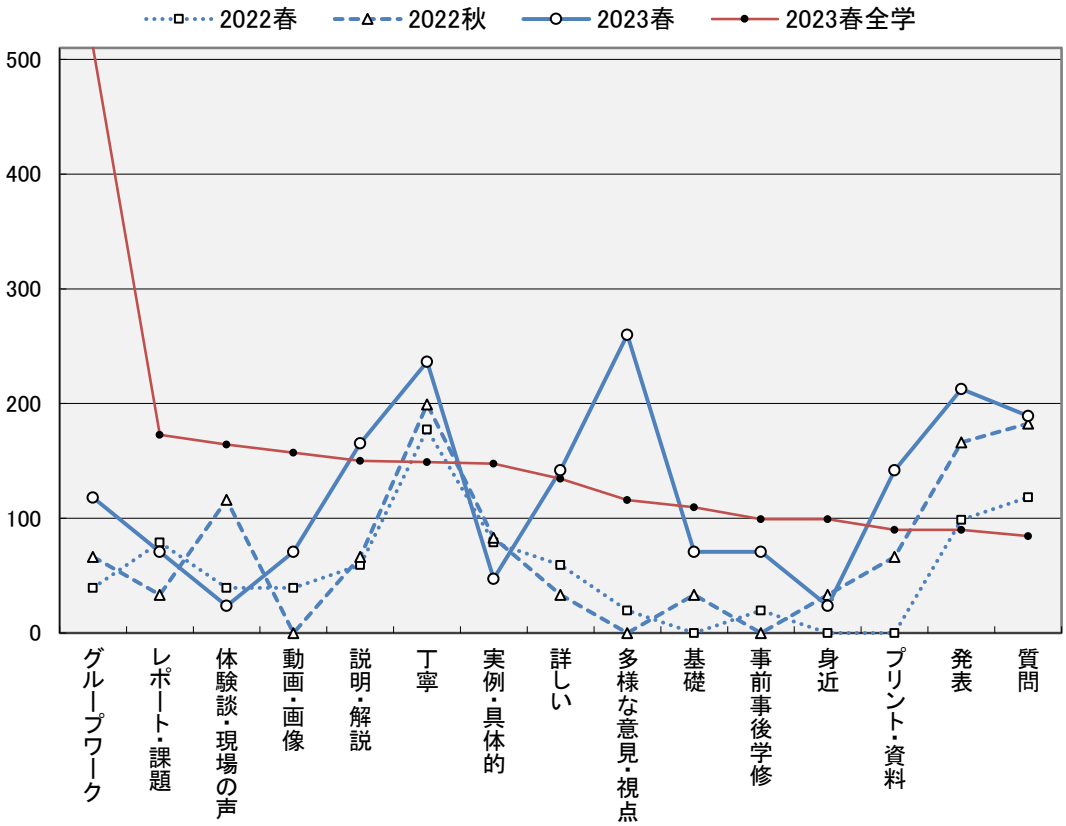


《Ⅰ類・第Ⅱ類(学部共通)・Ⅲ類》

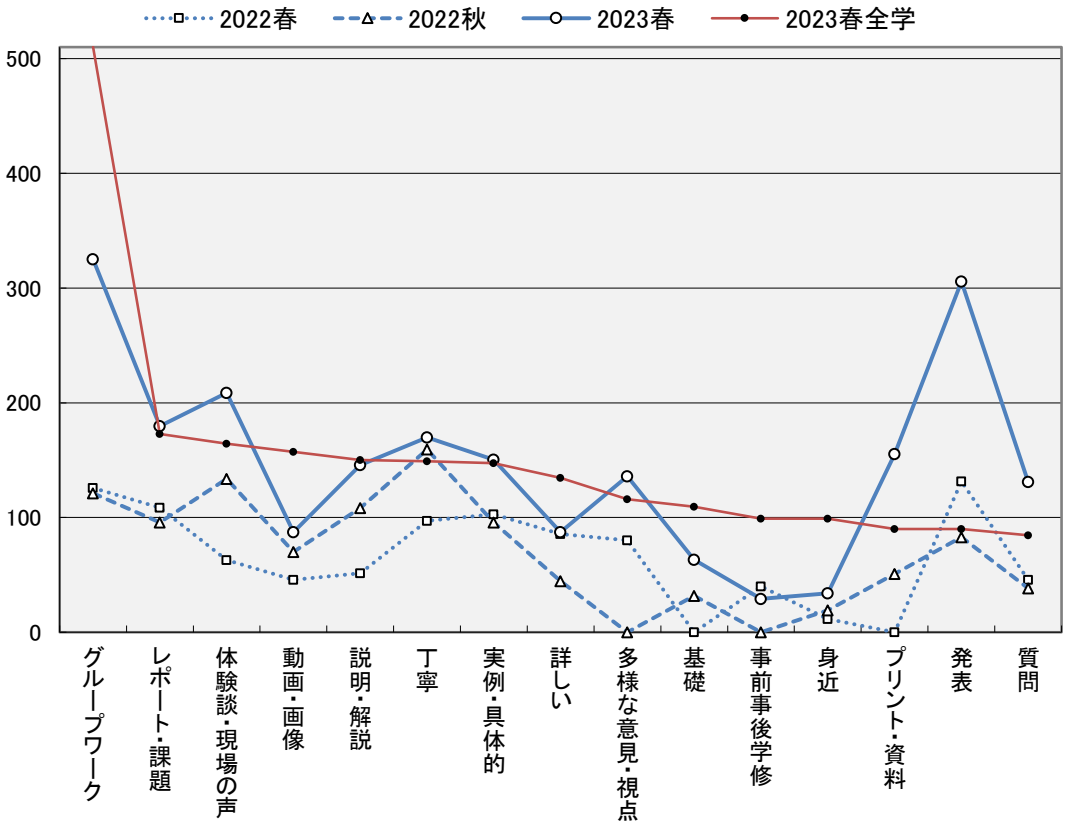


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

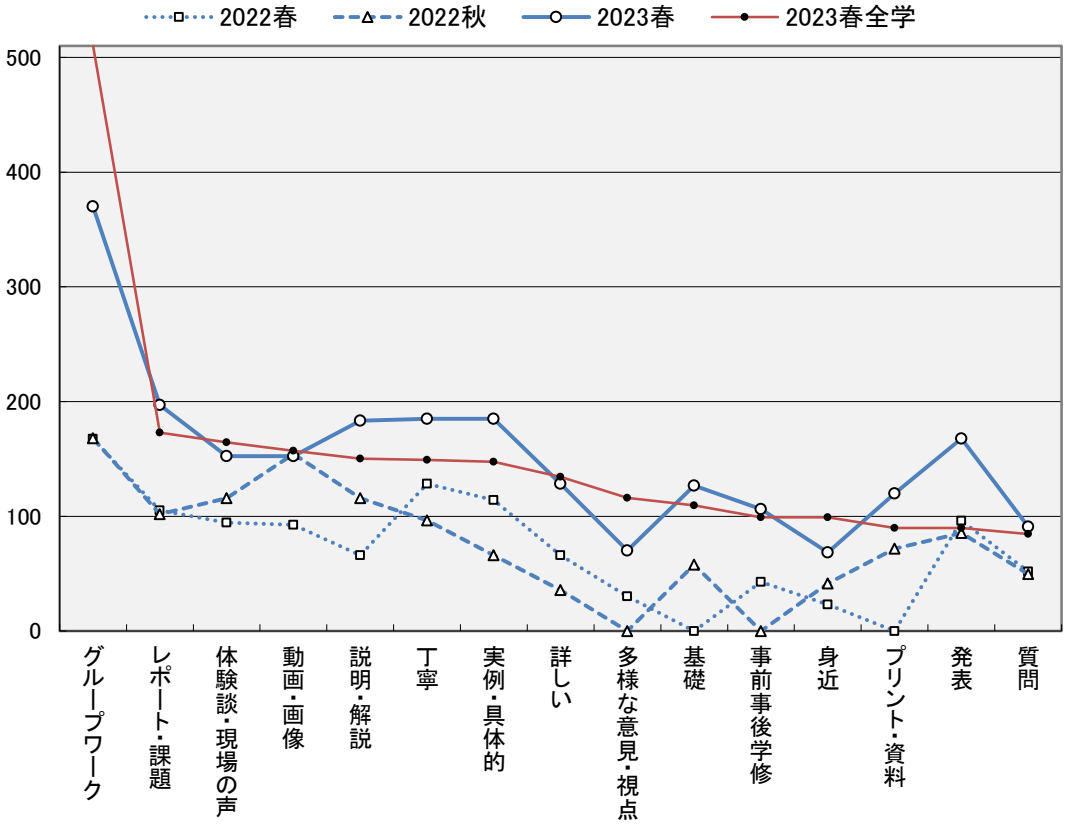


《4～9人》

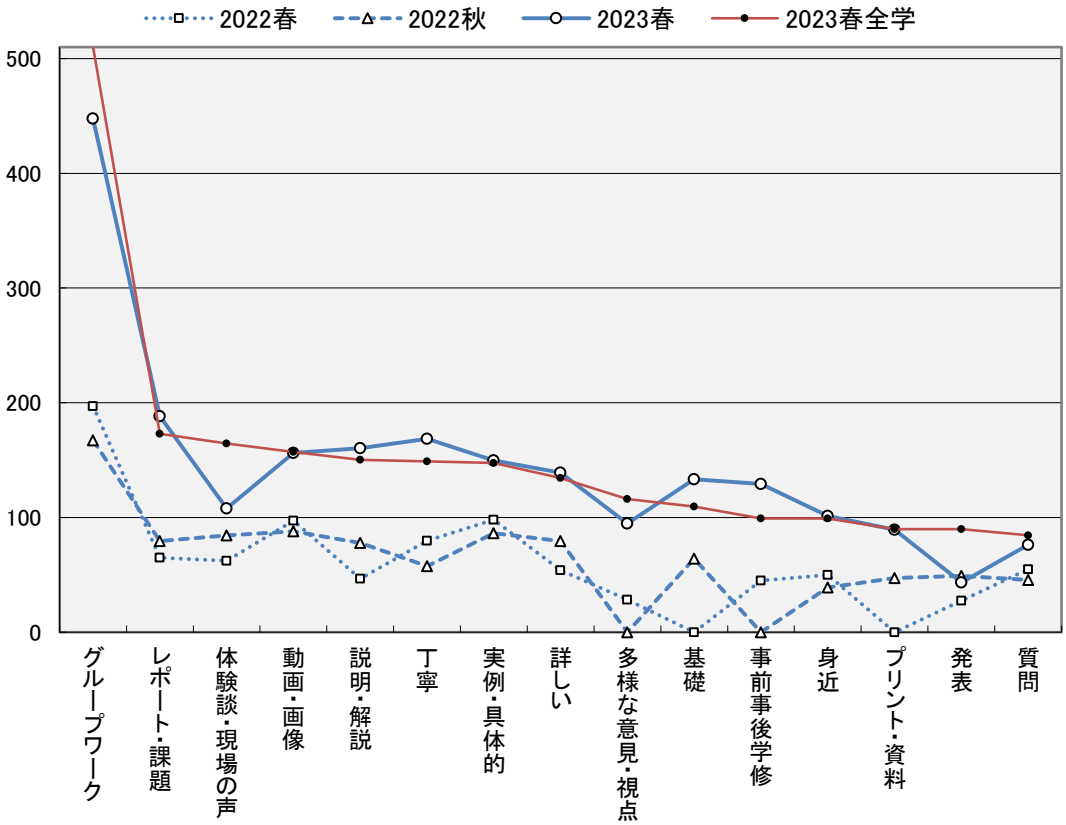


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《10～27人》

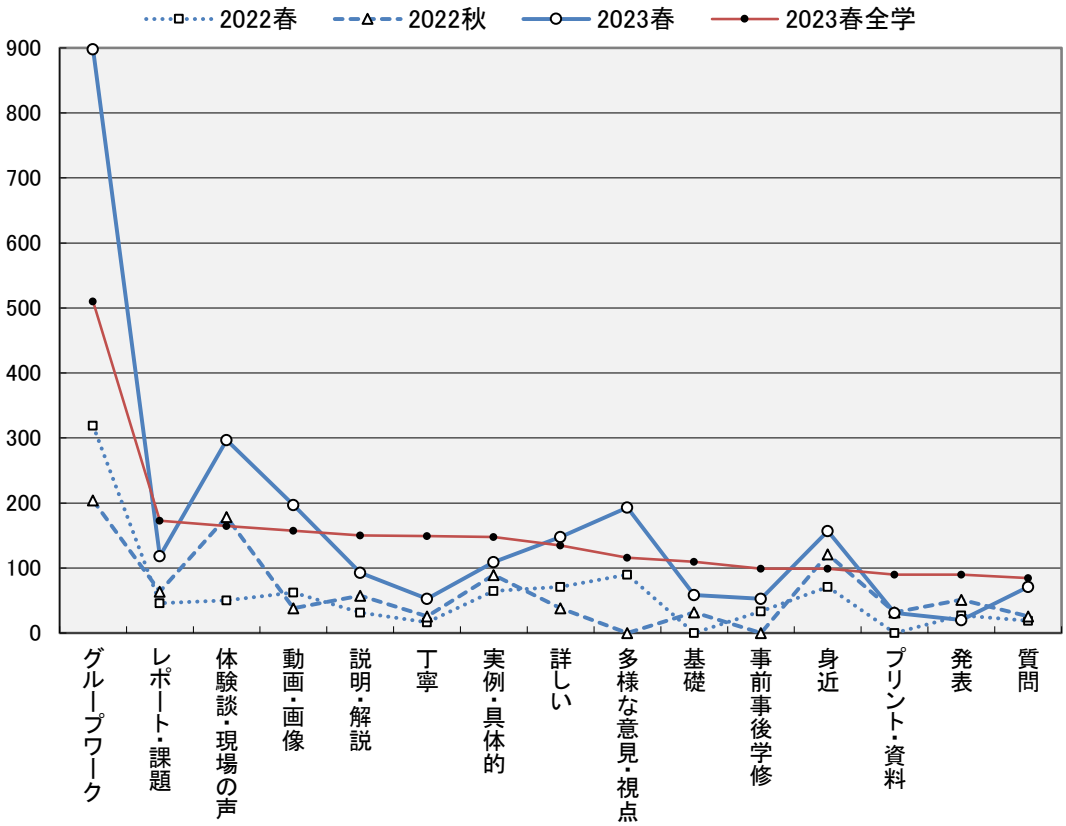


《28～81人》



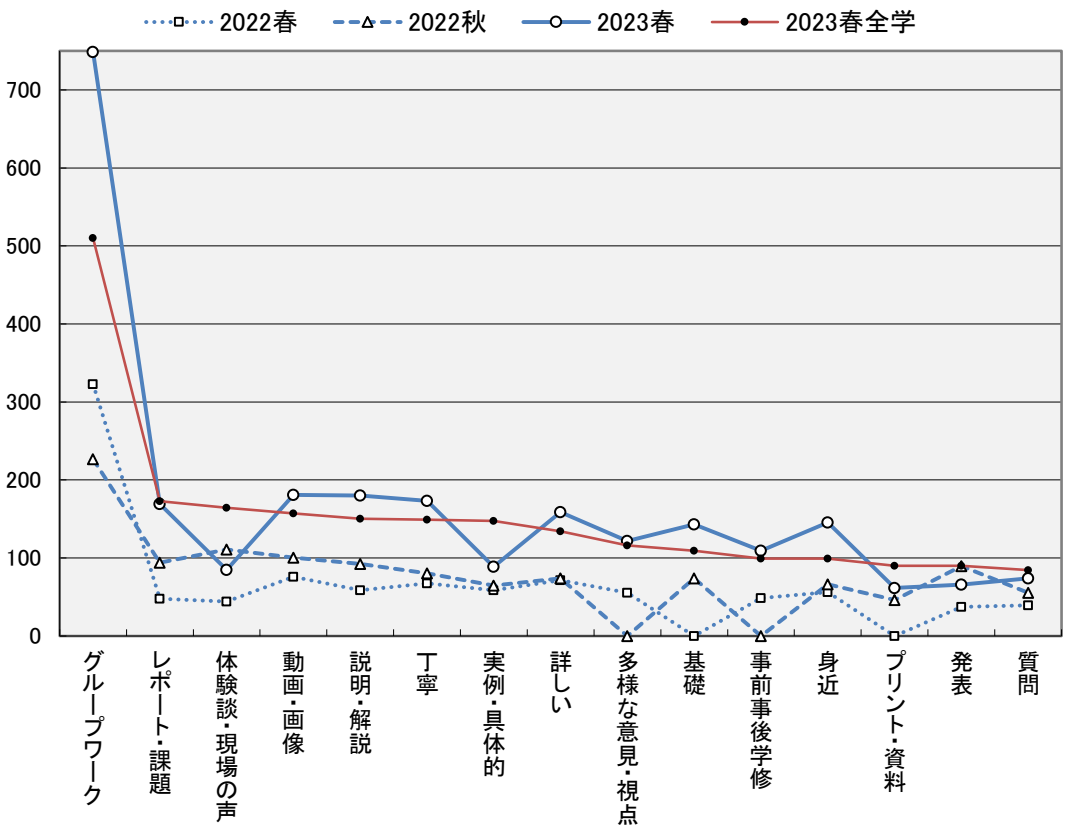
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《82人～》

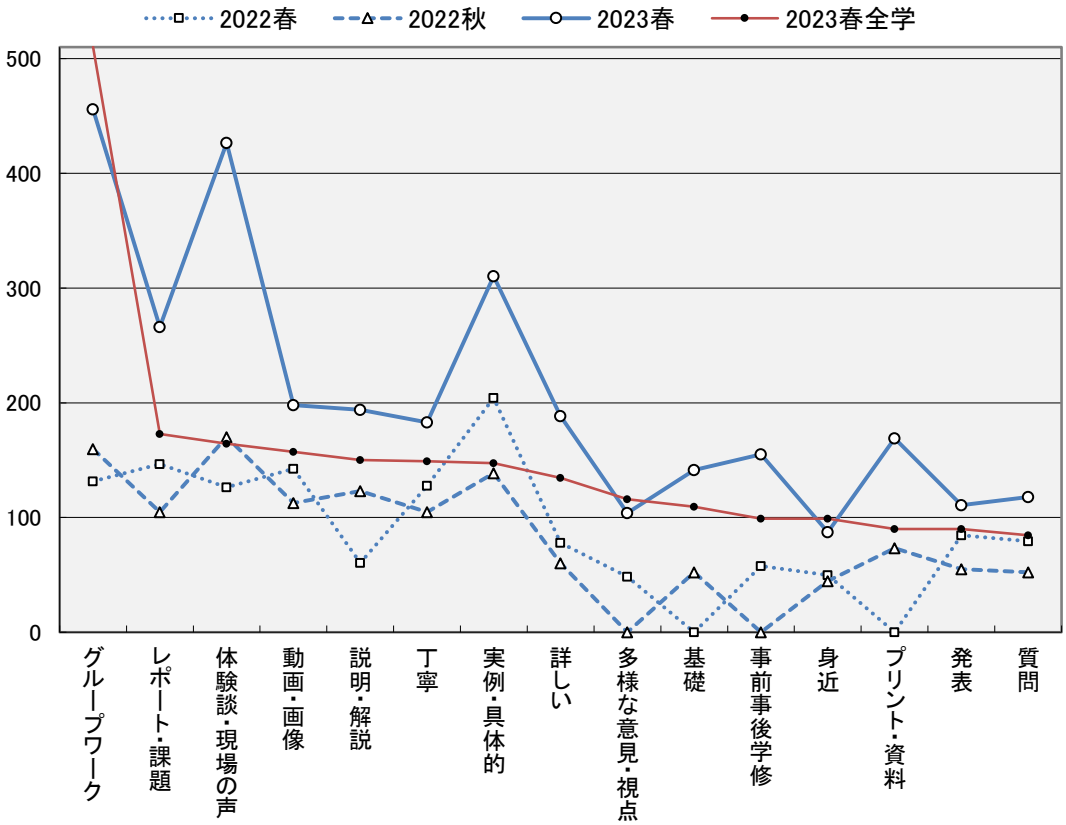


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

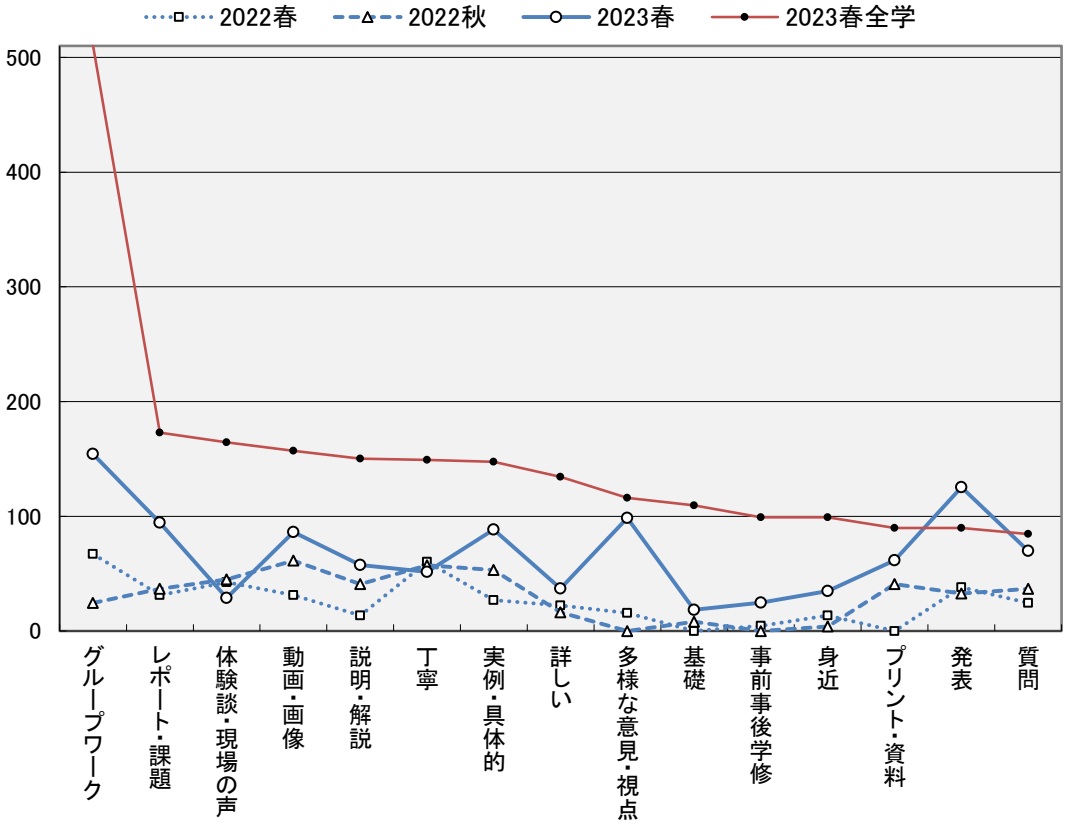


《2年》

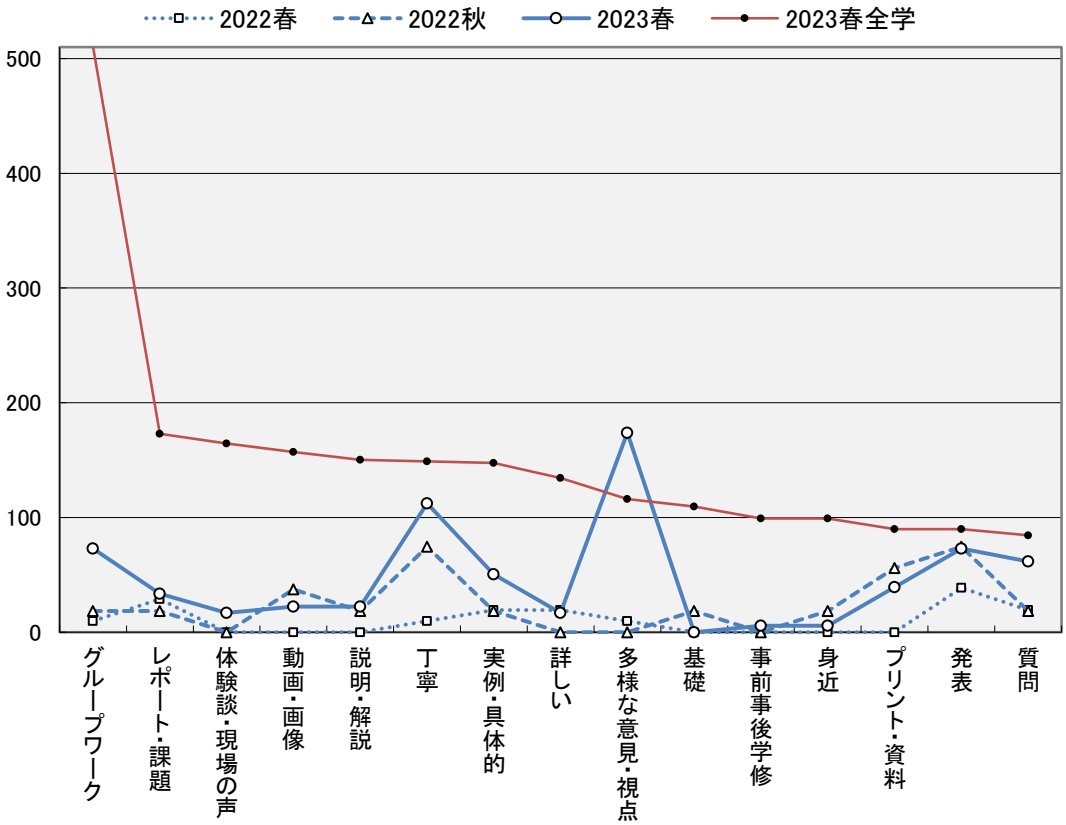


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



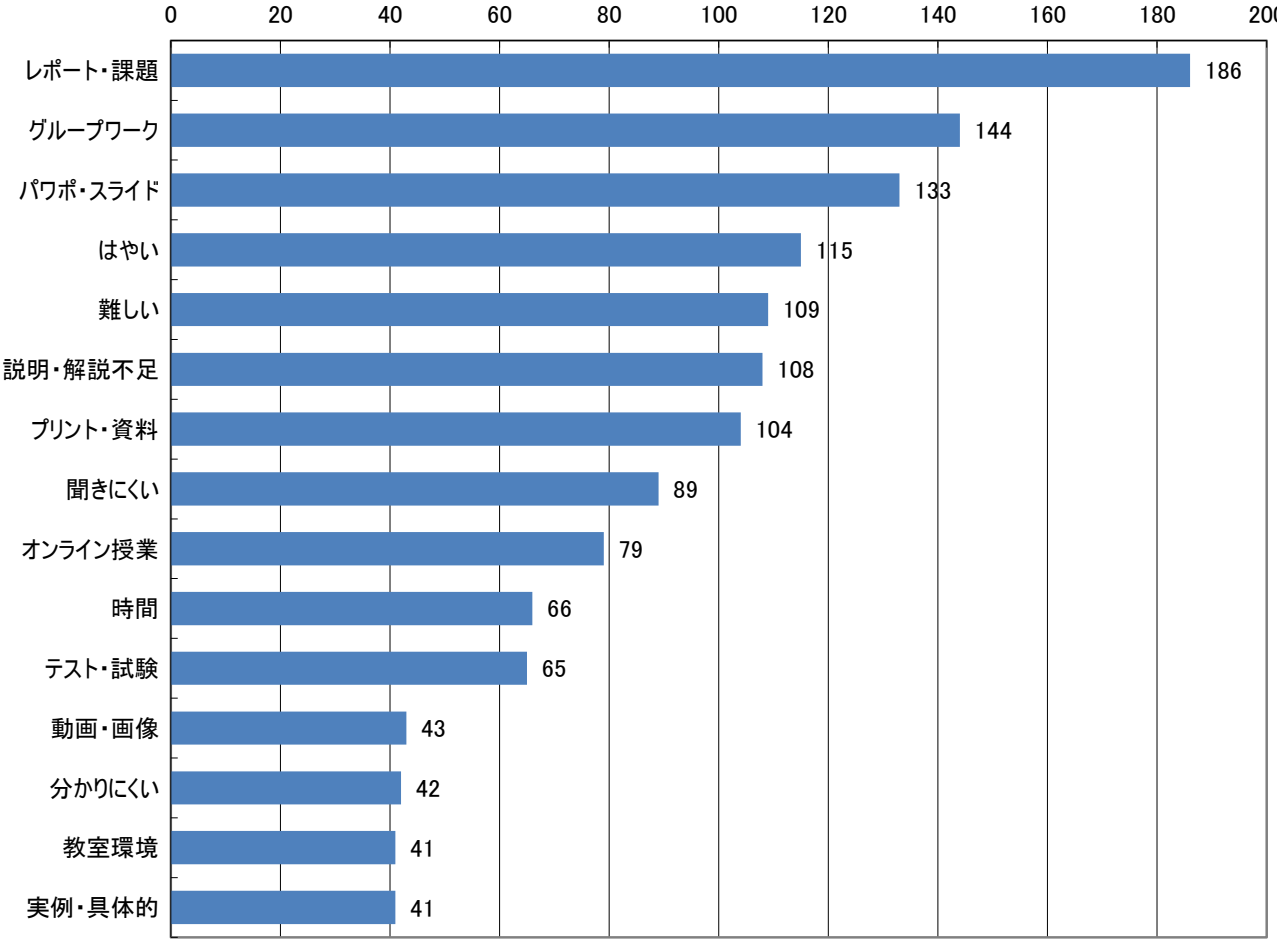
《4年》



【改善点】

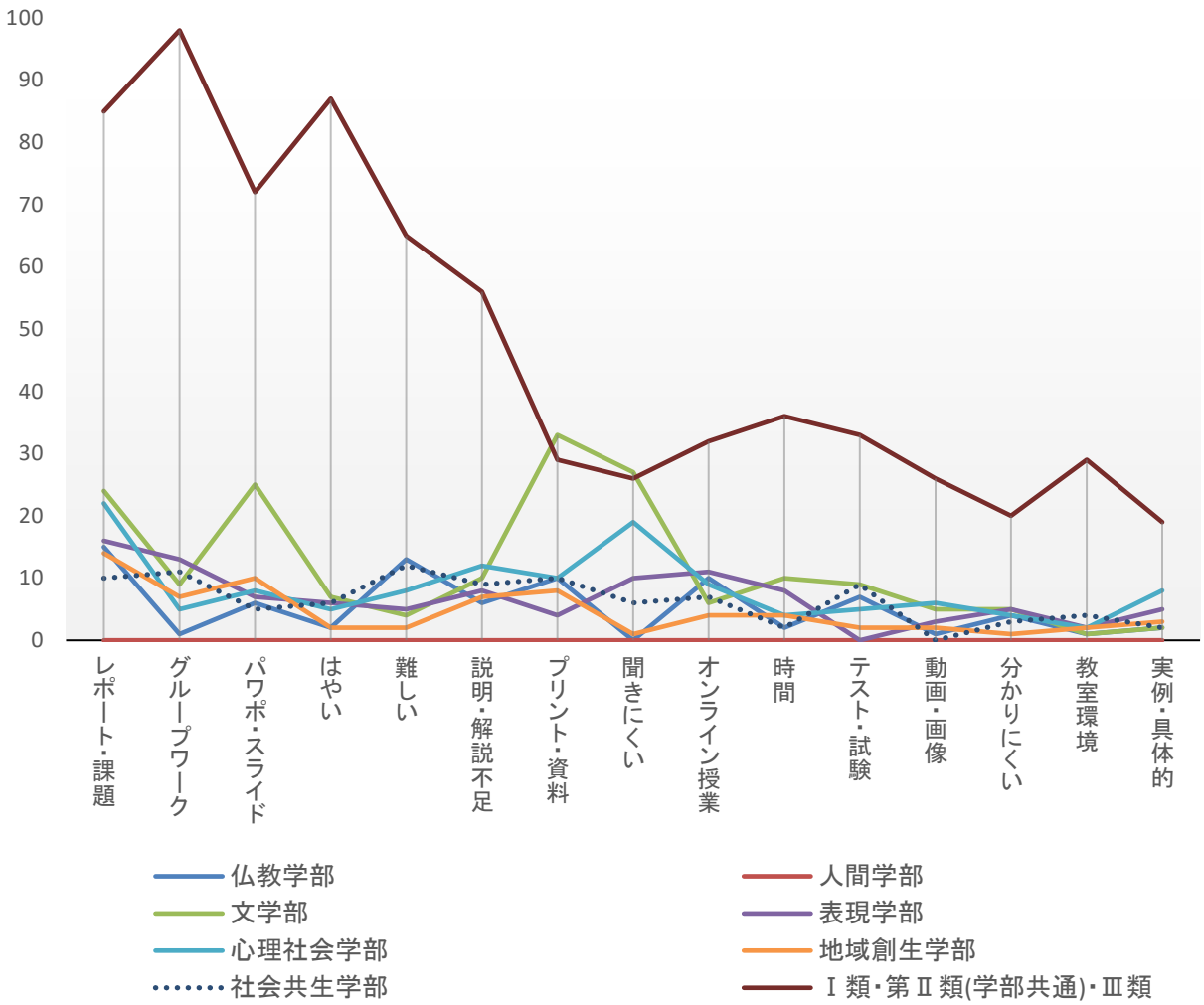
改善できる点

自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【全学】

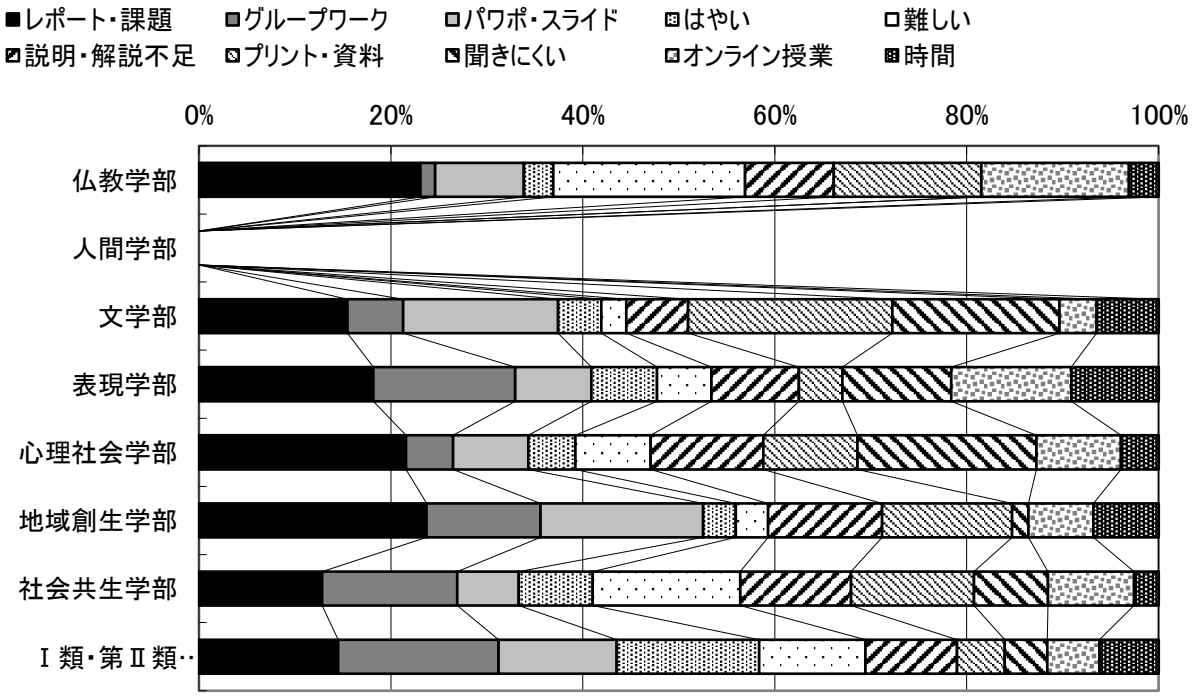


キーワード	主な内容	出現数
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法を改善してほしい／課題の答えが欲しい／課題が多い、難しい／課題の提出方法を説明してほしい	186
グループワーク	グループワークの回数、分け方、実施方法を改善してほしい	144
パワポ・スライド	パワーポイント、スライドが分かりにくい、見にくい／パワーポイント、スライドの内容、配布方法を改善してほしい ※「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類	133
はやい	進行が早い、早口、画面切り替えが早いなどの理由で授業についていけない	115
難しい	授業・資料等が難しすぎる	109
説明・解説不足	（授業について）説明・解説が不足・不十分	108
プリント・資料	プリント、資料を配布されるだけの授業で理解しづらかった／プリント、資料が分かりにくい／プリント、資料の内容、配布方法を改善してほしい	104
聞きにくい	声が小さい、聞き取りづらい／声が大きすぎる／（声が小さいので）マイクを使ってほしい／（うるさいので）マイクを使わないでほしい ※「早口で聞きにくい」は「はやい」に分類	89
オンライン授業	動画配信してほしかった／動画配信期間が短かった／ほかの方法（ツール）がよかった／課題配信型ではなく、オンライン授業をしてほしかった／オンライン授業の進め方がよくなかった／対面の授業がよかった	79
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない／授業時間以外の負担が大きい ※「スライドを変える時間が短い」は「はやい」に、「テスト時間が短い、足りない」は「テスト・試験」に分類	66
テスト・試験	テストの実施方法を改善してほしい／テストが難しい／テスト時間が短い、足りない テスト中は静かにしてほしい	65
動画・画像	動画、映像、写真が分かりにくい（見えにくい）／動画、映像が欲しかった	43
分かりにくい	授業が分かりにくい ※プリント・資料、説明・解説などが分かりにくいはそれぞれの項目に分類	42
教室環境	教室が狭い、暑い、寒い、臭い／Wi-Fiが繋がらない、通信環境がよくない／環境を改善してほしい	41
実例・具体的	実例・具体例をあげてほしかった／具体的に説明してほしかった	41

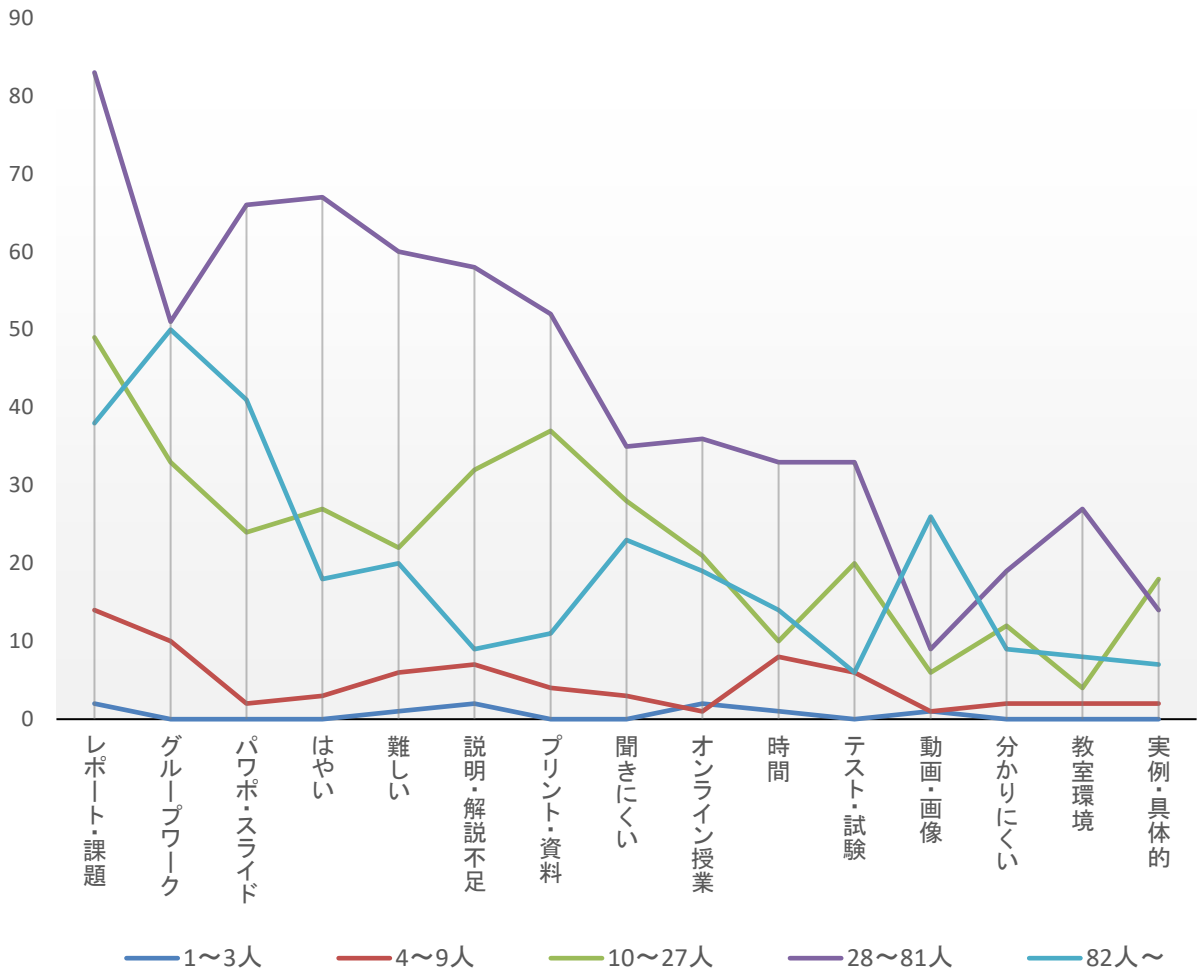
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【学部別】



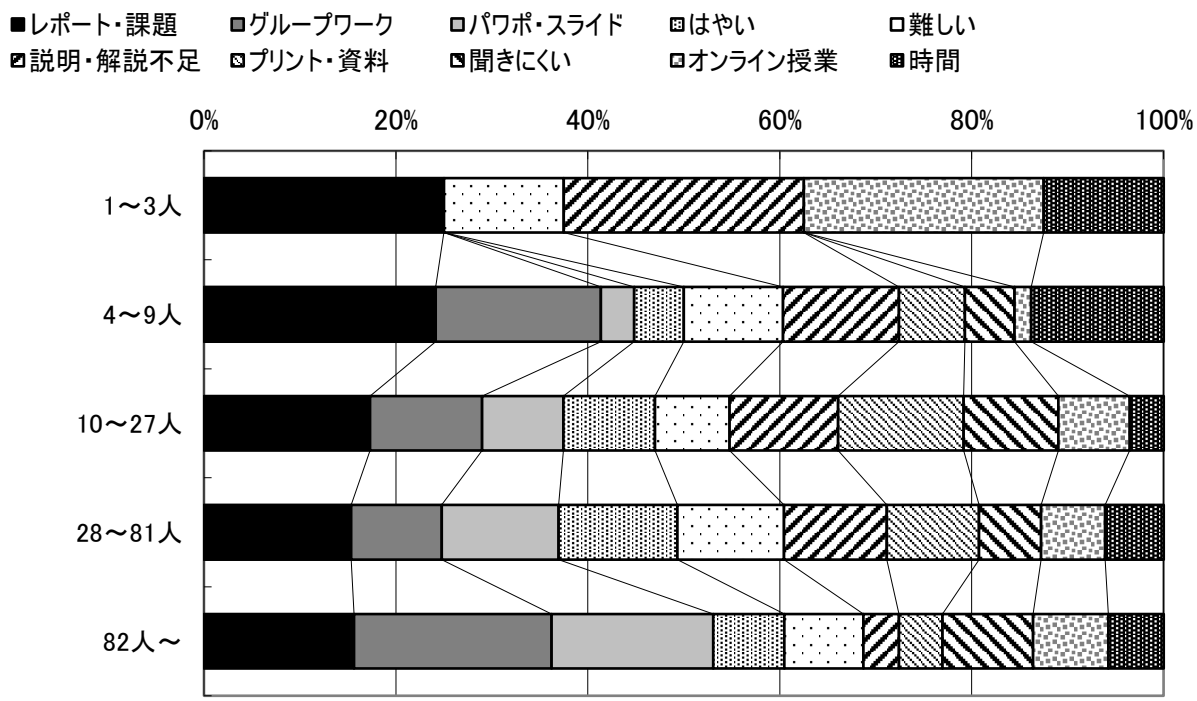
上位10項目の学部別割合



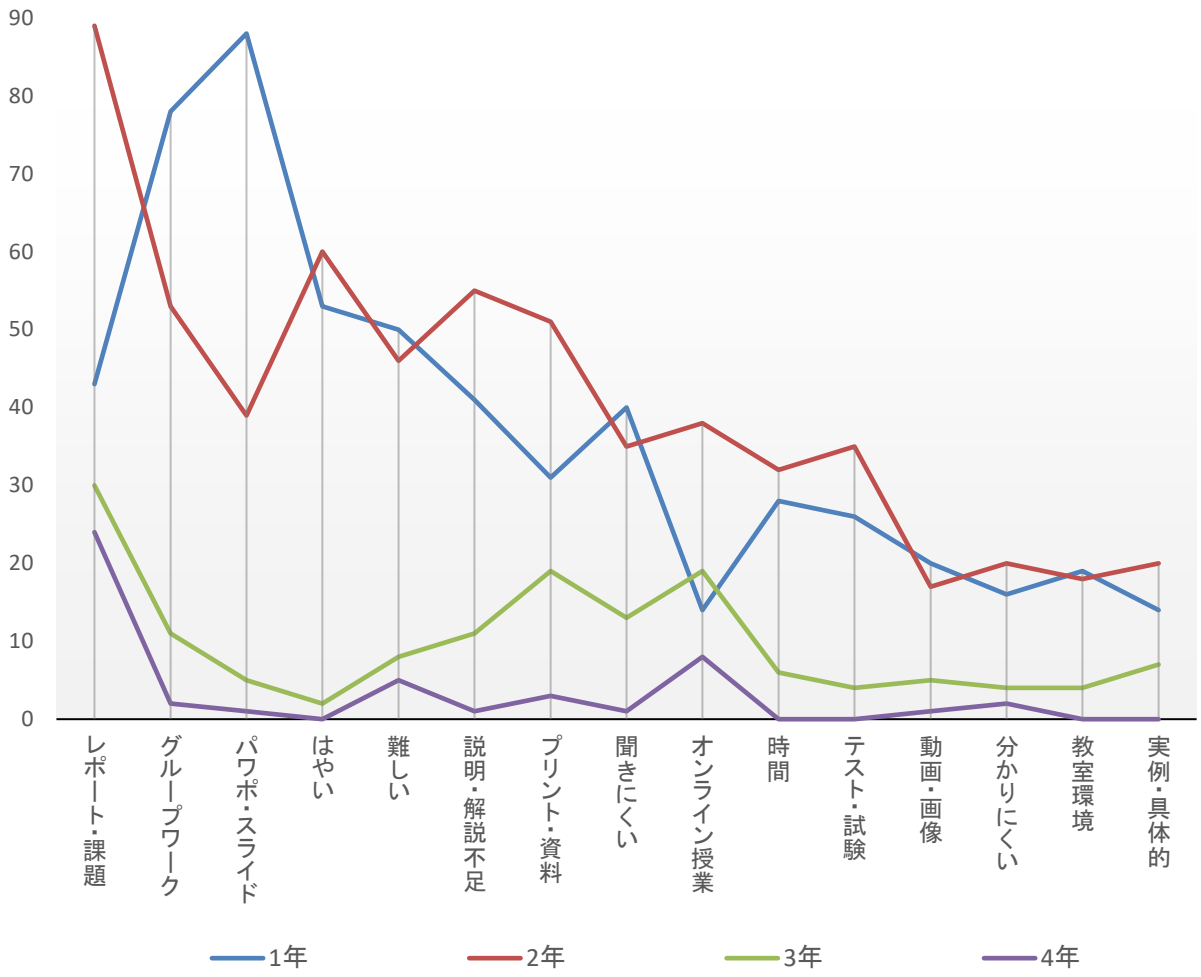
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【回答人数帯別】



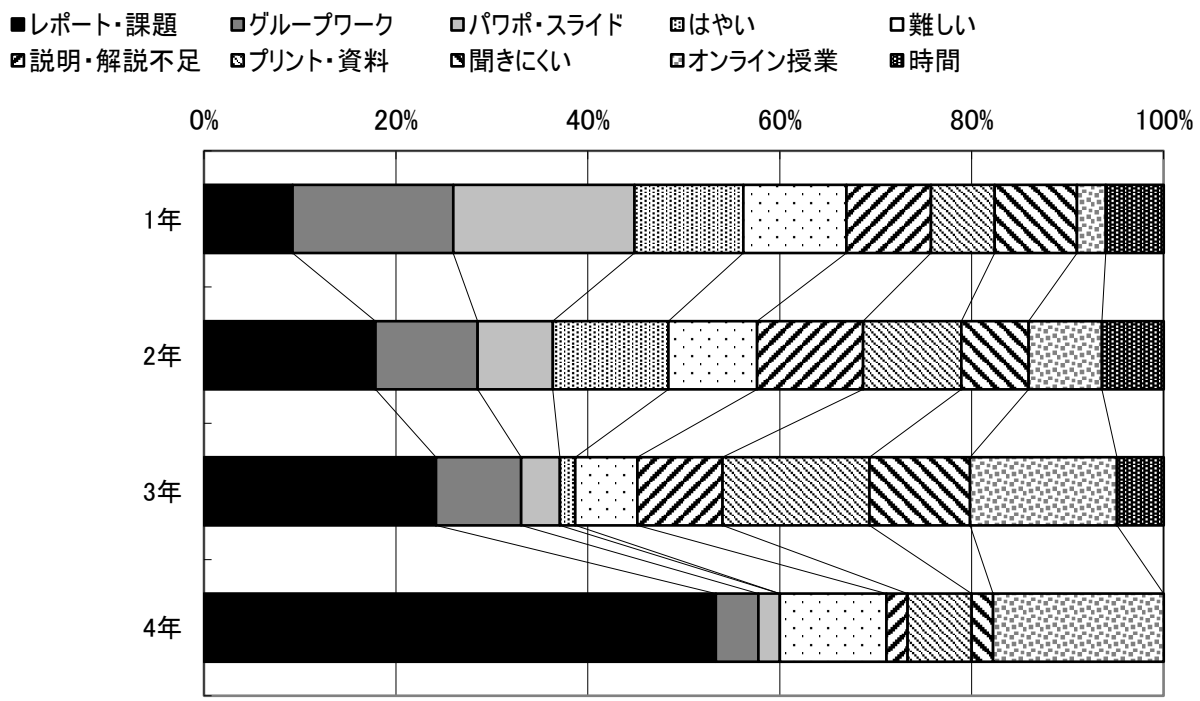
上位10項目の回答人数帯別割合



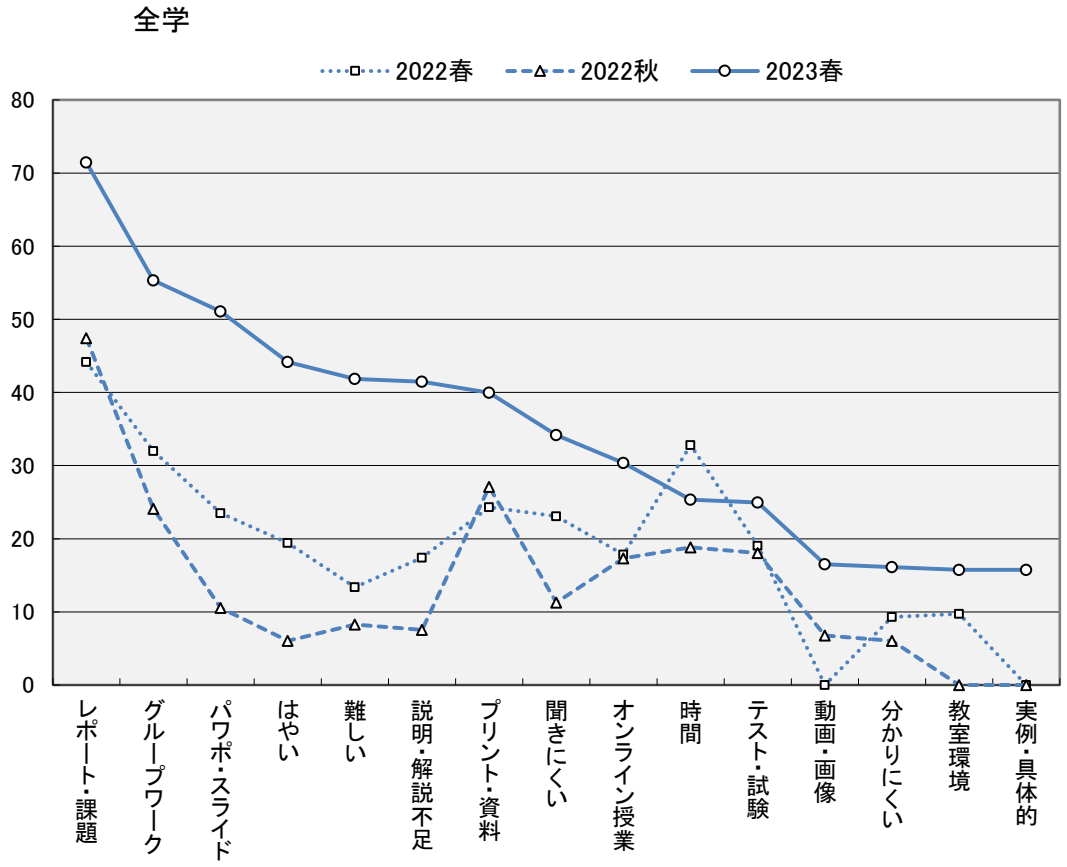
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 全学

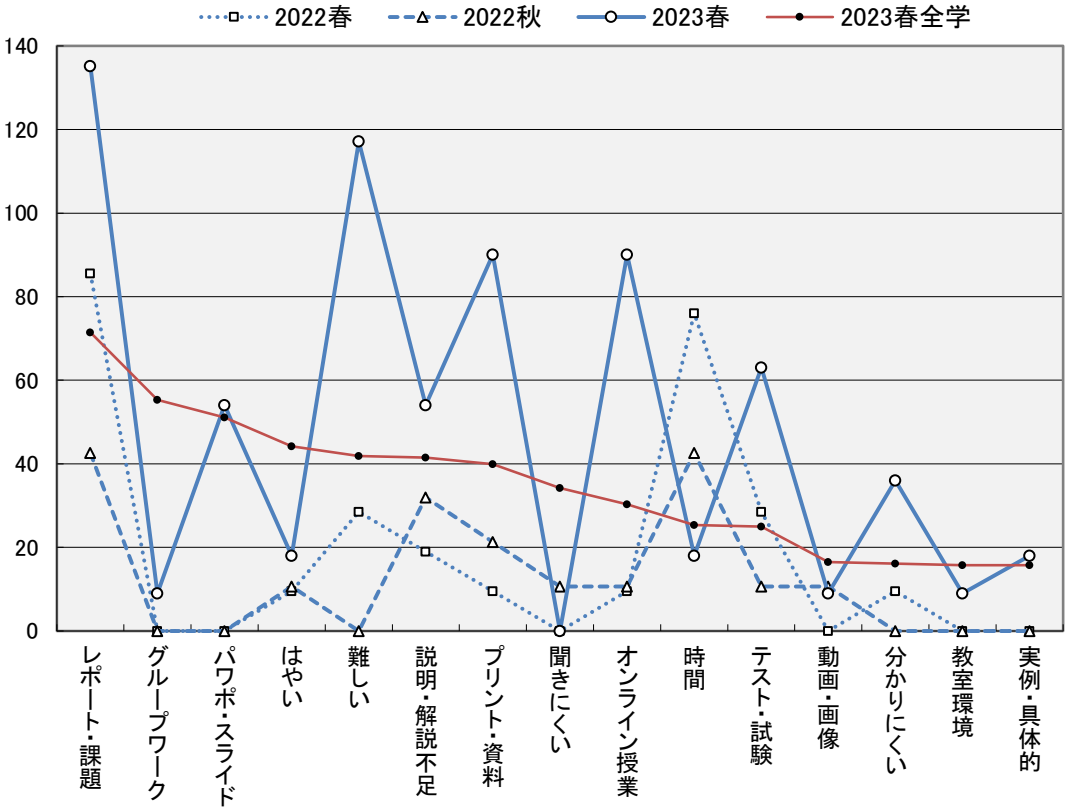


「出現率」について

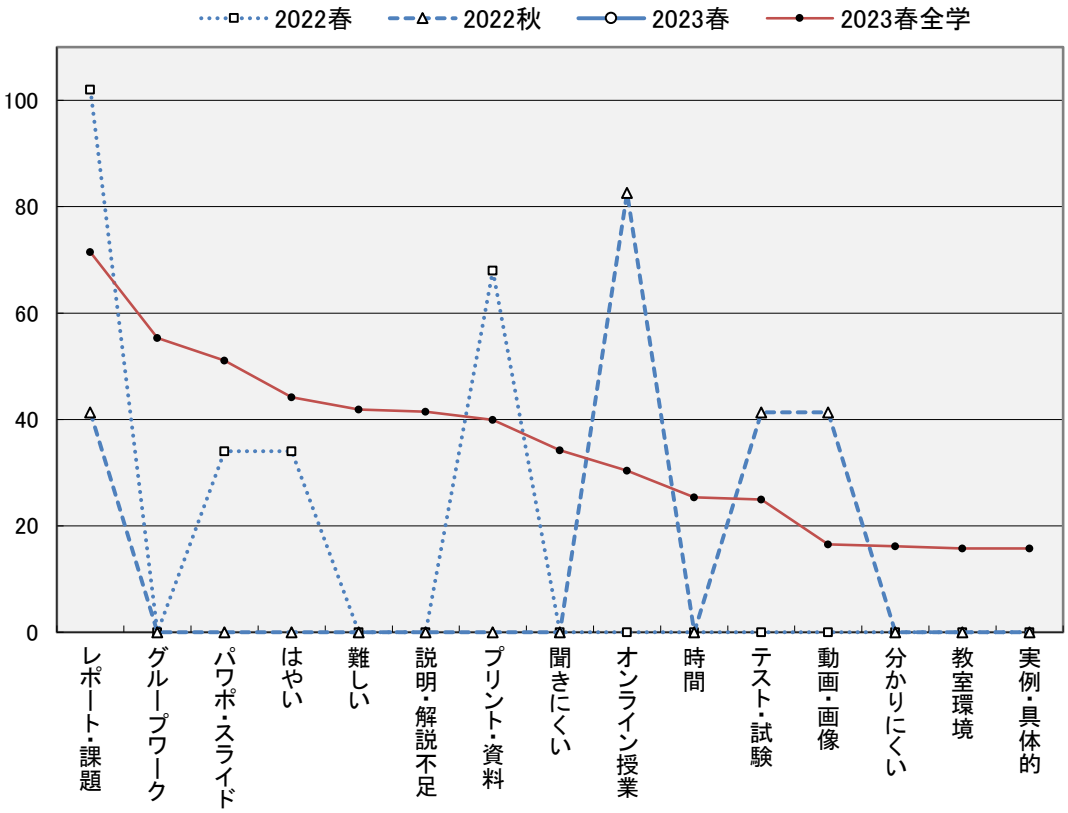
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
  総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
  出現率は下記の式で計算されます。
  出現率＝出現数／回答者数×10^4
  （回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。）
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《仏教学部》

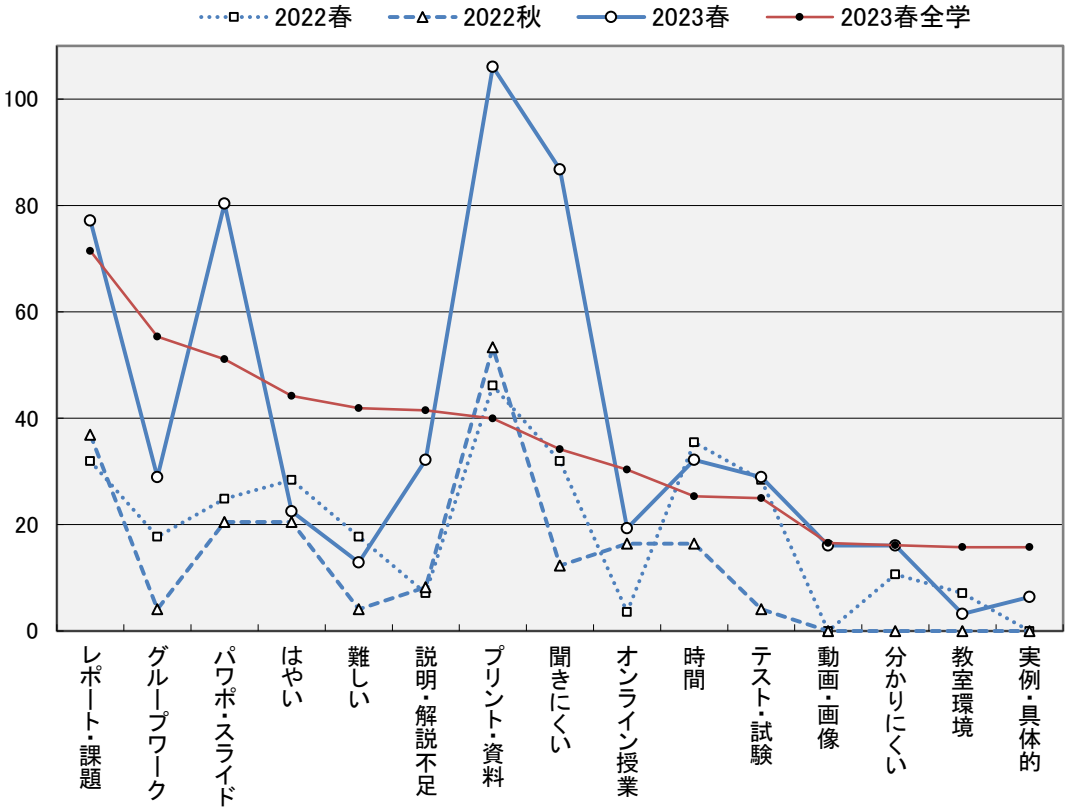


《人間学部》

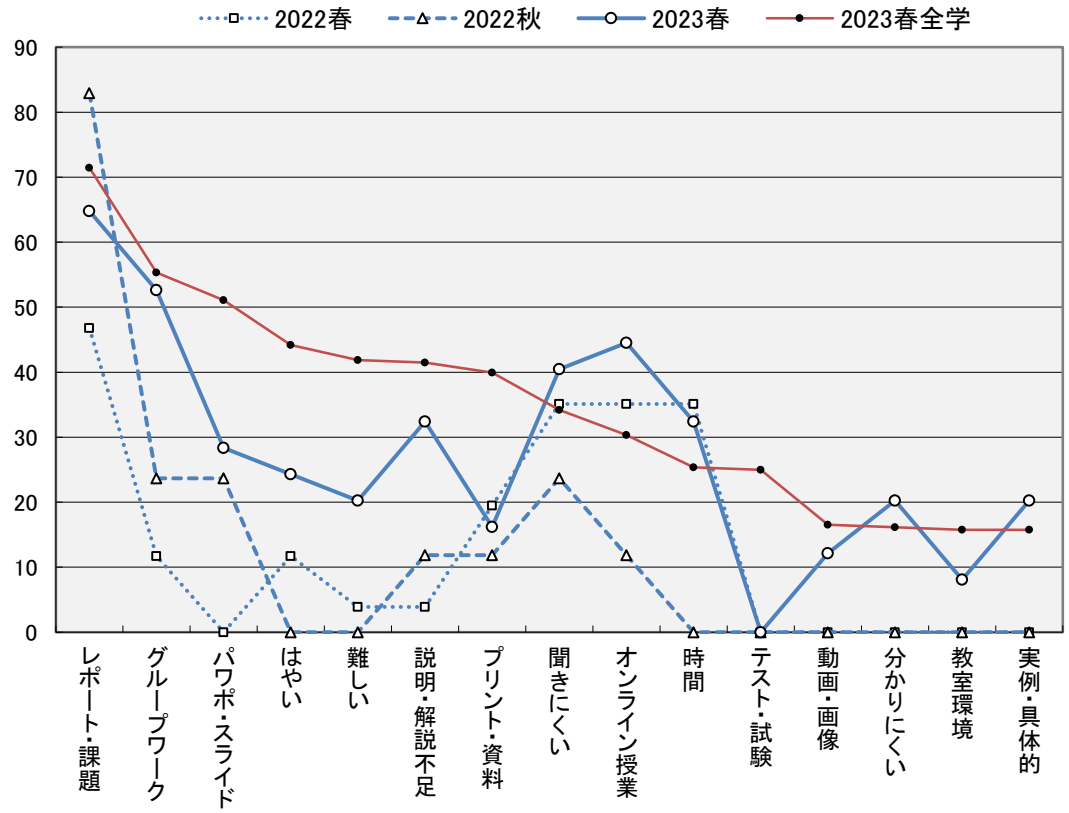


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《文学部》

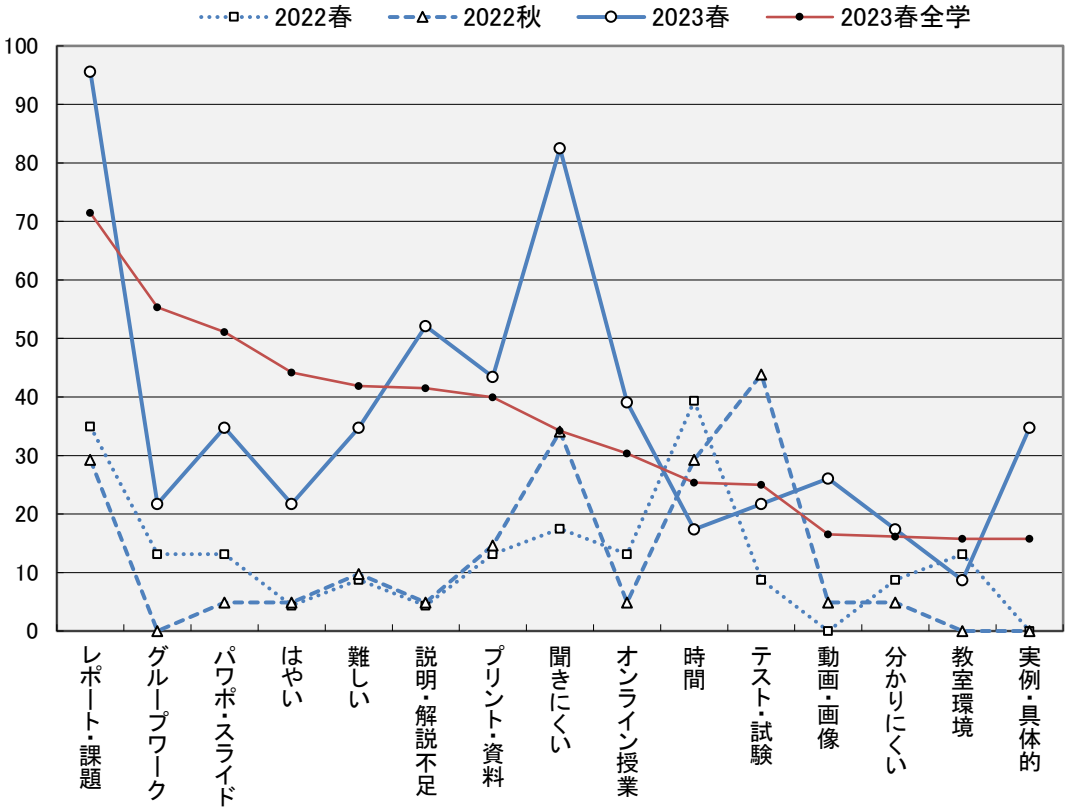


《表現学部》

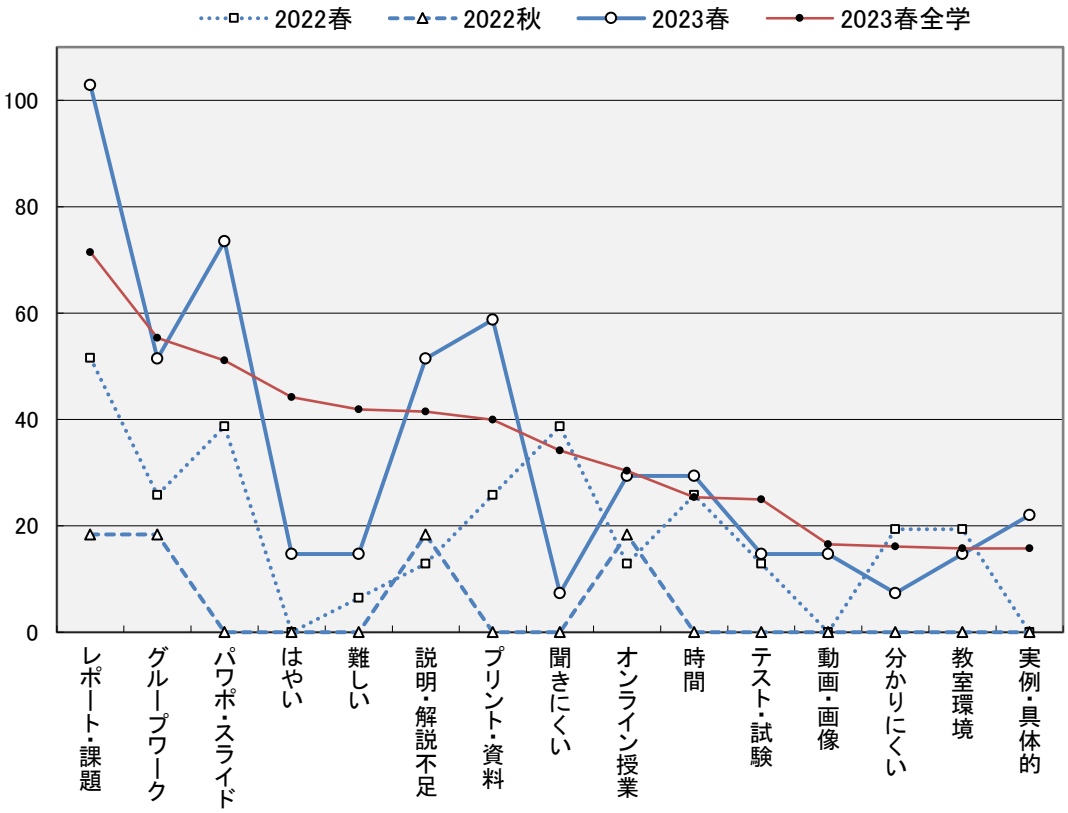


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《心理社会学部》

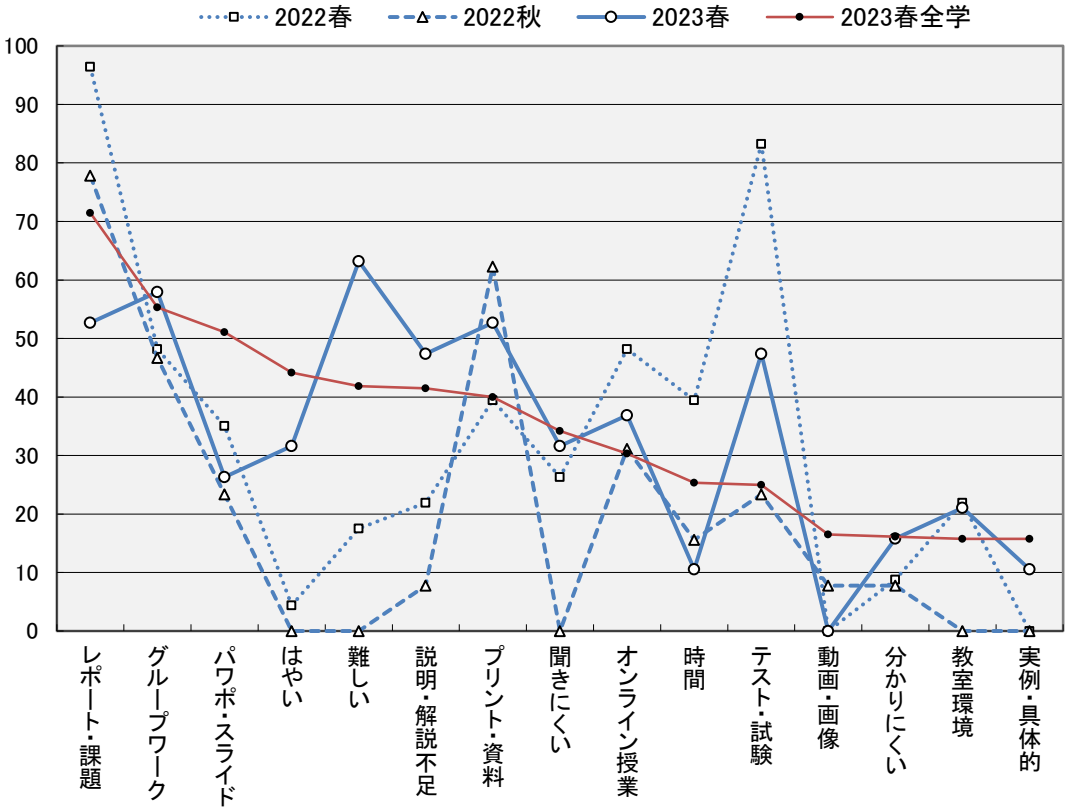


《地域創生学部》

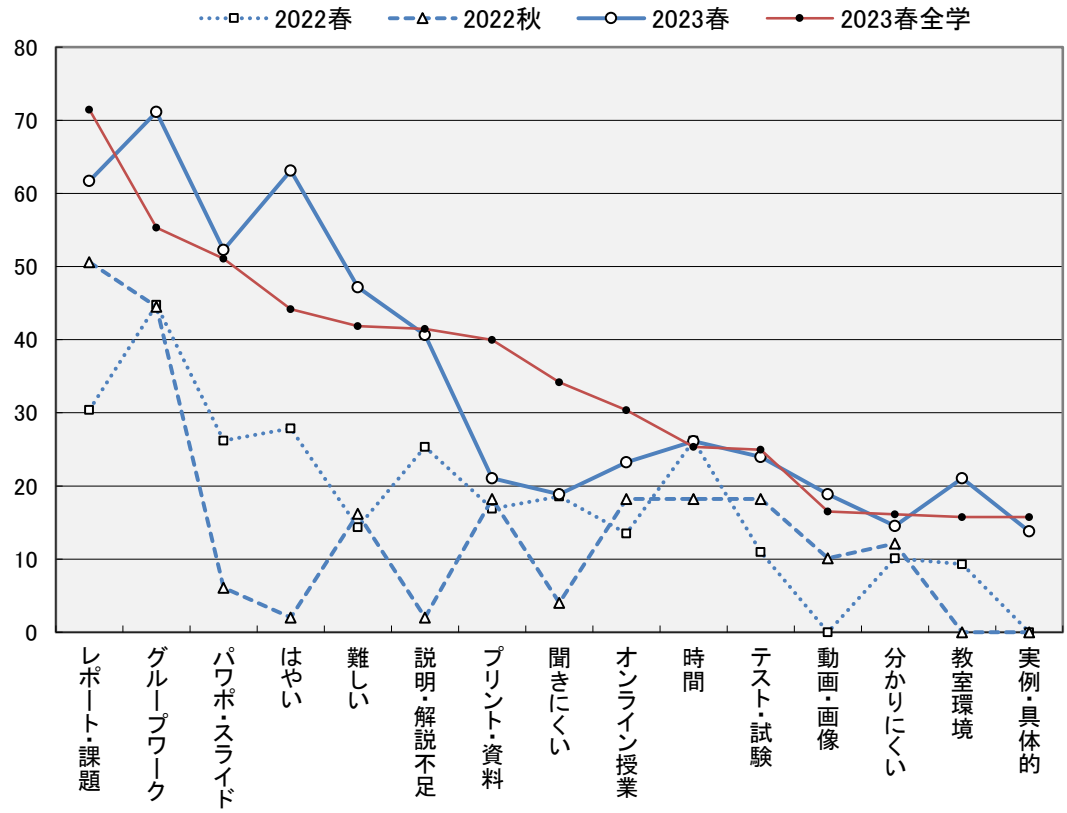


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《社会共生学部》

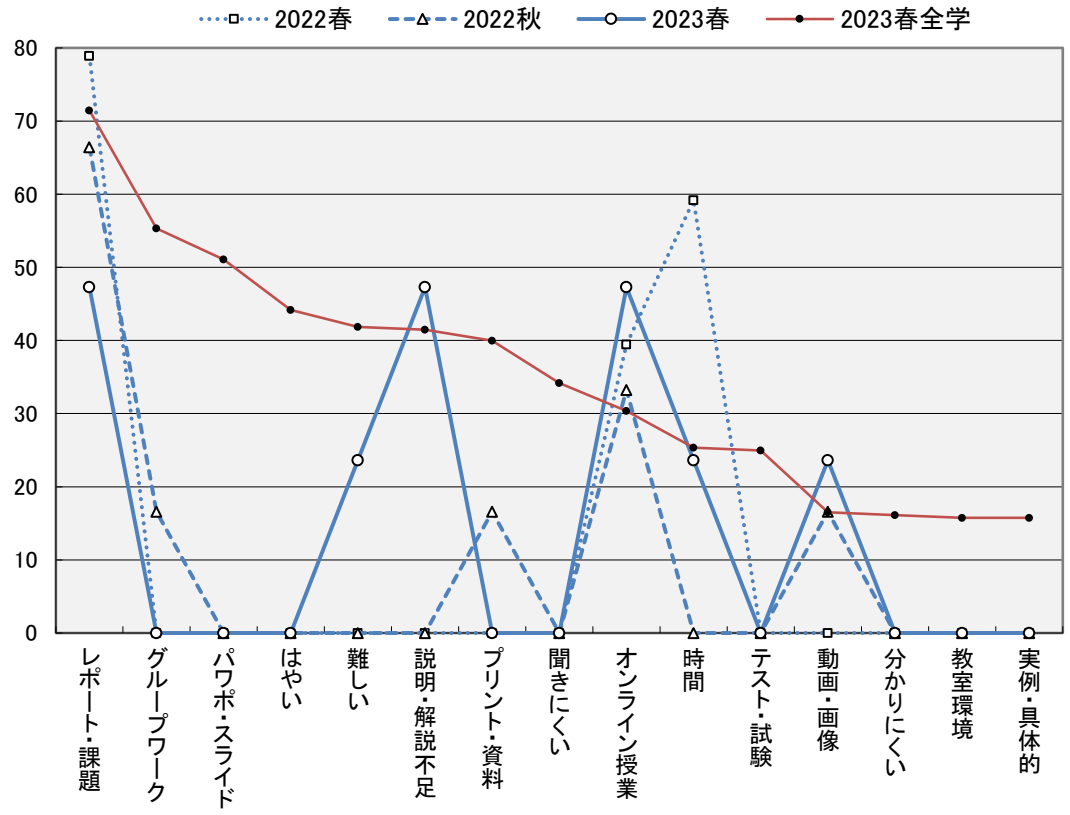


《Ⅰ類・第Ⅱ類(学部共通)・Ⅲ類》

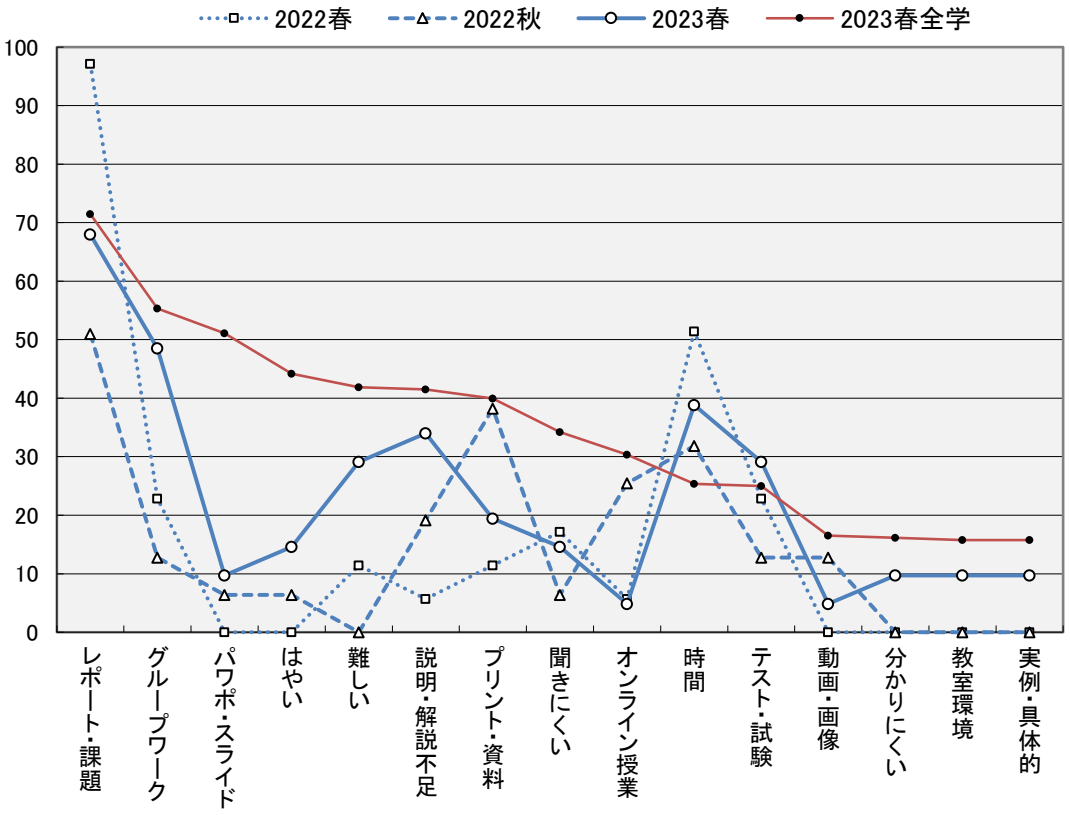


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

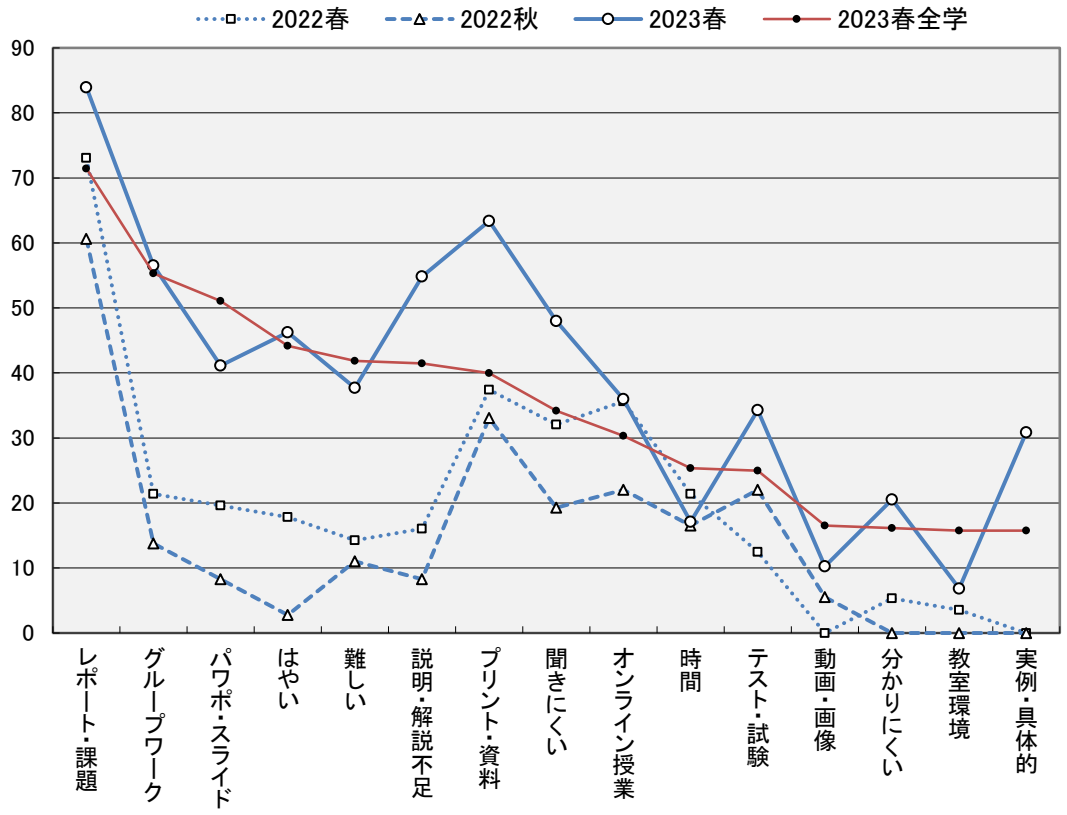


《4～9人》

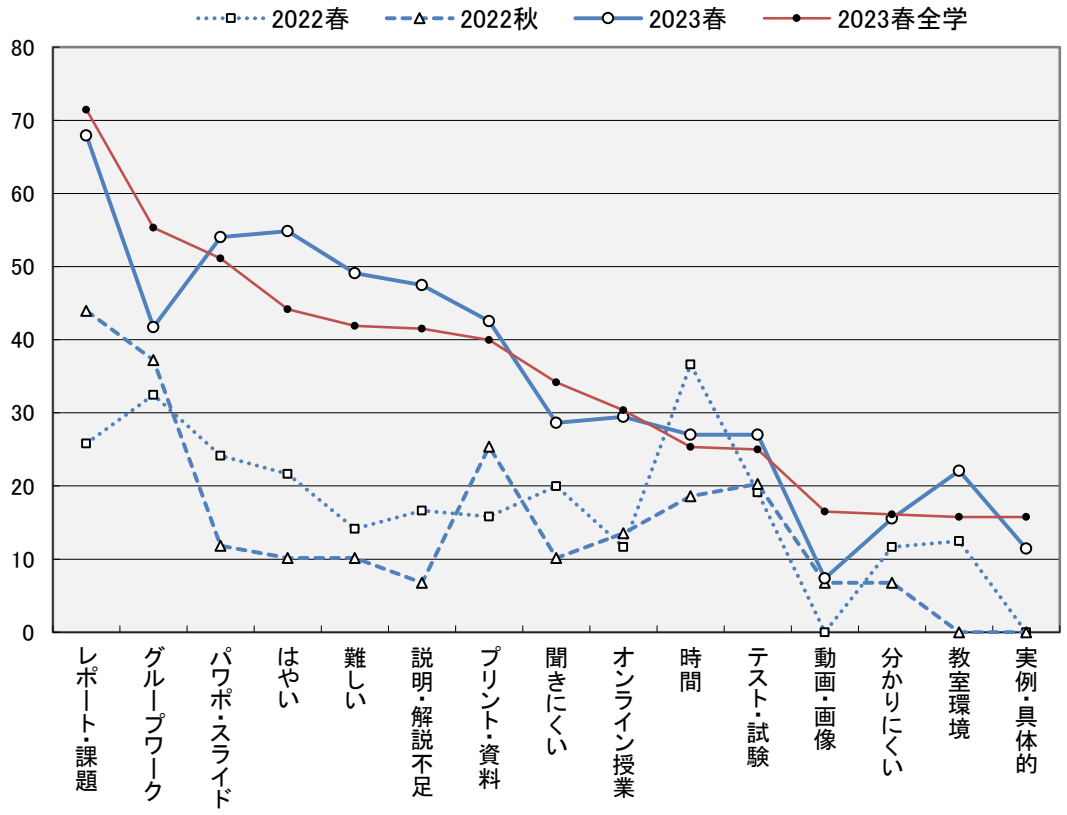


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《10～27人》

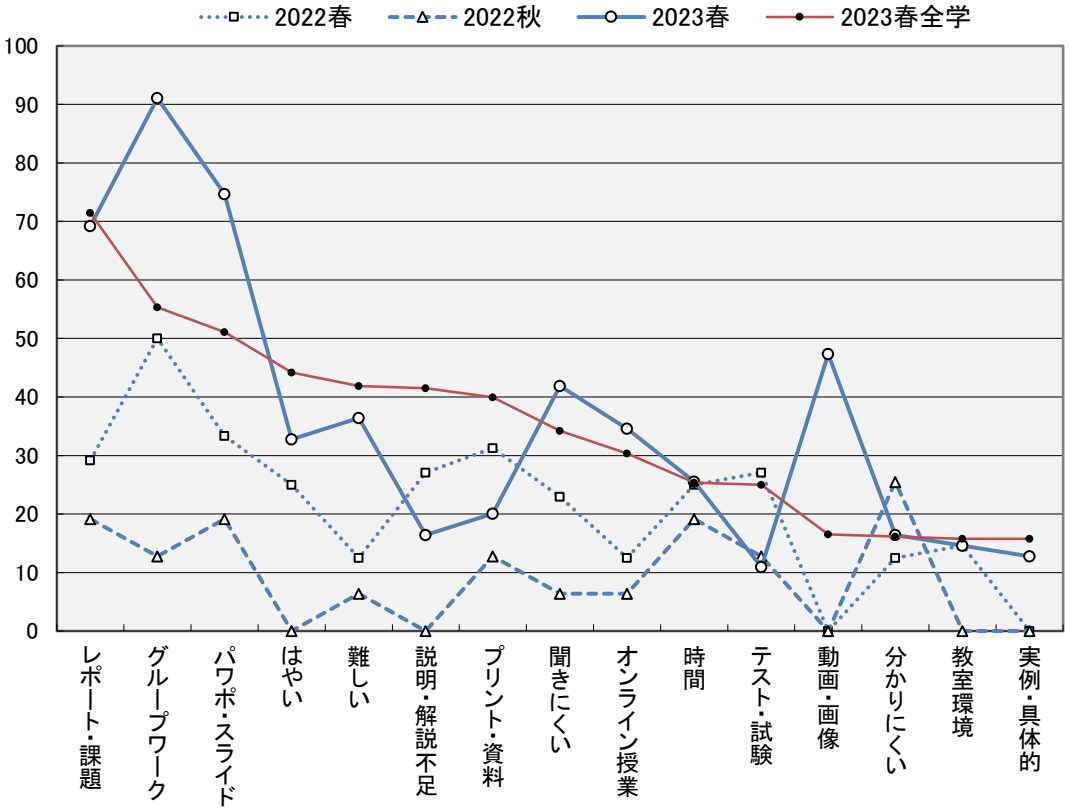


《28～81人》



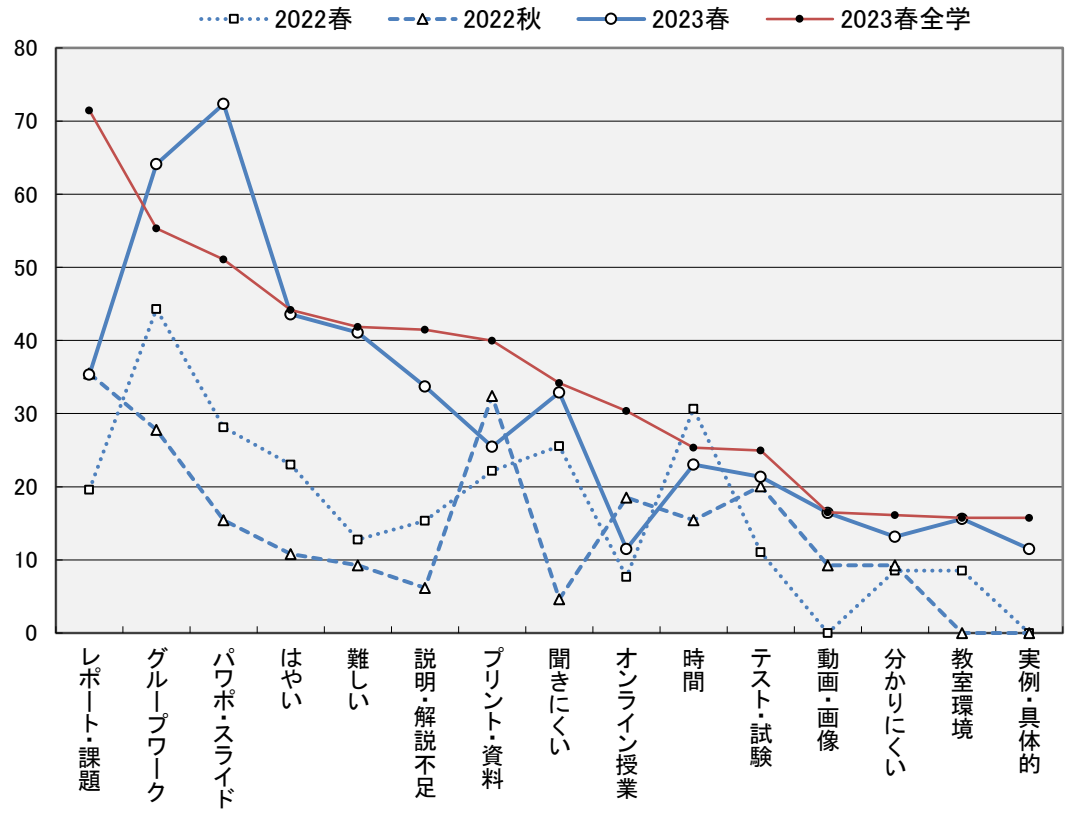
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《82人～》

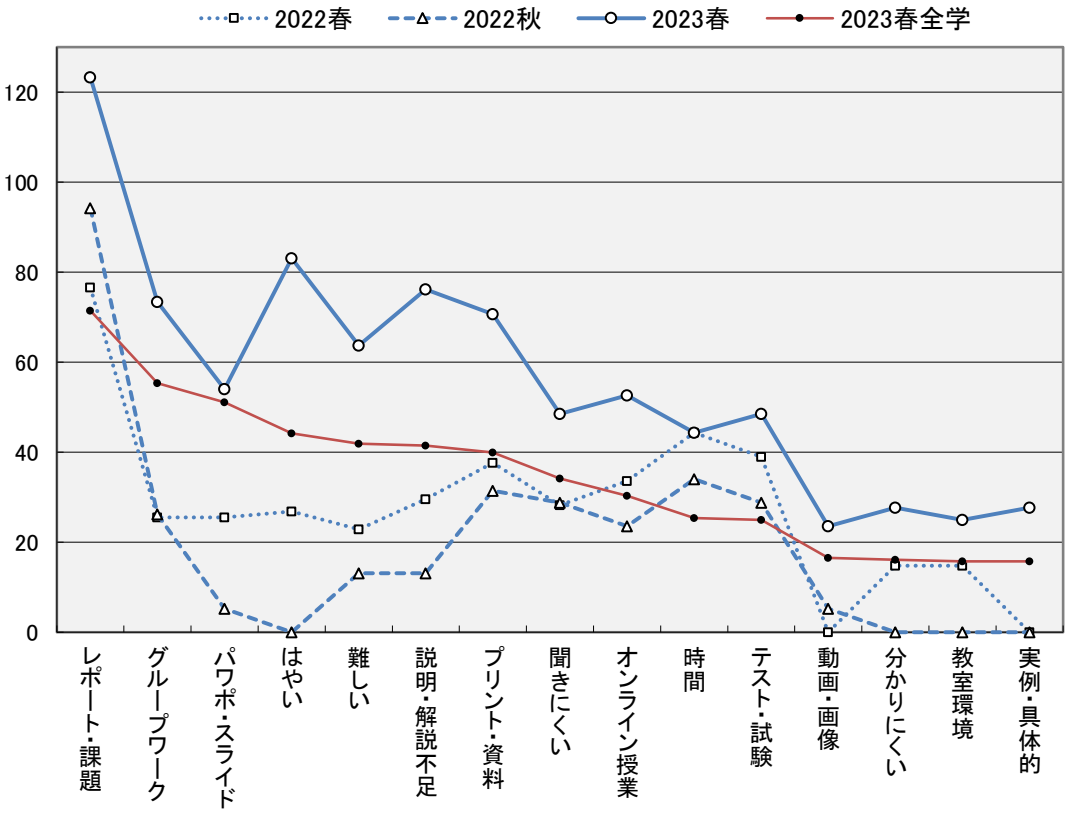


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

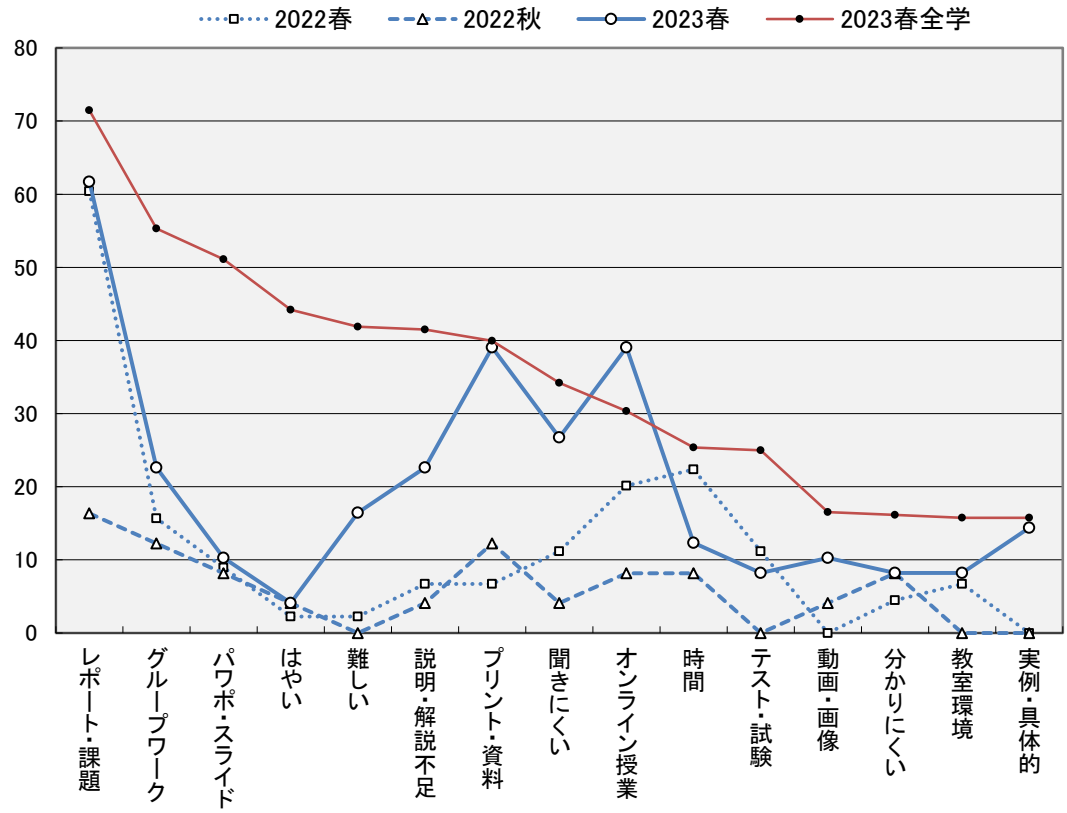
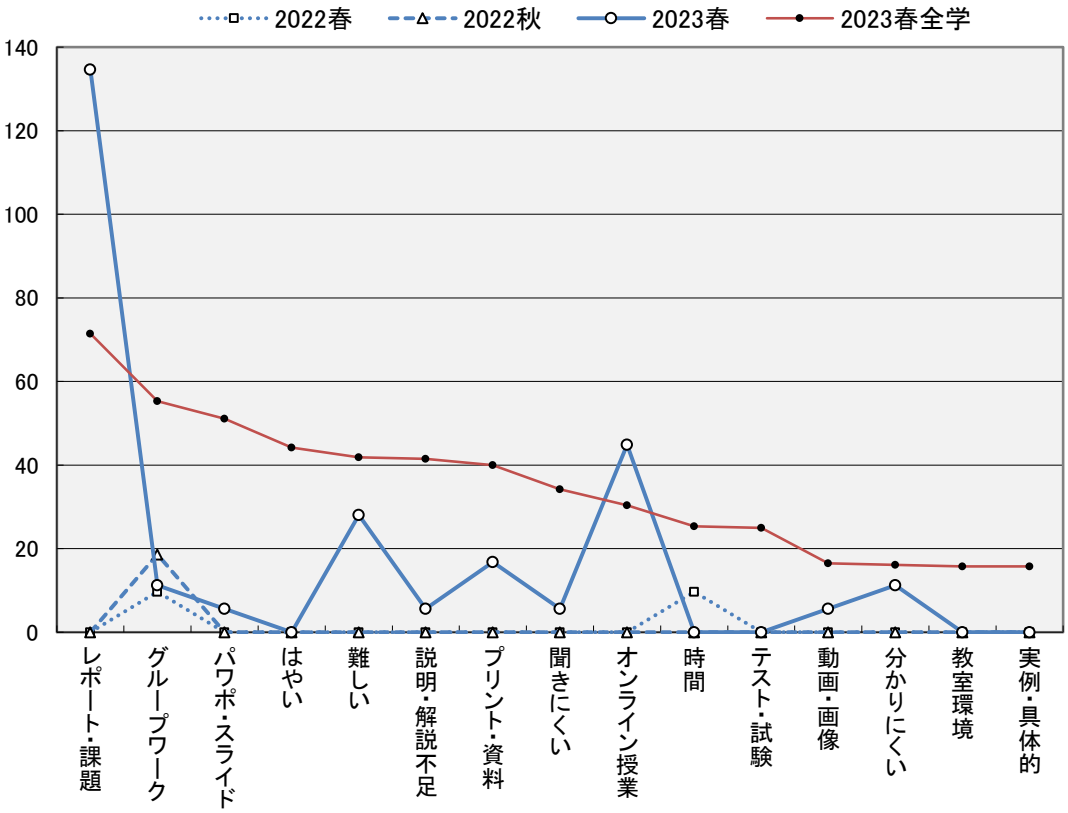


《2年》



自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



《4年》